

すりばち池古墳群

1993年3月

総社市教育委員会



すりばち池1号棺検出状況



すりばち池2号墳石室遺物出土状況

序

中国山地に源を発する高梁川の清流に育まれた総社平野は、温暖な気候と先人のたゆまざる努力によってもたらされた豊かな生産力により、吉備とよばれる一大勢力の中枢地となり、古くから日本の歴史を語る上で欠くことのできない貴重な文化財の宝庫として知られているところであります。これらの文化財のひとつひとつは、われわれの誇りであり、かけがえのない財産といって過言ではありません。

このたび、総社市のスポーツの拠点として、総社北公園を計画し、現在その完成にむけて努力をいたしておりますが、予定地内の埋蔵文化財については、関係各位のご理解を賜り、新規に発見された遺跡もあわせて多数の遺跡の保存が図られ、市民が気軽に利用できる実物による歴史学習の場として整備されることは、まことに喜ばしい限りであります。

今後とも、文化財の保護保存と開発との調和をはかり、また遺跡を現代に活かすべく努力をいたす所存でありますので、さらに一層のご理解とご協力をいただきますようお願い申しあげます。

平成5年3月

総社市教育委員会
教育長 浅沼 力

例　　言

1. 本書は、総社市教育委員会が平成元年度に発掘調査を実施した「すりばち池古墳群」の報告である。
2. 発掘調査は、総社市教育委員会社会教育課職員村上幸雄・谷山雅彦・高田明人・武田恭彰・前角和夫・高橋進一が担当した。
3. 出土品の整理は、社会教育課服部収蔵庫にて行い、報告書作成後は同所に保管している。
4. 本報告書は、谷山雅彦・高田明人・武田恭彰が分担執筆し、高田が編集した。なお、1号墳・5号墳・6号棺・7号棺の遺物の一部については高橋進一が実測・浄写を担当した。遺物写真の撮影は、高田が行った。
5. 出土遺物の整理、報告書の作成にあたっては、西平登代子（社会教育課服部収蔵庫）の協力を得た。
6. 本報告書の高度値は海拔高であり、遺構実測図の方位は磁北である。
7. 本報告書に使用した地形図は、総社市発行のものを複製したものである。
8. 本報告書に関する遺物実測図・写真等は、服部収蔵庫に保管している。
9. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、総社市文化財専門委員並びに多くの研究者の方々から教示を得た。記して謝意を表します。

近藤 義郎　葛原 克人　亀田 修一　新納 泉　平井 勝　福田 正継

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	高田明人	1
第1節 調査にいたる経緯		1
第2節 発掘調査の経過		3
第3節 調査の体制		4
第4節 遺跡の保存について		5
第2章 地理的歴史的環境	高田明人	6
第3章 発掘調査の概要	高田明人	9
第1節 弥生時代の遺構と遺物	高田明人	12
(1) 住居址		12
(2) 壺棺墓		12
(3) 遺構に伴わない遺物		13
第2節 古 墳		14
(1) 1号墳	武田恭彰	14
(2) 2号墳	高田明人	23
(3) 4号墳	高田明人	33
(4) 5号墳	武田恭彰	37
(5) 7号墳	武田恭彰	41
第3節 箱式石棺		44
(1) 1号棺	谷山雅彦	44
(2) 2号棺	武田恭彰	52
(3) 3号棺	谷山雅彦	54
(4) 4号棺	武田恭彰	55

(5) 5号棺	谷山雅彦	57
(6) 6号棺	武田恭彰	58
(7) 7号棺	武田恭彰	59
第4節 火葬墓	高田明人	61
(1) 1号墓		61
(2) 2号墓		61
(3) 3号墓		62
第5節 まとめ	高田明人	64
第4章 結語		68
すりばち池1号墳の石室について	高田明人	68

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 すりばち池古墳群位置図 (S=1/50,000)	2
第3図 すりばち池古墳群周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)	7
第4図 すりばち池古墳群調査範囲全体図 (S=1/3,000)	9
第5図 すりばち池古墳群調査前地形測量図 (S=1/500)	10
第6図 すりばち池古墳群調査後地形測量図 (S=1/500)	11
第7図 住居址平・断面図 (S=1/80)	12
第8図 壺棺墓平・断面図 (S=1/20)	13
第9図 壺棺墓出土遺物実測図 (S=1/6)	13
第10図 弥生時代出土遺物実測図 (土器 S=1/4 ・ 石器 S=1/2)	13
第11図 1号墳墳丘測量図 (S=1/100)	14
第12図 1号墳墳丘土層断面図 (S=1/80)	16
第13図 1号墳石室平面図 (S=1/40)	17
第14図 1号墳石室閉塞部断面図 (S=1/40)	18
第15図 1号墳石室閉塞部石材見通し図 (S=1/40)	18
第16図 1号墳石室平・断面図 (S=1/40)	19
第17図 1号墳出土遺物実測図1 (S=1/4・1/6)	20
第18図 1号墳出土遺物実測図2 (S=1/2)	20
第19図 1号墳出土遺物実測図3 (S=1/4)	21
第20図 2号墳墳丘測量図 (S=1/100)	24
第21図 2号墳墳丘土層断面図 (S=1/80)	25
第22図 2号墳石室平・断面図 (S=1/40)	26
第23図 2号墳墳丘遺物出土状況図 (S=1/20)	27
第24図 2号墳石室遺物出土状況図 (S=1/20)	27
第25図 2号墳出土遺物実測図1 (S=1/4)	28
第26図 2号墳出土遺物実測図2 (S=1/4)	29
第27図 2号墳出土遺物実測図3 (S=1/4)	30
第28図 2号墳出土遺物実測図4 (S=1/2)	31
第29図 2号墳出土遺物実測図5 (S=1/1)	32
第30図 4号墳墳丘測量図 (S=1/100)	34

第31図	4号墳墳丘土層断面図 (S=1/120)	35
第32図	4号墳石室床面遺物出土状況図 (S=1/80)	35
第33図	4号墳出土遺物実測図1 (S=1/4)	35
第34図	4号墳出土遺物実測図2 (S=1/2)	36
第35図	5号墳墳丘土層断面図 (S=1/100)	37
第36図	5号墳石室平・断面図 (S=1/60)	38
第37図	5号墳石室床面平・断面図 (S=1/40)	39
第38図	5号墳石室床面平・断面図 (S=1/40)	40
第39図	5号墳出土遺物実測図1 (S=1/4)	40
第40図	5号墳出土遺物実測図2 (S=1/2)	41
第41図	7号墳墳丘測量図 (S=1/100)	42
第42図	7号墳石室平・断面図 (S=1/30)	43
第43図	1号棺平・断面図 (S=1/30)	44
第44図	1号棺床面遺物出土状況図 (S=1/20)	45
第45図	1号棺出土遺物実測図1 (S=1/6)	45
第46図	1号棺出土遺物実測図2 (S=1/4)	46
第47図	1号棺出土遺物実測図3 (S=1/4)	47
第48図	1号棺出土遺物実測図4 (S=1/1)	47
第49図	1号棺出土遺物実測図5 (S=1/2)	48
第50図	1号棺出土遺物実測図6 (S=1/2)	49
第51図	1号棺出土遺物実測図7 (S=1/2)	50
第52図	2号棺蓋石検出状況図 (S=1/30)	52
第53図	2号棺出土遺物実測図 (S=1/4)	52
第54図	2号棺平・断面図 (S=1/30)	53
第55図	3号棺平・断面図 (S=1/30)	54
第56図	4号棺平・断面図 (S=1/30)	55
第57図	5号棺平・断面図 (S=1/30)	56
第58図	5号棺遺物出土状況図 (S=1/20)	57
第59図	5号棺出土遺物実測図 (土器 S=1/4 ・ 鉄器 S=1/2)	57
第60図	6号棺平・断面図 (S=1/40)	58
第61図	6号棺出土遺物実測図 (土器 S=1/4 ・ 鉄器 S=1/2)	58
第62図	7号棺平・断面図 (S=1/30)	59

第63図	7号棺出土遺物実測図 (S=1/4)	60
第64図	1号墓検出状況図 (S=1/20)	61
第65図	1号墓出土遺物実測図 (S=1/4)	61
第66図	2号墓検出状況図 (S=1/20)	62
第67図	2号墓出土遺物実測図 (S=1/4)	62
第68図	3号墓検出状況図 (S=1/20)	63
第69図	3号墓出土遺物実測図 (S=1/4)	63

表 目 次

第1表	1号棺出土鉄器計測表	51
-----	------------------	----

図 版 目 次

巻頭 原色図版 すりばち池1号棺検出状況

すりばち池2号墳石室遺物出土状況

図版1	1. すりばち池古墳群近景（調査前・南から）	2. すりばち池古墳群近景 (調査後・南から)	79
図版2	1. 壺棺墓検出状況	2. 弥生時代出土遺物	80
図版3	1. 1号墳近景（調査前・北から）	2. 1号墳全景（調査後・北から)	81
図版4	1. 1号墳石室奥壁	2. 1号墳石室閉塞部	82
図版5	1. 1号墳石室閉塞部	2. 1号墳閉塞部馬具出土状況	83
図版6	1. 1号墳墳丘土層断面	2. 1号墳周溝遺物出土状況	84
図版7	1号墳出土遺物1		85
図版8	1. 1号墳出土遺物2	2. すりばち池古墳群出土鉄滓	86
図版9	1. 2号墳全景（調査後・北から）	2. 2号墳石室（北から)	87
図版10	1. 2号墳墳丘遺物出土状況	2. 2号墳石室遺物出土状況	88
図版11	2号墳出土遺物1		89
図版12	1. 2号墳出土遺物2	2. 2号墳出土遺物3	90
図版13	1. 4号墳近景（調査前・南から）	2. 4号墳全景（調査後・東から)	91
図版14	1. 4号墳遺物出土状況	2. 4号墳出土遺物	92
図版15	1. 5号墳全景（調査後・南から）	2. 5号墳石室検出状況	93

図版16	1. 5号墳石室内遺物出土状況 1	2. 5号墳石室内遺物出土状況 2	94
図版17	5号墳出土遺物		95
図版18	1. 7号墳全景（東から）	2. 7号墳全景（南から）	96
図版19	1. 1号棺土器床検出状況（北から） 3. 1号棺勾玉出土状況	2. 1号棺検出状況（南から） 4. 1号棺鉄器出土状況	97 97
図版20	1号棺出土遺物		98
図版21	1. 2号棺蓋石検出状況 3. 2号棺検出状況	2. 2号棺遺物検出状況 4. 2号棺出土遺物	99 99
図版22	1. 3号棺検出状況 3. 4号棺出土遺物	2. 4号棺検出状況	100 100
図版23	1. 5号棺蓋石検出状況 3. 5号棺遺物出土状況	2. 5号棺検出状況	101 101
図版24	1. 5号棺出土遺物 3. 6号棺出土遺物	2. 6号棺遺物出土状況	102 102
図版25	1. 7号棺検出状況	2. 7号棺遺物出土状況 1	103
図版26	1. 7号棺遺物出土状況 2	2. 7号棺出土遺物	104
図版27	1. 1号墓検出状況	2. 2号墓検出状況	105
図版28	1. 1号墓出土遺物 3. 3号墓出土遺物	2. 2号墓出土遺物	106 106

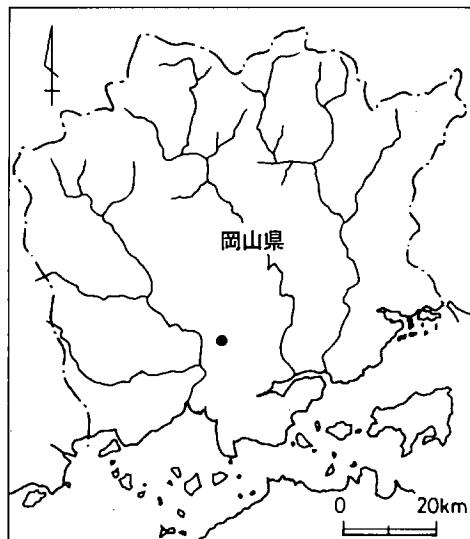
第1章 調査の経緯

第1節 調査にいたる経緯

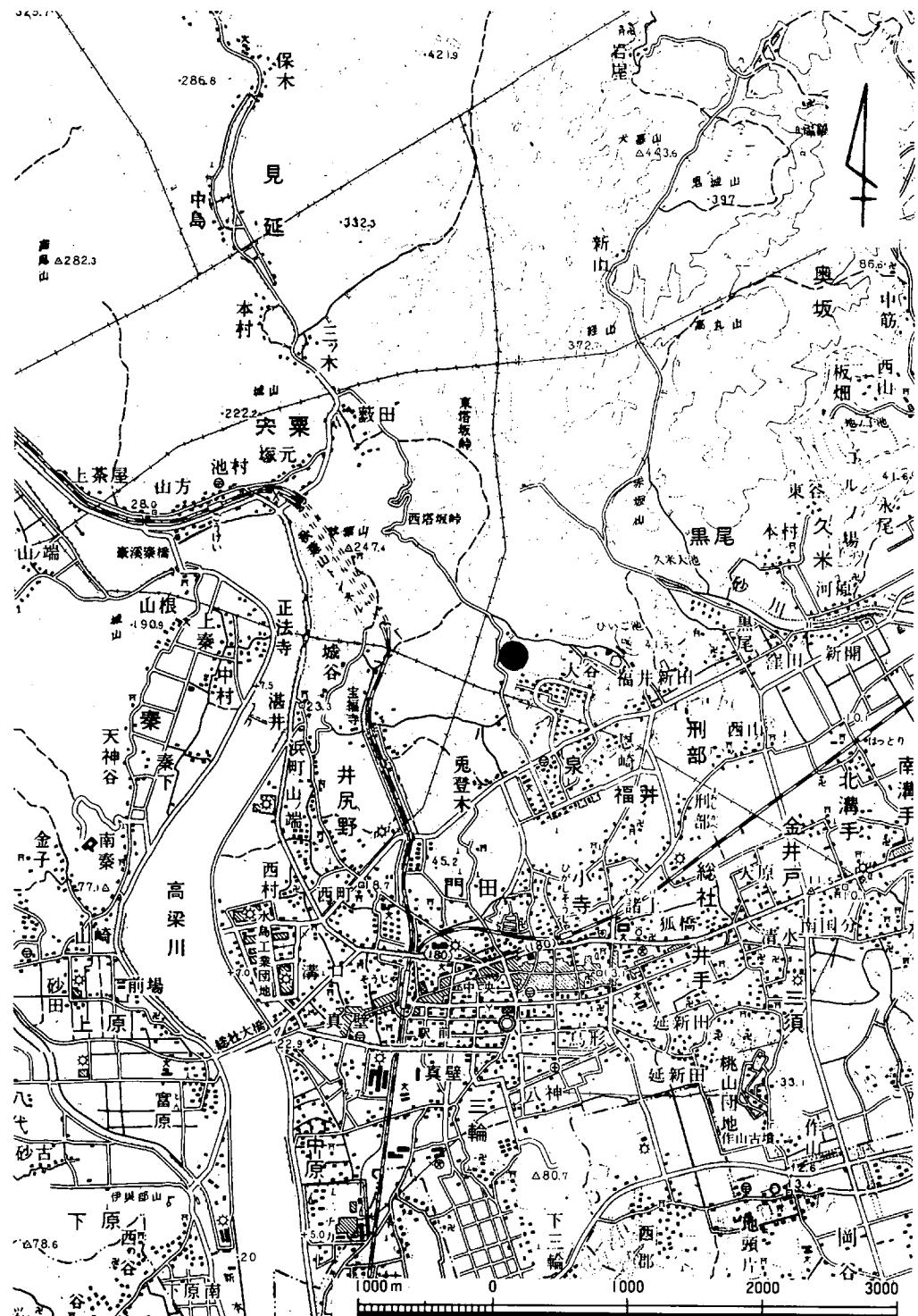
今回発掘調査を行ったすりばち池古墳群は、総社市小寺1188番地に所在する。遺跡は、総社平野に向けて張り出す低丘陵上に立地するが、現在ではすぐそばまで住宅街となっており、また近年は、付近に墓地が造成されたり、障害児のための学習施設が建設されるなど、開発が徐々に進みつつある。

今回の調査の契機となった運動公園の建設設計画は、昭和58年ごろから構想が示されていたもので、当初はテニスコート等を整備するという計画であった。この計画をうけて数度にわたって周辺の遺跡の分布調査を実施したが、当該地には昭和40年代に総社団地（現在の泉ニュータウン）建設に伴う分布調査の際にすでに4基の古墳の存在が知られていた。その後、昭和56年に、そのうちの1基であるすりばち池3号墳が市道の拡幅工事に伴って発掘調査され、1・2・4号墳の3基が残されていた。また、すりばち池3号墳の調査の際には、弥生土器が出土していたため、付近に弥生時代の集落遺跡などの存在する可能性が考えられた。昭和62年になって、この運動公園は名称を総社北公園とし、当初の予定よりも範囲を拡大し8.2haの面積に400mトラックなどを備える本格的な陸上競技場として整備されることが決定した。

造成及び施設の整備計画にあたっては、予定地の一部がかつての住宅団地開発計画時に文化財の存在することによって対象区域からはずされて、保存がはかられてきたという経緯を十分考慮して、できる限り現状保存をはかることができるよう事業課と協議を重ねた。その結果、原則としては緑地帯の一部に取り込んで保存するという大まかな方向は見えてきたが、全体のレイアウトとの関係で3基の古墳のすべてを現状のままで保存することは技術的に困難であることから、おのおのの遺構の状況を把握したうえで、保存のために必要な措置を講ずることとし、発掘調査を実施することになった。造成工事は、平成



第1図 遺跡の位置



第2図 すりばち池古墳群位置図 ($S = 1/50,000$)

2年度末までに完了するというスケジュールが示されたため、工事着手に先立って平成元年度に発掘調査を実施した。

第2節 発掘調査の経過

伐採が終了し、現況地形測量及び写真撮影ののち、平成元年6月6日に1・2・4号墳を対象として発掘調査に着手した。しかしながら、対象地よりもさらに北側斜面上方の当初の計画範囲外に5号墳が天井石を露出しているのが確認され、さらに、この部分で伐採を実施したところ、新たに古墳らしい低平なたかまりを二ヵ所発見し、6・7号墳とした。また、丘陵頂部では弥生土器片の散布がみられた。

調査は、丘陵頂部の7号墳から開始したが、6号墳は、調査の結果、明瞭な墳丘及び埋葬施設が認められず、二次的な自然のたかまりであると考えられた。したがって、すりばち池古墳群は昭和56年に発掘調査が行われ、すでに消滅した3号墳を含めて合わせて6基の古墳で構成されることが判明した。

また5号墳の前庭部の調査中に、2基の火葬墓を検出した。さらに、これら火葬墓の南側で箱式石棺が発見されたのをはじめとして、合計7基の箱式石棺が検出されたため、古墳の調査と併行して調査を実施した。

弥生土器は、前回の3号墳の調査時に墳丘盛土中などから出土していたが、今回は丘陵頂部で壺棺墓1基が知られたほか、2号墳の東側に土器溜まりが認められ、ここからは、磨製石剣の破片1点も検出されている。この範囲では、住居址は検出されなかったため、弥生時代においては集落の縁辺部らしい状況が考えられた。

調査途上の平成元年9月7日には、現地見学会を開催し、土曜日の午後にもかかわらず約300人の参加があった。

調査は平成元年10月14日に終了した。7号墳以東については、分布調査において遺跡の存在は知られておらず、また保安林の解除手続きが完了していなかったため調査を見送っていたが、平成2年秋になって伐採が行われ、造成工事が予定されたので、平成2年10月15日から10月17日の間、バックホウを使用して確認調査を実施した。その結果、弥生時代の住居址1棟、奈良時代の火葬墓1基が検出されたため、これらについては、記録保存のための調査を実施した。

調査の実施途上には、近藤義郎先生をはじめとして多くの研究者の方々に現地において御教示・御指導を賜った。

また、調査の実施に伴い、総社市役所都市計画課職員諸氏には、現地における測量のほか、多岐にわたって援助を得た。なお、工事を担当された総社建設・高杉組の両社には、調査の趣

旨を理解され御協力をいただいた。

第3節 調査の体制

調査組織

総社市教育委員会

教育長 浅沼 力

教育次長 秋山 昇

社会教育課（文化係）

課長 樋口 文男

主幹 村上 幸雄

係長 森田 忠志

主事 三宅 正吉（庶務）

〃 谷山 雅彦（調査）

〃 高田 明人（〃）

〃 武田 恭彰（〃）

〃 前角 和夫（〃）

主事補 高橋 進一（〃）

作業員

秋山貞一 秋山哲夫 安藤恒雄 今川鹿夫 今西克己 大倉政志 猶村由夫 那須皓三

入谷 隆 平井 豊 平田一太郎 平田富雄

岸本清子 松本和子 吉富静子 近藤とみゑ

第4節 遺跡の保存について

当初この総社北公園の計画範囲内には、3基の古墳の存在が知られており、できうるかぎり緑地として保存するという合意がなされたが、設計が具体化するにしたがって、アプローチ部分に位置する2号墳は、トラックの計画高との較差などを考慮しても、現状での保存が困難となつたため、記録保存とせざるを得なかった。1・4号墳の2基は前面の道路面の高さとさほど隔たりがないところに位置することから緑地の一部に取り込むことができるよう造成計画を検討するという前提で調査に着手した。したがって1・4号墳の2基については、現地での保存を前提とした調査を行った。しかし、調査の途中に新たに発見された5・7号墳の古墳2基については、古墳群の変遷を考えるうえで重要な資料であるので、保存のための協議を重ねたが現状での保存はできなかつた。7号墳の近くの丘陵頂部付近で検出された弥生時代の壺棺墓、5号墳の前庭部で新たに検出された火葬墓2基についても同様である。7基の箱式石棺は、当初の計画では、1号墳の周溝に接して検出された1号棺を除いて現状での保存は困難と考えられていたが、実際に造成工事が進行していくうちに当初の見込みよりも多くの土量が確保されたために古墳の存在する部分で掘削を行う範囲を縮小することが可能となり、2～4号棺及び6・7号棺については、現状での保存が可能となつた。また、2号墳の南下にあった5号棺は、当初の計画では2号墳と同様に現状での保存はできなかつたが、蓋石が残るなど保存状態が良好だったので、次善の策として1号棺と6号棺の間の平坦面に移築を行つた。したがつて2・5・7号墳の3基の古墳及び火葬墓2基・壺棺墓を除いた古墳2基と箱式石棺7基については、保存がはかられたのである。

1号墳は、竪穴系横口式石室という、これまであまり例のみられなかつた特異な形態の石室をもつため、本来は開口した状態での保存が最善であるが天井石の一石が外され開口していることや羨道（横口）部分が崩れかかっていること、また腰石の上にたてかけられた状態になっている閉塞石が玄室内に倒れこむおそれがあるため、開口部に天井石を架構しなおして、天井石上にも若干の盛土を行つて遺構そのものを保護するという方法を選ぶこととした。将来、説明板や表示板等が設置される際には、石室の状況がわかるような表示を行うよう検討している。4号墳は、横穴式石室であったと考えられるが、すでに石室の石材すべてが抜きとられていたために石組の状況を知ることができないので、墳丘盛土を復元して芝張りを行い、本来の墳丘のボリュウムの再現という方法で整備を行つた。

箱式石棺は、もとあった石材を露出させているが、本来の底面より上まで埋め戻し、さらに石棺内に土砂が流入しないように斜面の上方に若干の土盛りをしたうえで芝張りを行つた。1・4号棺の須恵器床は土器を取り上げたため、床面は土床となっている。

第2章 地理的歴史的環境

すりばち池古墳群は、総社平野の北縁にひろがる丘陵のやや奥まった位置にある。

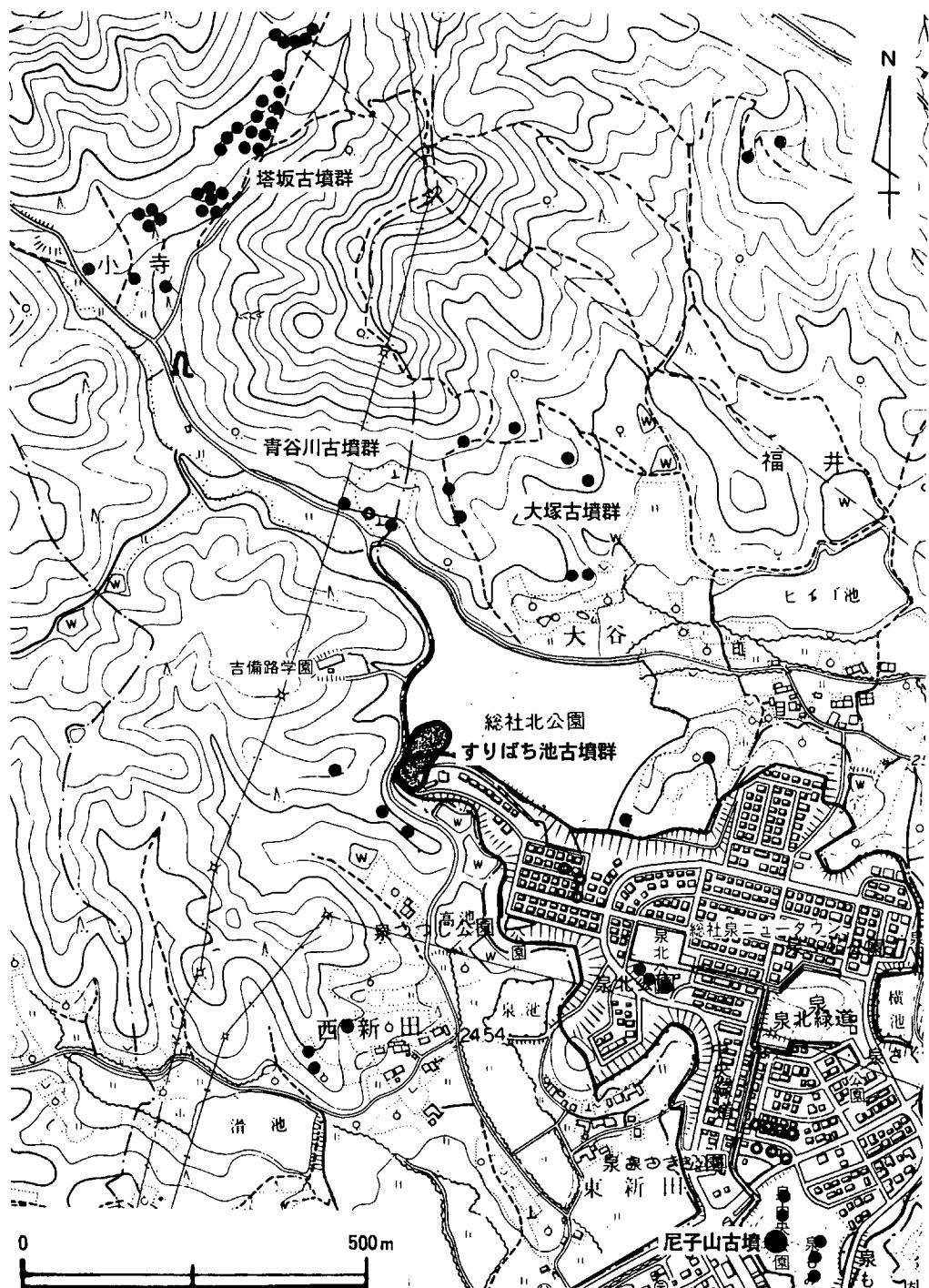
まず先土器時代の遺跡では、浅尾遺跡・宝福寺裏山遺跡（註1）の2遺跡が知られている。弥生時代のものは、調査例は多くないが、福井・刑部など現在の集落にはほぼ重複して、集落が営まれていたと考えられる（註2）。さきのすりばち池3号墳の調査時にも、墳丘や周溝などから弥生中期の土器片などが出土していたから、このあたりには小規模な集落の存在した可能性がある。

古墳では、前半期に属するものとして全長約50mの前方後円墳である井山古墳（註3）が南西800mのJR伯備線に沿って南にのびる丘陵上に立地するほか、南東900mの所に位置する直径約40mの大円墳で5世紀代の築造と考えられる尼子山古墳（註4）が近辺の古墳のなかでは傑出した規模をもつものである。

現在の泉団地が建設される際の分布調査等の資料によれば、西山から黒尾にかけての丘陵上には夥しい数の古墳のあったことがわかる。泉団地の造成に伴って発掘調査されたものは、古墳および小石室等12基（註5）を数えることができ、この中には、古式の須恵器を伴うものもある（註6）。現在では正確な数をあげることは困難であるが、この付近では特に戦後果樹の栽培がさかんになる以前は、かなりの数の古墳があったと考えられ、早い段階から須恵器の出土についての報告がなされている（註7）。

総社平野の周辺では、秦原廃寺（註8）をはじめとして、仏教寺院の建立が早くから始まったことがよく知られている。すりばち池古墳群の近くでは、雪舟ゆかりの寺として著名な臨済宗東福寺派中本山宝福寺（山号井山）の前身が天台宗の寺院であったらしいこと、また北東へ約5km隔たった新山の山上に新山廃寺（註9）をはじめとしたいわば山上仏教の聖地があつたといわれていることなどが知られるにとどまる。

最近の付近の調査例としては、市道工事に伴う、すりばち池3号墳（註10）のほか、青谷川をはさんだ北側の青谷川2・3号墳及び製鉄関連遺構（註11）などがある。青谷川をさらに遡ったせまい谷に面した東斜面には、塔坂古墳群が存在する。これは横穴式石室を主体部とするものが大半で、総数20基以上からなる。このような、平野から著しく奥まった、少なくとも農業生産の基盤を持たない位置に群集する古墳については、発掘調査が実施されていないためになお疑問が残るが、単にこの地が墓域として利用されたと言うよりも青谷川やその付近に散見される製鉄に関わる木炭窯らしい遺構の存在（註12）から、たとえば古墳時代のある段階において製鉄に何らかの関わりをもつ集団が新たにこの付近に拠点をつくり、その一角に古墳群を残した可能性も考慮しうるかもしれない。

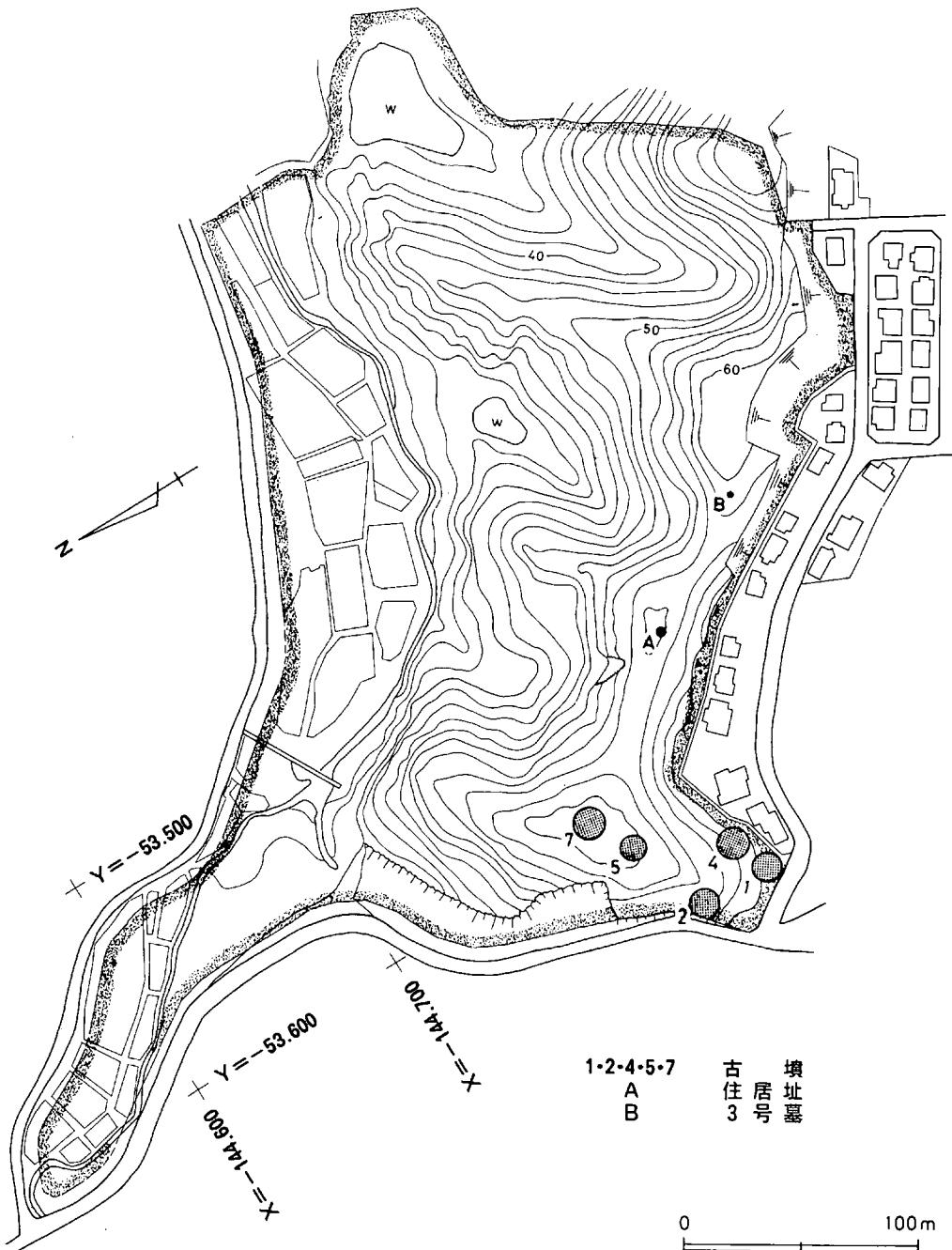


第3図 すりばち池古墳群周辺遺跡分布図 (S=1/10,000)

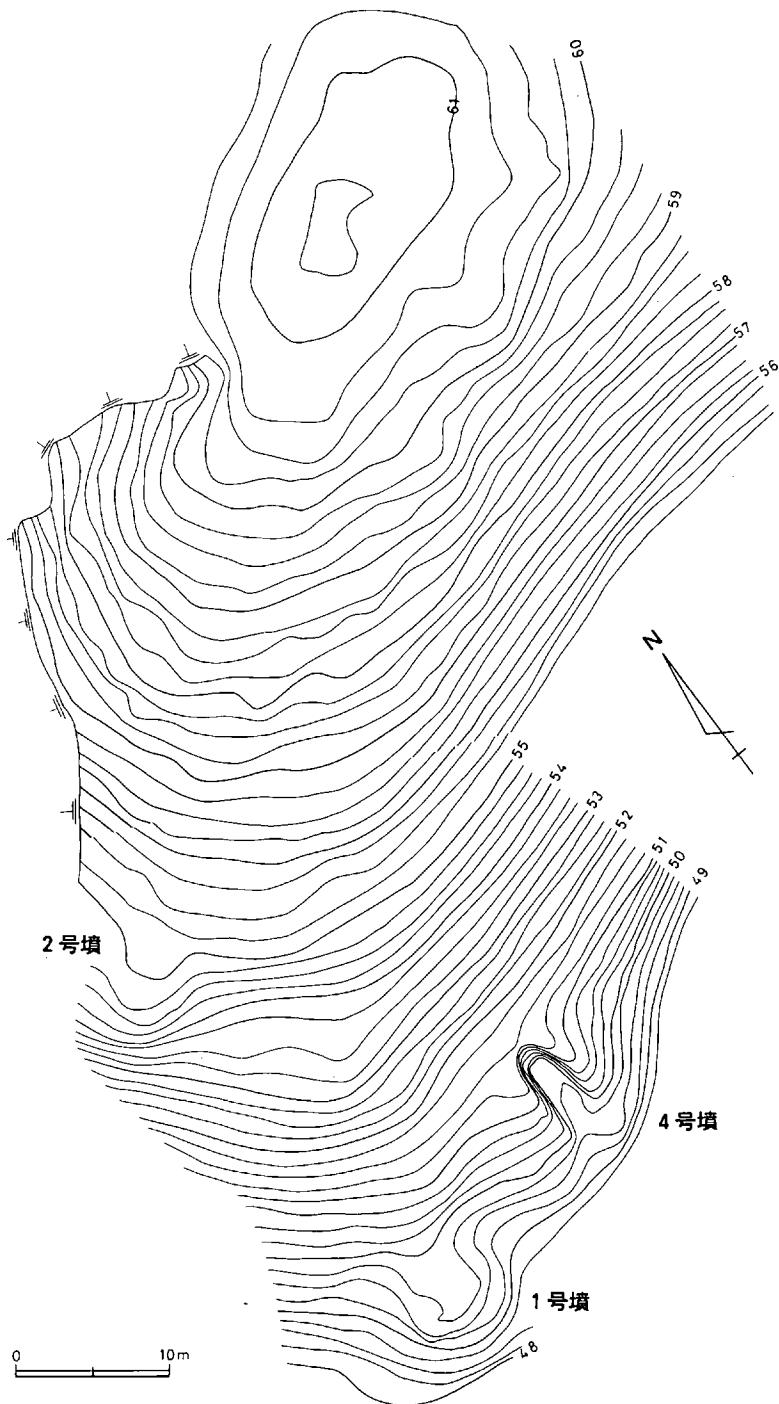
註

- 註1 鎌木義昌・小林博昭「浅尾遺跡」『総社市史 考古資料編』1987年 総社市
間壁葭子「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報第2号』1967年 倉敷考古館
- 註2 備中國府関連の調査によって若干の調査を行っている。「備中国府緊急発掘報告」「総社市埋蔵文化財発掘調査報告7』1988年 総社市教育委員会
また、シカの線刻画を施した壺形土器を出土した堀遺跡は、刑部地区にある。
- 註3 中田啓司・近藤義郎「井山古墳」『総社市史 考古資料編』 1987年 総社市
- 註4 鎌木義昌・亀田修一「尼子山古墳」『総社市史 考古資料編』 1987年 総社市
- 註5 鎌木義昌・亀田修一「小寺古墳群」『総社市史 考古資料編』 1987年 総社市
鎌木義昌編「総社市西山周辺古墳群」「総社市文化財調査報告1』 1972年 総社市教育委員会
- 註6 前掲註5文献
- 註7 西川宏・今井亮「吉備地方須恵器編年資料集成(Ⅰ)」「古代吉備第2集」1958年 古代吉備研究会
- 註8 葛原克人「秦原廃寺」『総社市史 考古資料編』 1987年 総社市
- 註9 葛原克人「新山廃寺」『総社市史 考古資料編』 1987年 総社市
- 註10 高田明人「すりばち池3号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告1』1984年 総社市教育委員会
- 註11 前角和夫「青谷川古墳群・青谷川製鉄遺構」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告8』1991年 総社市教育委員会
- 註12 前掲註11書によれば、少なくとも3ヶ所はある。また、塔坂峠北側の森田地区でも存在が確認されている。

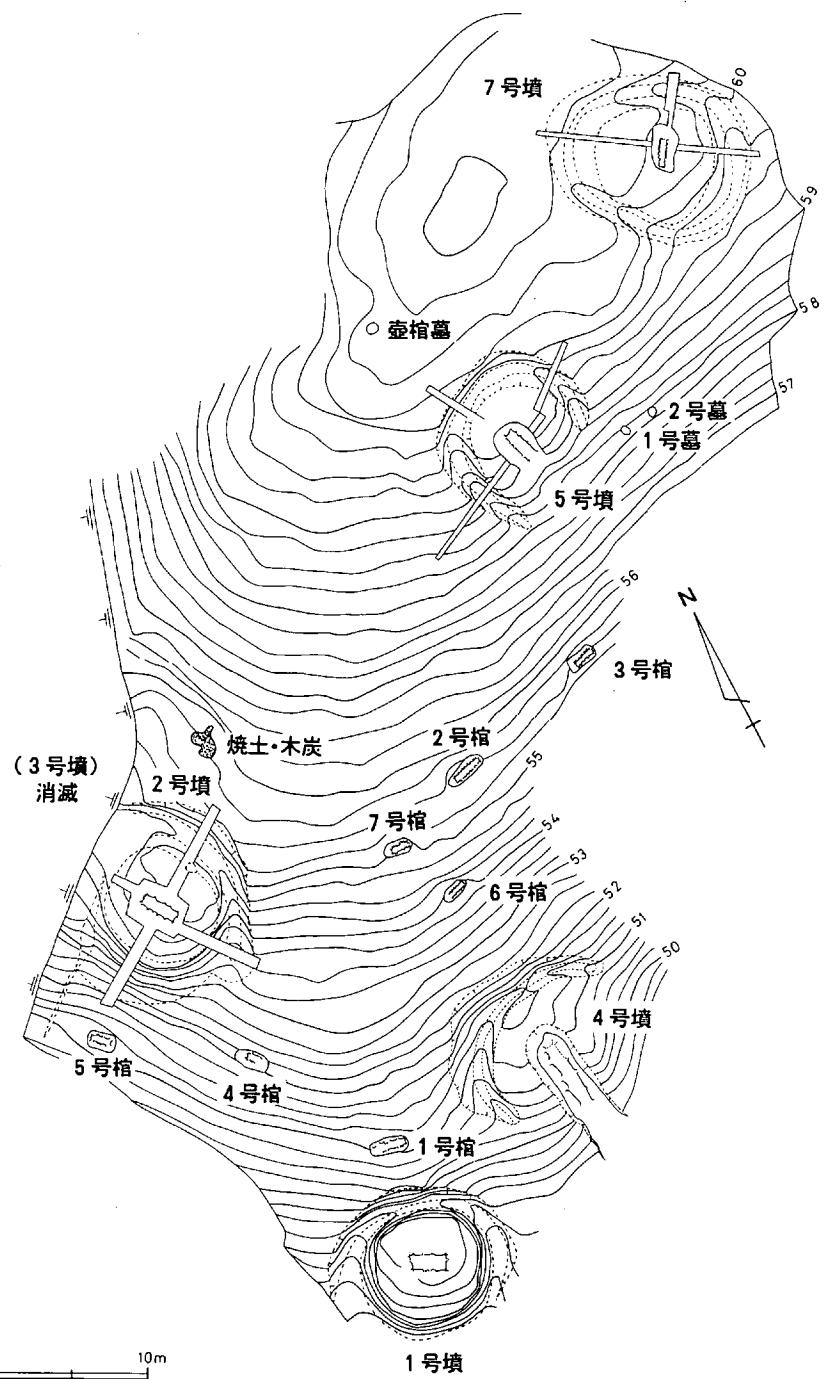
第3章 発掘調査の概要



第4図 すりばち池古墳群調査範囲全体図 (S=1/3,000)



第5図 すりばち池古墳群調査前地形測量図 ($S=1/500$)

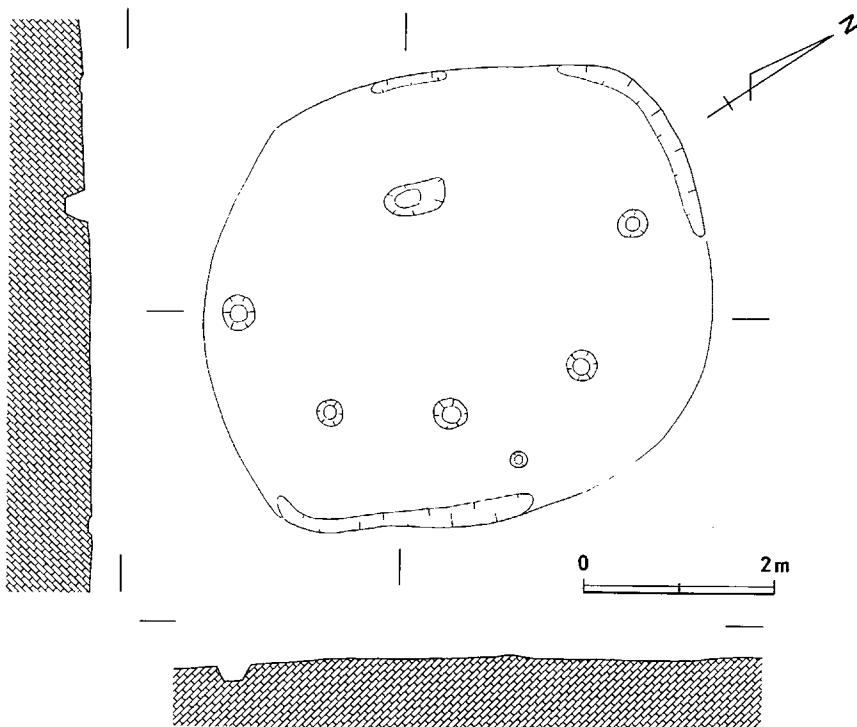


第6図 すりばち池古墳群調査後地形測量図 (S=1/500)

第1節 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居址

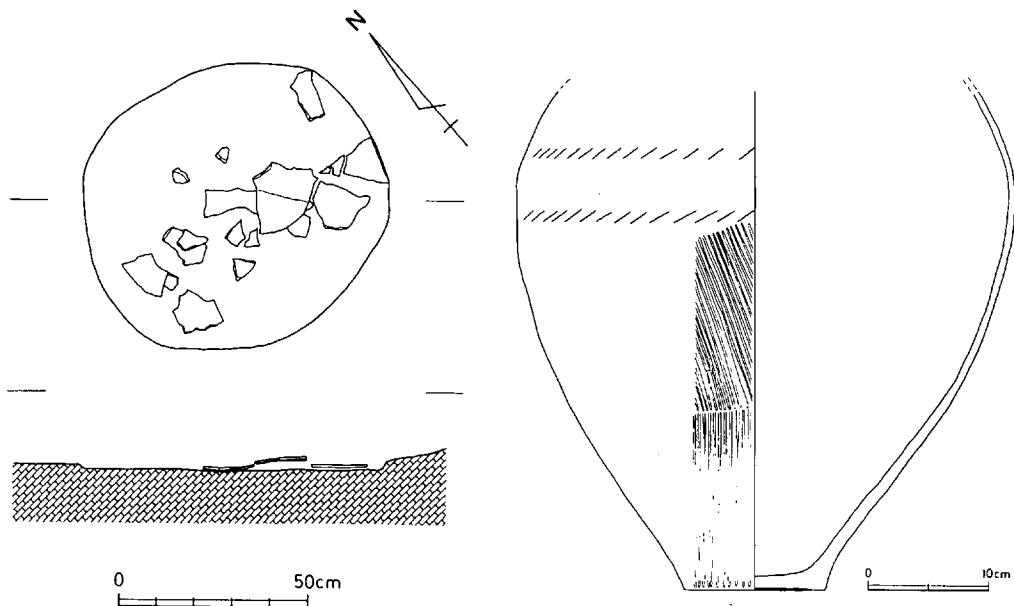
住居址は、平成2年に実施した確認調査時に検出された。東に延びる細い尾根の頂部付近に立地する。周囲を精査したが他に遺構はなく単独に存在するものと考えられた。遺構は深いところでも10cmあまりが残存したにすぎない。床面は円形のプランで、わずかに壁体溝状の窪みが認められた。柱は残存する柱穴の配置から8本であったようである。床面のほぼ中央には、焼土を伴う部分がある。遺物は、埋土中からごく少量の弥生土器片が出土したにとどまる。古墳群の周辺で検出されたものとあまり隔たりのない、弥生時代中期のものと考えられる。



第7図 住居址平・断面図 (S=1/80)

(2) 壺棺墓

尾根の5号墳の北側の尾根の頂部付近で検出された。浅い皿状の土壙に内面を上にむけた大きな土器片が散在しており、弥生土器の頸部を打ち欠いたものを棺に転用したものと推定される。土器は、壺の約1/2程度が復元できたが、肩部の上半から上は不明である。形態の特徴としては、胴の最大径が上半にあり、胴径に比べて底径は著しく小さい。時期は中期であろう。

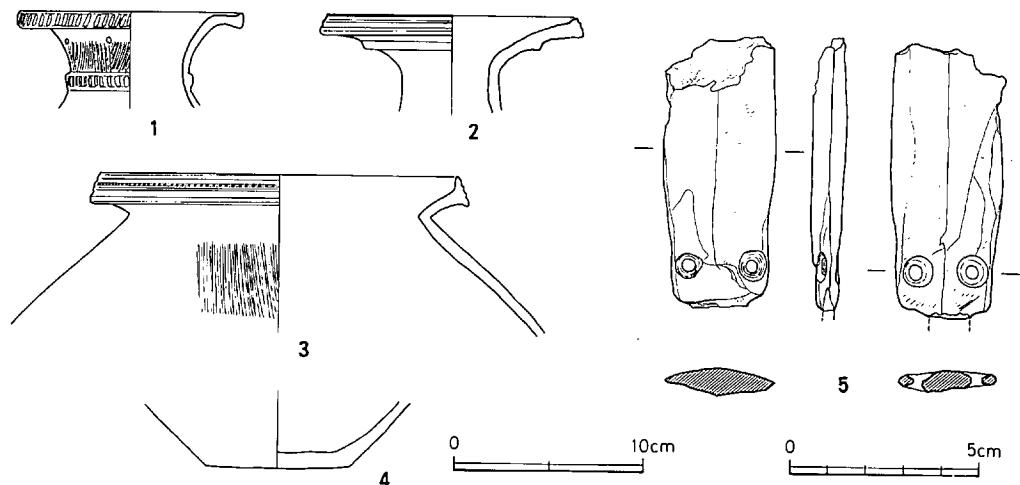


第8図 壺棺墓平・断面図 (S=1/20)

第9図 壺棺墓出土遺物実測図 (S=1/6)

(3) 遺構に伴わない遺物

尾根の頂部の西側及び2号墳東側などに土器溜まりが認められたが、遺構は確認されなかった。土器片のはかに、磨製石剣の破片（5）が出土している。弥生土器は、中期のもので、さきのすりばち池3号墳の調査時に知られたものと同様である。磨製石剣の破片は、細形銅剣を模したと考えられるもので、粘板岩製である。身の半ばから先を欠いており、また茎のつけ根の部分は折損したのちにわれ面を研磨している。



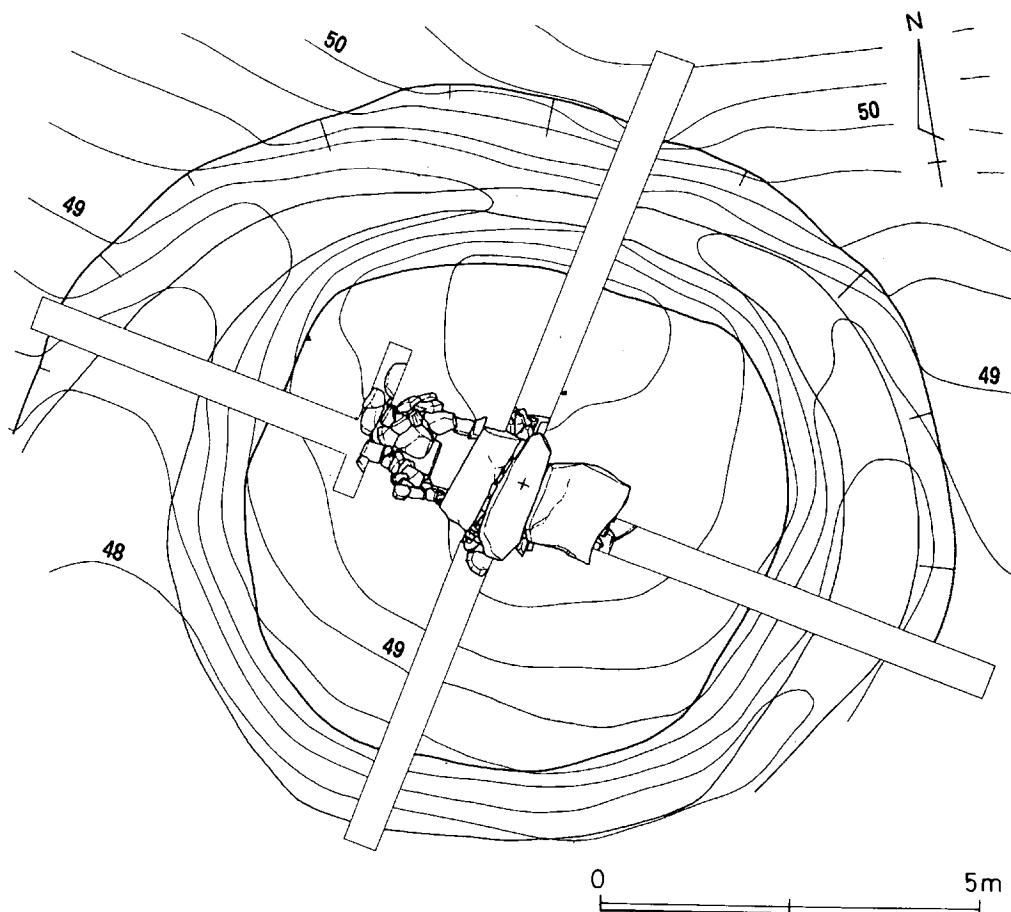
第10図 弥生時代出土遺物実測図 (土器 S=1/4 ・ 石器 S=1/2)

第2節 古 墳

(1) 1号墳

1号墳は、調査区南端、標高49m付近の緩斜面に位置している。調査前でも墳丘の高まりがはっきりわかり、天井石の1枚が石室内に転落し、石室は開口していた。

調査は、本墳が保存されることになっていたため、墳丘については、石室の長軸方向と短軸方向にそれぞれトレーナーを設定するにとどめた。また、閉塞部には、石室構造が特異な形態のものであったため、若干の補足のためのトレーナーを設定して断面観察を行った。石室については、流入土を除去、清掃するのみにとどめた。



第11図 1号墳墳丘測量図 ($S=1/100$)

墳丘と周溝

墳丘の盛土は、すでにかなり流出しており天井石の上面が露出していた。墳丘の構築においては、土層の状況を見るかぎりでは全体的にさほど堅固につき固められた形跡はないが、目の粗い砂質土を厚さ10cm程度の単位で積みあげている。閉塞石の付近では、特によく突き固められており、東側及び南側では後から追加したかのような盛土の存在が観察できた。

墳丘は、直径8.5～8.8mのやや長円形を呈する円墳で、山側である北面では、墳端のラインが弧状というよりむしろ直線的である。

周溝は、山側に半円状にめぐり、南側ではほとんど痕跡をとどめない。周溝は、山側では、比較的幅が狭く、断面はV字状を呈し急傾斜であるが、東及び西側では広く浅く掘られ、むしろ緩やかなテラス状となる。周溝の覆土中からは、埴輪片と須恵器甕の破片が溝の埋積途上で落ち込んだような状態で検出されている。

石室

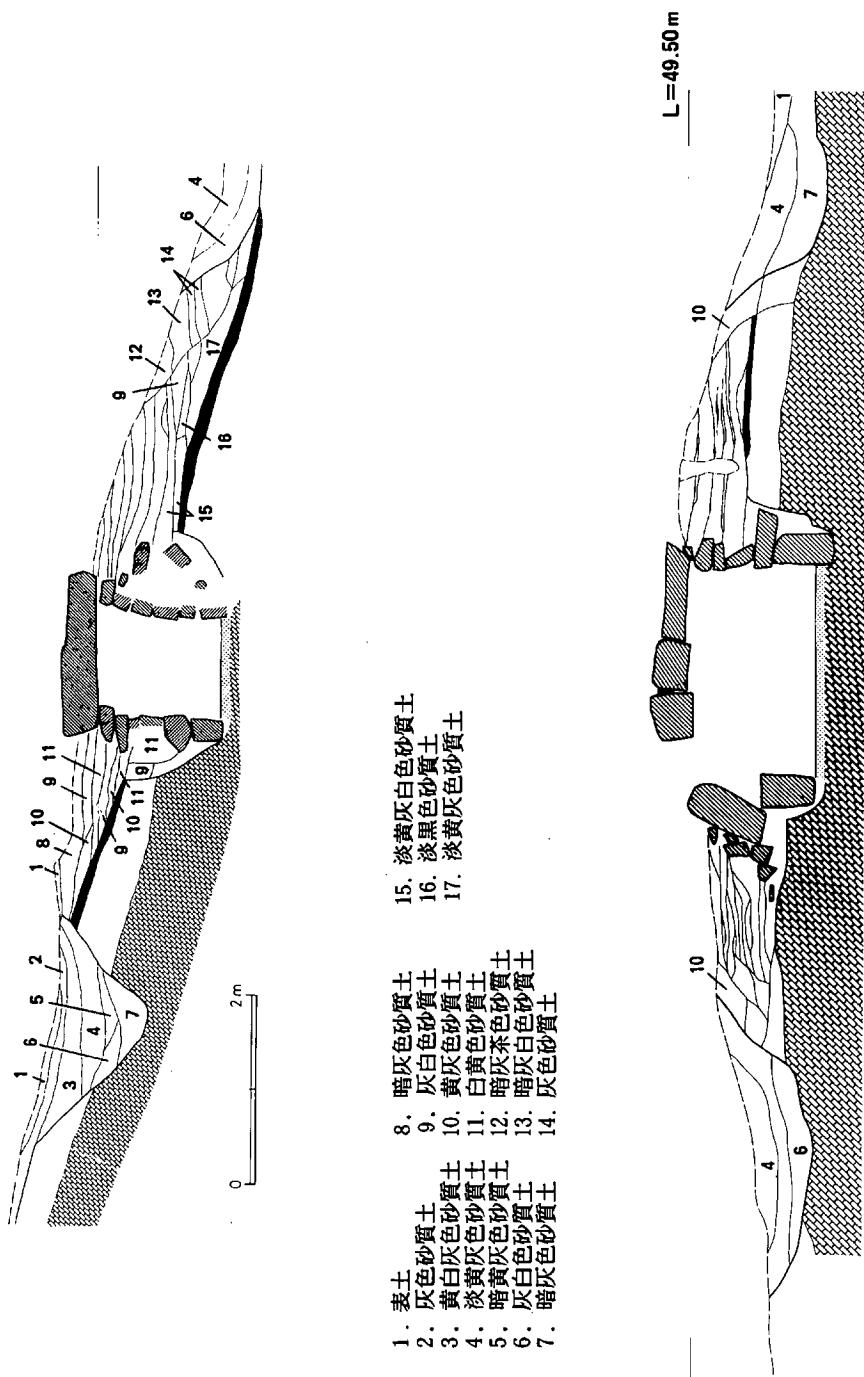
1号墳の石室は、調査前には竪穴式石室と認識されていた。しかし、調査着手後に西端に斜めになっている石を天井石がずれて転落したとも見えるので横穴式石室の可能性も考えられた。天井石は3枚が原位置にあり、石室の内法は長さ2.2m、幅1.0m、高さ1.3mを測り、石室及び墓壙の形態から、竪穴系横口式石室であることが判明した。基底部では四面とも比較的大型の石材を用い、特に奥壁と開口部の基底石の使い方はよく似ている。奥壁と側壁は、5段に積まれているが、いずれも上になるほど使われる石が小型化している点は共通している。側壁は、南壁が土圧によって若干せりだしているものの北壁はほとんど垂直になっている。

石室の掘り方は、平面では確認できなかったが、トレーナーの断面で観察した限りでは、2.5m×3.2mの長円形と想定できる。

床面は、石室がすでに開口していたこともあり、攪乱が著しく、黒褐色の腐植土中から土器・鉄器が破片となって検出されたにとどまる。また、石室内には長さ20cmほどの偏平石材などが散乱しているが、これらは天井石が取り除かれた際に転落した側壁のものである可能性がある。

閉塞施設

閉塞は、小口にあたる腰石状の2個の方形の基底石の上に80cm×50cm、厚さ40cmの長円形を呈するやや偏平な石材を小口に斜めにたてかけている。この石材の周囲は、小角礫で塞がれ、さらに土をよく突き固めて埋めなおされている。また、隙間に充填された石材の上からは鉄製の馬具の一部が出土している。閉塞部には、若干の産みがあり、墓道が意識されたものと思われる。なお、閉塞石と側壁の石材の関係からみると、追葬の行われた可能性は低いと思われる。



第12図 1号墳墳丘土層断面図 ($S=1/80$)

出土遺物

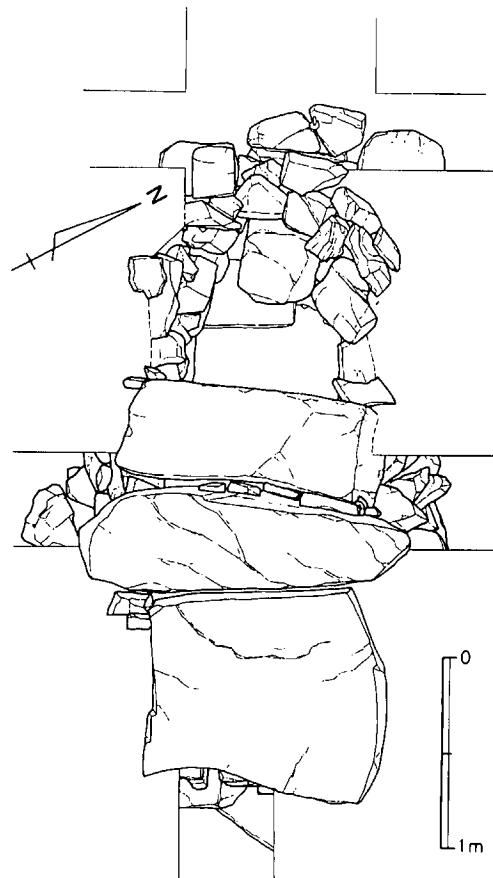
出土遺物は、石室内の攢乱土中から出土した須恵器（第17図1・2）・鉄器・鉄滓、閉塞部の馬具（第18図）、周溝内の須恵器（第17図3）・円筒埴輪（第19図）などがある。

石室内から出土した壺・蓋は、ほぼ完形に復元できるもので、暗灰色を呈する。焼成は良好。底部・天井部がまるみを帯び、口縁端はまるくおさめる。蓋は、体部との境に退化した凹線を施す。これらは6世紀後半ごろと考えられる。

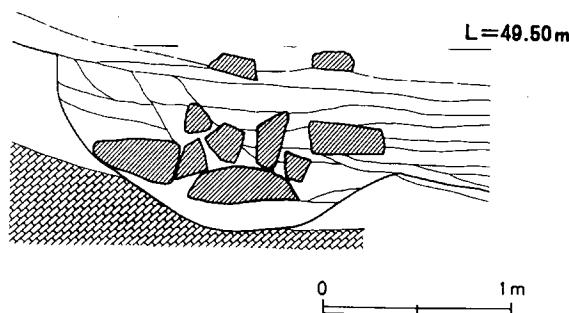
周溝から出土した須恵器は、図示した甕がほぼ完形に復元できた以外に壺・蓋・壺などの細片もある。甕は、口縁端を上下に拡張し、ほぼ球形の胴部をもつ。灰色を呈し、頸部から肩部にかけて自然釉が付着する。これは、1号墳の周溝外に存在した1号棺の土器床に用いられたものに形態が似ており、石室から出土した壺・蓋より明らかに古い様相を示すことなどからみて、本来は1号棺に伴ったものであった可能性も皆無ではない。

鉄器（第18図）は、長頸鎌の破片（1・2）と、刀子（3）、刀の破片（4）が出土している。また、鉄滓1点が石室内から出土している。重量は32gである。鞍は閉塞石の外側で出土した。錆着が著しいが、形態としては総社市こうもり塚古墳（註1）出土例に近似する。

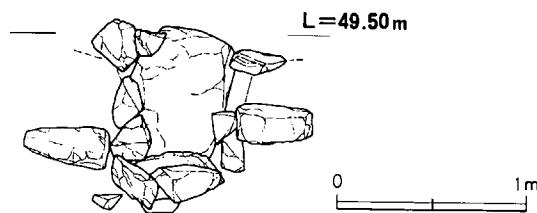
埴輪（第19図）は、すべて周溝が埋没しはじめてからのちに流入した状態で出土し、墳丘上には認められなかった。円筒埴輪と朝顔形埴輪がある。また、円筒埴輪は、須恵質のもの（1～3）と赤褐色のものがある。須恵質のものが全体に占める割合は低く、図示した3個体のみと考えられる。いずれも灰褐色を呈し、硬く焼き締まっている。胎土中に砂粒を多く含む。2が胴径が極端に小さいのを除けば大きさや成形技法等において赤褐色のものと著しい差は生じていない。



第13図 1号墳石室平面図 (S=1/40)



第14図 1号墳石室閉塞部断面図 ($S=1/40$)

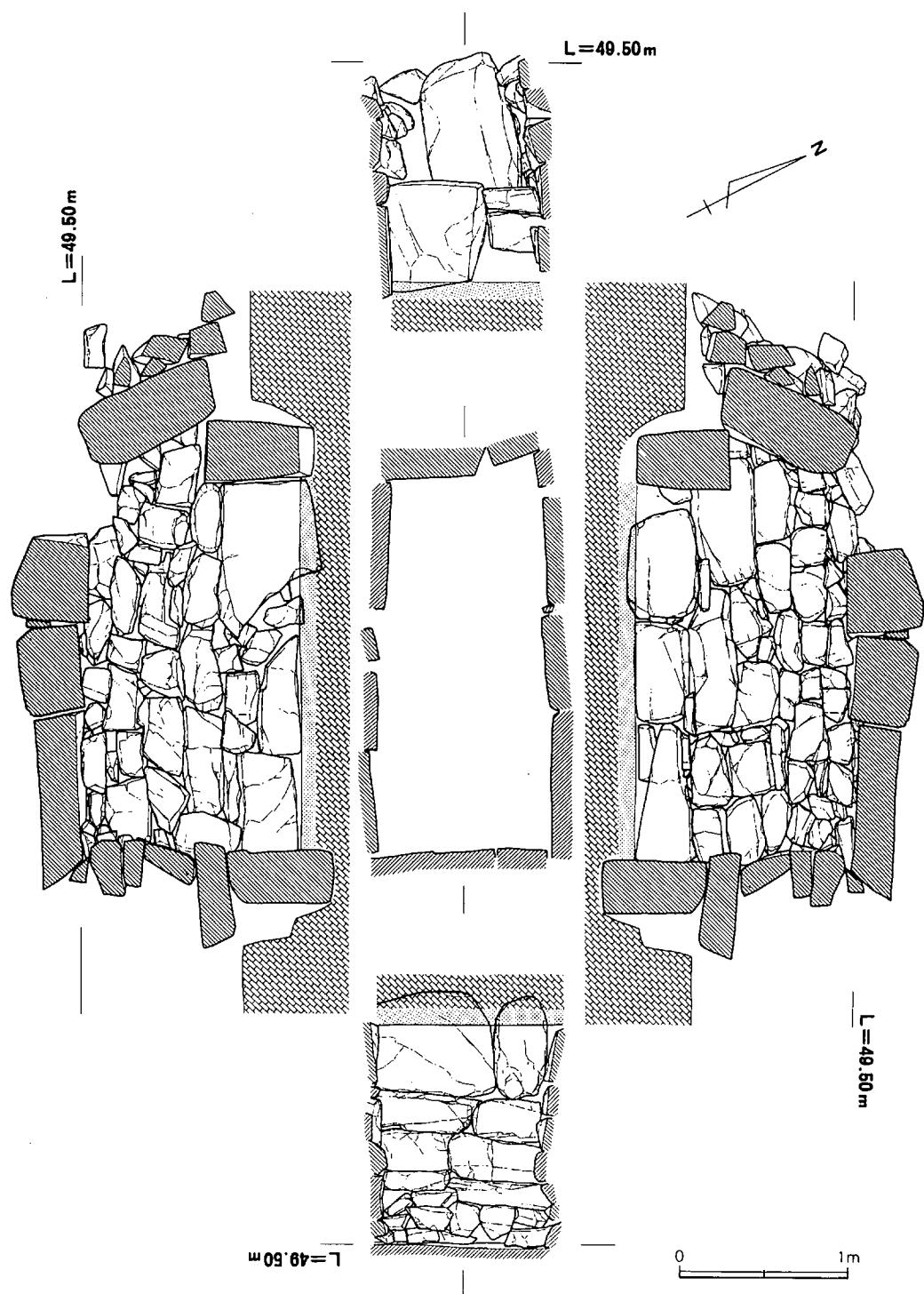


第15図 1号墳石室閉塞部石材見通し図 ($S=1/40$)

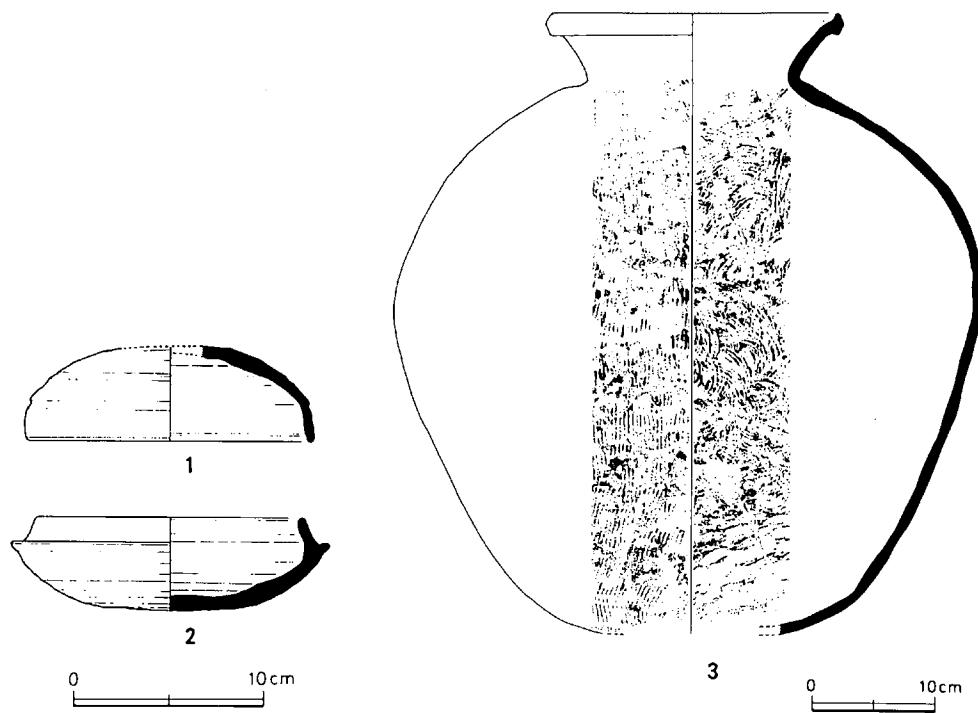
赤褐色を呈するものは、黒斑をのこすものは見受けられない。円形の透かし孔を穿つ。表面の調整は、タテハケのみである。タガは断面台形ないし三角形を呈する。

すりばち池1号墳は、小円墳であるが、閉塞部で馬具が出土し、墳丘上に円筒埴輪を樹立していたと考えられ、同規模の横穴式石室を主体部とするすりばち池3号墳などとは異なった様相を見せている。石室は、竪穴系横口式石室と考えられ、この種の石室で閉塞部が完存していたものとしてはまれな例（註2）である。また、石室内が攢乱を受けているため、出土遺物からの検討はできないが、閉塞部の状況からみると、追葬が行われた可能性は低い。

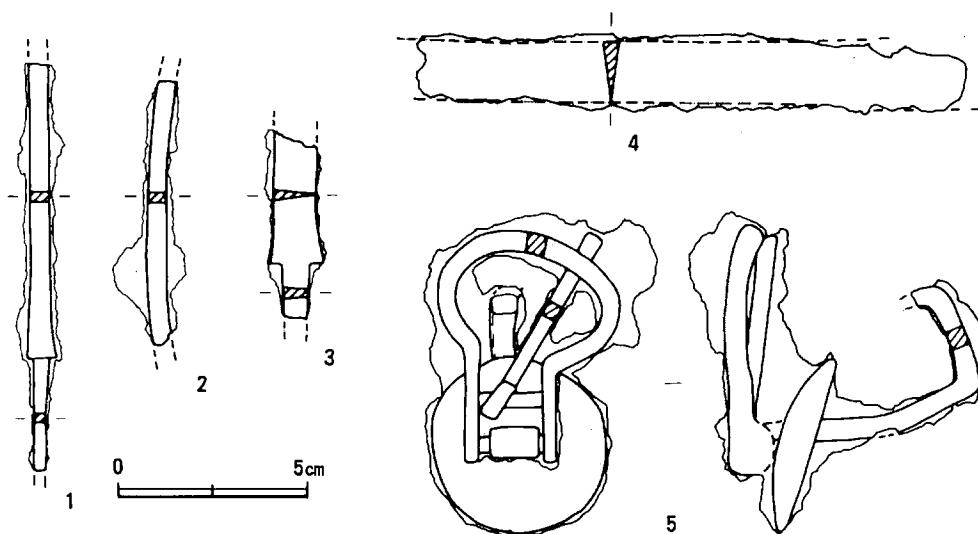
築造年代は、石室内の須恵器の特徴からみると6世紀後半と考えられる。しかし、石室が開口していたこと、また土器が攢乱土中からの出土である点からいま少し確実さに欠けると言わざるを得ないであろう。一方円筒埴輪は、出土状況からみて他の古墳に伴うものが混入したとは認めがたいから、これが確実な年代の間接的たてががりと言えよう。本墳と同様な埴輪の出土例としては、総社市殿山東斜面採集の資料（註3）などをあげることができる。これらはおよそ6世紀中葉以降の時期と考えられるから、すりばち池1号墳の築造年代は6世紀中葉以降に求めるのが妥当ではなかろうかと思われる。



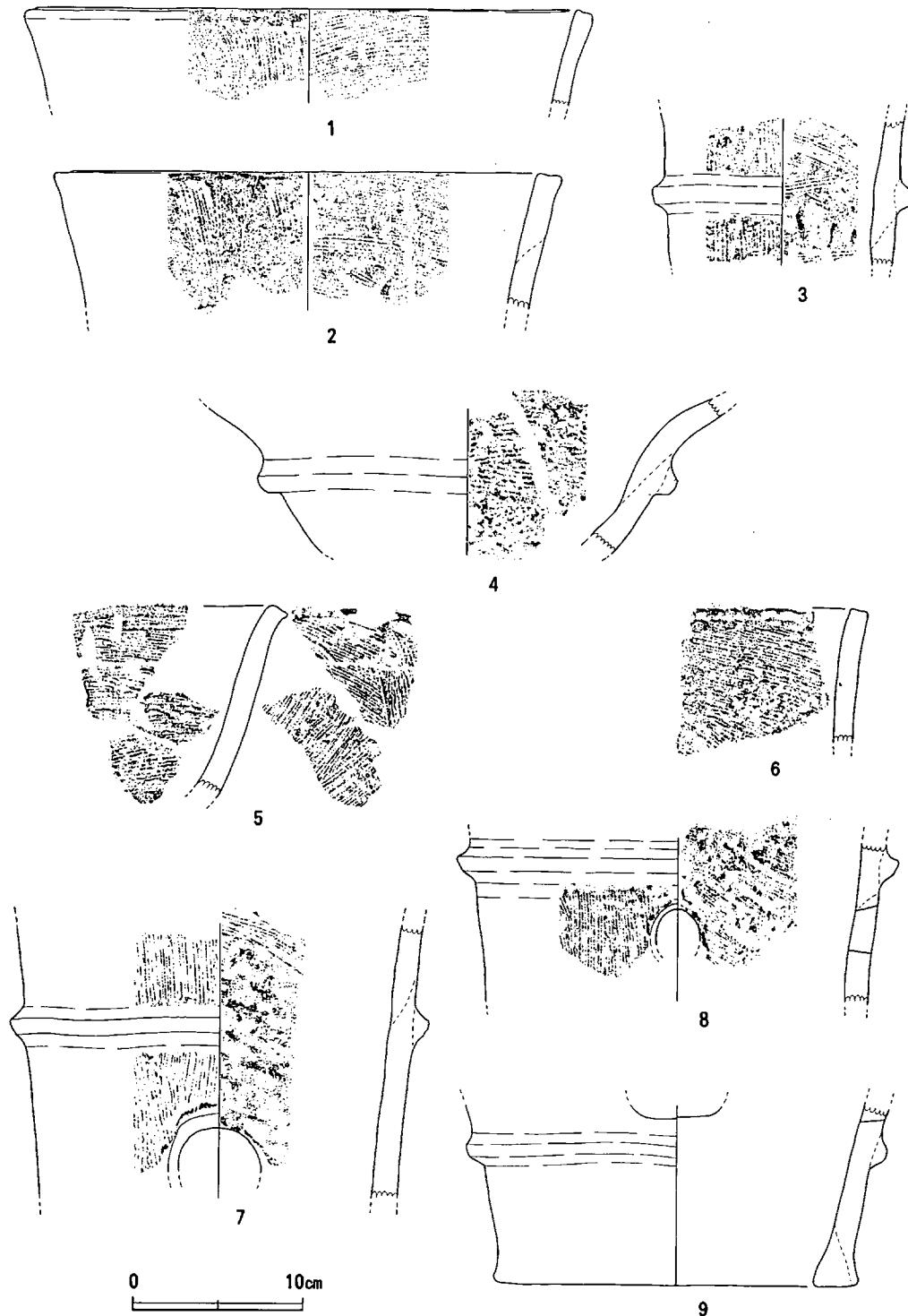
第16図 1号墳石室平・断面図 (S=1/40)



第17図 1号墳出土遺物実測図1 (S=1/4・1/6)



第18図 1号墳出土遺物実測図2 (S=1/2)



第19図 1号墳出土遺物実測図3 (S=1/4)

註

- 註1 近藤義郎「こうもり塚古墳」『総社市史 考古資料編』 1987 総社市
- 註2 柳沢一男「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982 によると、岡山県内の例としては、三輪山6号墳、野田畠1号墳を竪穴系横口式石室と指摘しているが、いずれも閉塞部の状況については不明な点が多い。
- 註3 島崎 東「殿山東尾根採集の埴輪について」『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47 1982 岡山県教育委員会

(2) 2号墳

2号墳は、昭和56年に発掘調査が行われた3号墳の南下に接して低平なマウンドとして認められていた。調査前の状況では、墳丘封土の流失が著しいが、直径約10mほどの円墳と推定された。

調査の結果、この古墳は、直径10~12mの円墳で、山側に幅約2mの周溝をもつことが判明した。また、立地としては、傾斜の変換点近くという好位置を占め、きわめて効率のよい墳丘の築造を行っていることが注意される。

墳丘と周溝

墳丘をつくるにあたっては、まず傾斜面を成形してやや広いテラスを作り、安定した基盤層の上に石室を構築し、墳丘を積み上げるという方法をとったと考えられる。墳丘の盛土は、基本的には灰色と茶色の砂質土の互層からなっており、約10cmほどの単位でよく叩き締められている。主体部の底面が、ほぼもとの地山面にあたり、墳丘は、墳裾から高さ3m以上にわたって盛土が施されていたと考えられるが、石室の上部が失われたことにより、流出が著しい。したがって墳丘が段を有していたか否かは不明である。

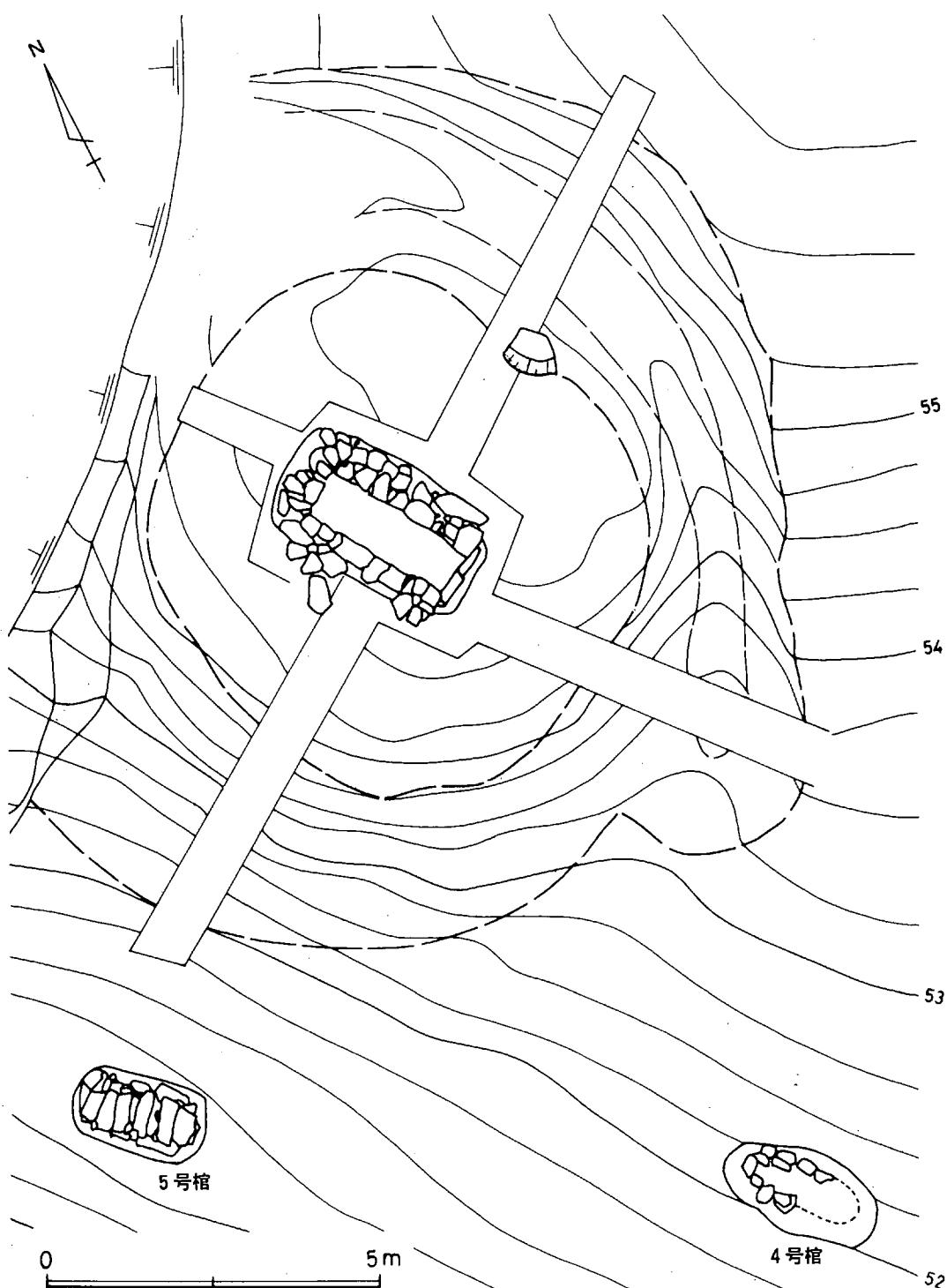
墳丘上には、主体部の上方約2mの位置に、馬形埴輪の脚部が、樹立された状態で検出された。またこの周辺及び周溝の埋土中などから埴輪の破片が検出されているほか、須恵器なども出土しているが、これらは原位置を保つものはなかった。さらに、これらに混じって長さ5cm程度の鉄滓1点が出土している。

周溝は、墳丘上半の裾部に弧状にめぐらされる。広いところで幅約3m、深さ0.6m程度である。また、周溝外の斜面上方に焼土や木炭の分布するところがあったが遺物を伴わないため、この年代は不明である。

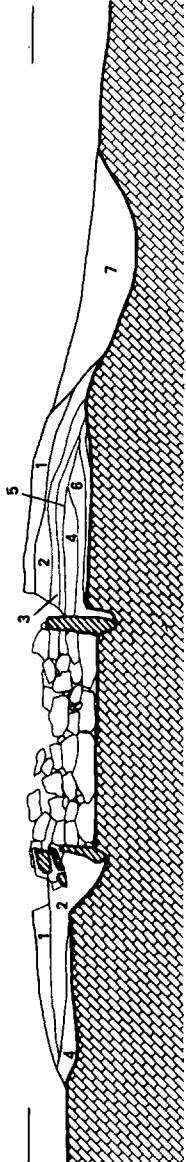
内部主体

内部主体は、竪穴式石室で、規模は長さ2.4m・幅0.8m・高さ0.5mをはかる。石材は花崗岩を主体とする。側壁は横長の石材を横積みにしており、最大5段が残存する。基底部にやや長い石材を使っているものの、2段目より上は石材の大きさは一定しない。小口部は、正方形に近い偏平な石を2枚並べて立て、さらにその上を塊石によって積み上げている。特に南側の小口においては、基底石は側壁をふさぐように使われるが、その上の塊石は側壁の石材と噛み合っており、側壁と小口が同時に積み上げられていったことが理解される。北側の小口については、基底部の板石のみの残存であるので、同様の手法がとられていたかどうかは不明である。

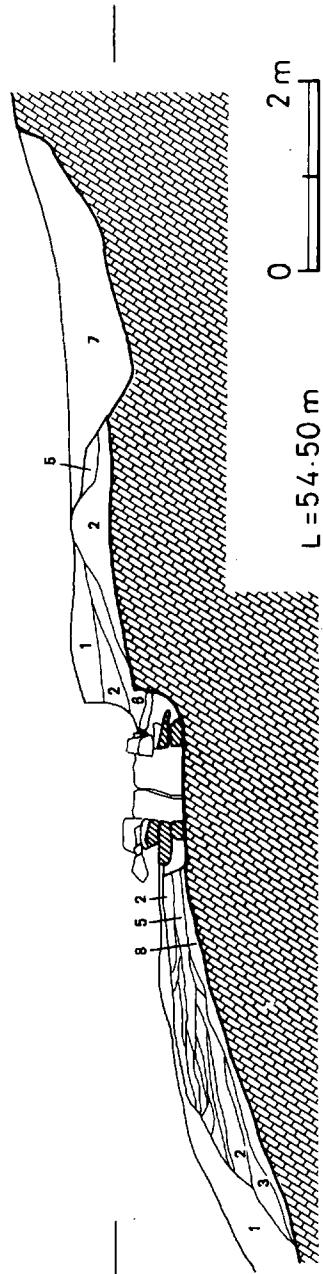
石室床面は、礫床で円礫が1~3段に敷かれるが、この円礫は長さ20cmほどのものから3cmに満たないものまであり、一定しない。礫床下に排水施設は認められなかった。



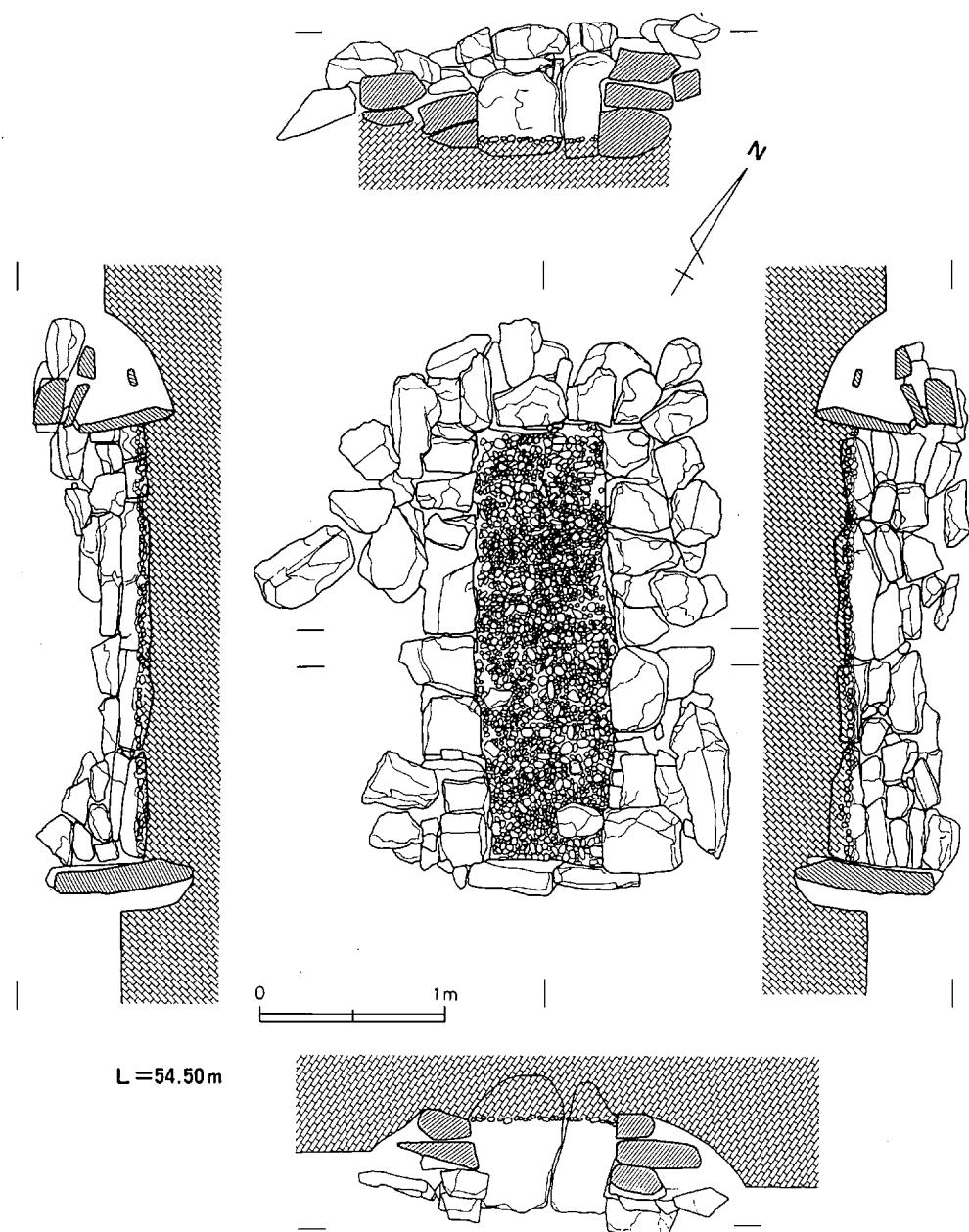
第20図 2号填埋丘測量図 ($S=1/100$)



1. 黄色砂質土
2. 灰色砂質土
3. 黄褐色砂質土
4. 灰色砂質土
5. 茶色砂質土
6. 灰茶色砂質土
7. 暗黄灰色砂質土
8. 暗灰色砂質土



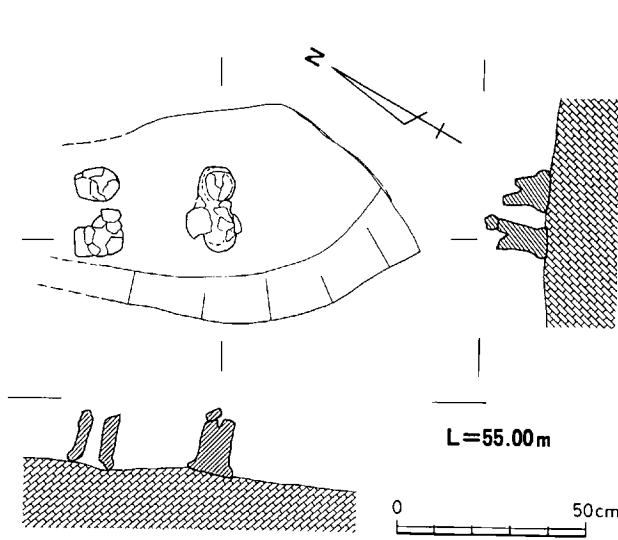
第21図 2号墳墳丘土層断面図 ($S=1/80$)



第22図 2号填石室平・断面図 ($S=1/40$)

石室内からは、須恵器（壺・蓋・短頸壺・提瓶）、玉類、鉄器及び鐵片などが出土した。土器の出土状況から判断すれば、調査以前に石材採取目的によって乱掘された疑いもあるが、仮にあったとしてもそれは礎床面にまでは及ばなかったであろう。

玉類のうちガラス小玉は主体部の南東部に集中して出土した。したがって頭位はほぼ南東向きであったと考えられる。主軸方向は、等高線に平行である。頭位の設定は、安定した地山面に主体部をもとめようという意識によって決定されたとみるほうが自然であるかもしれない。

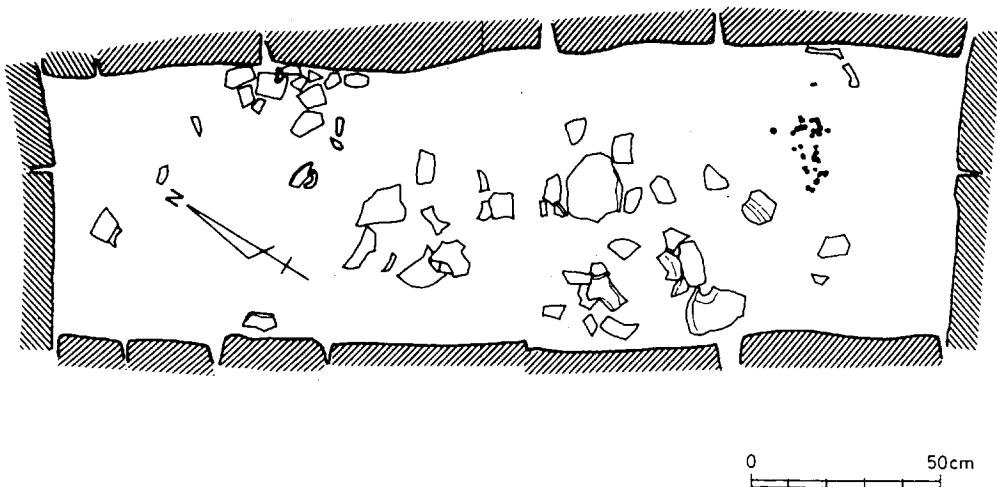


出土遺物

墳丘上の遺物は、形象埴輪・円筒埴輪・須恵器の破片・鐵滓などがある。そのなかで原位置を保って出土したのは馬形埴輪の脚部のみである。形象埴輪は、人物と馬は判別できるが、それ以外の小さな破片については、器種および部位の特定が困難である。

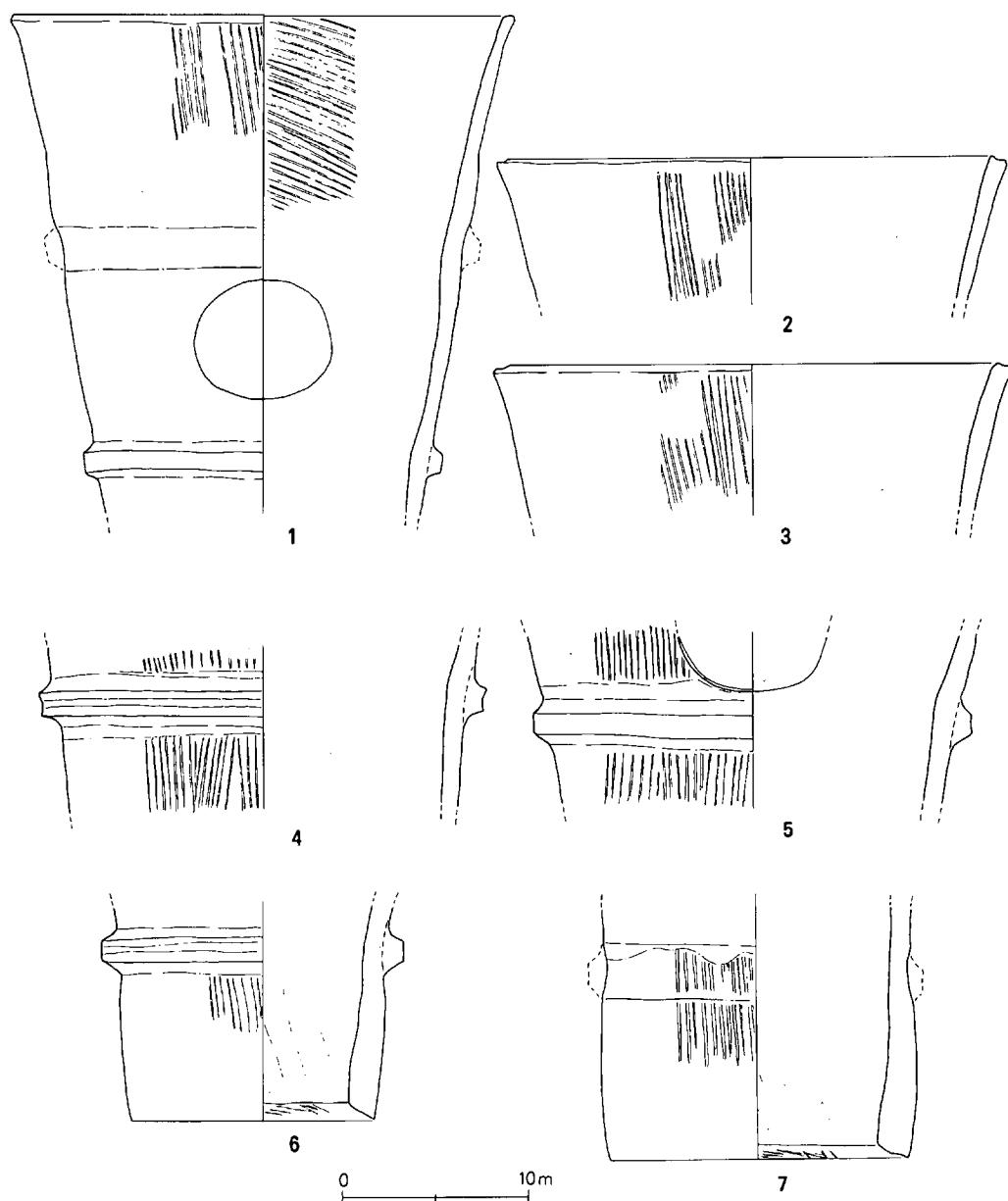
人物にかかわるものは眼を表現したと思われる顔の破片（第26図3）、腕及び手を重ねて何かを捧げもつような形のもの（1）、着衣の一部らしいも

第23図 2号墳墳丘遺物出土状況図 (S=1/20)

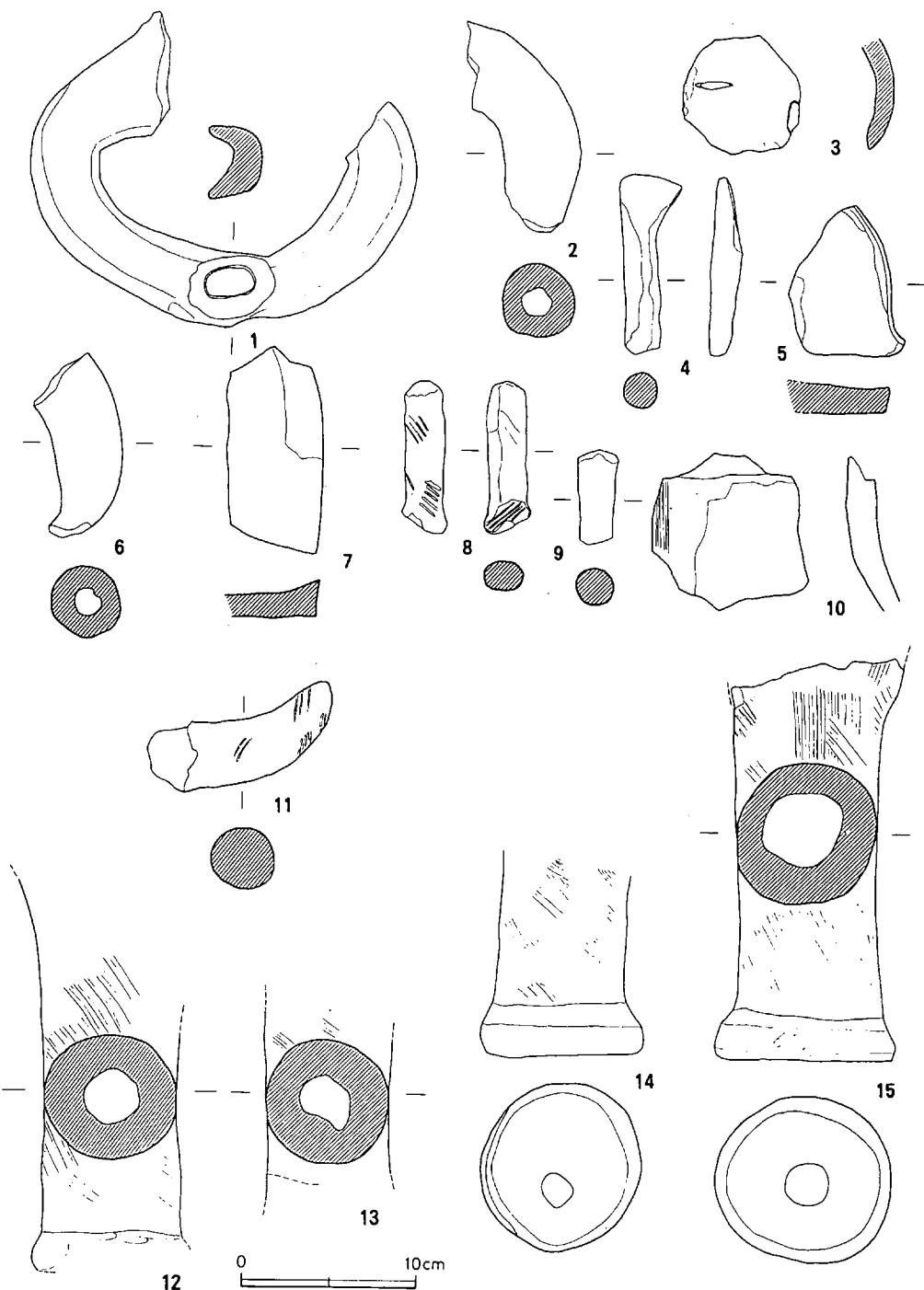


第24図 2号墳石室遺物出土状況図 (S=1/20)

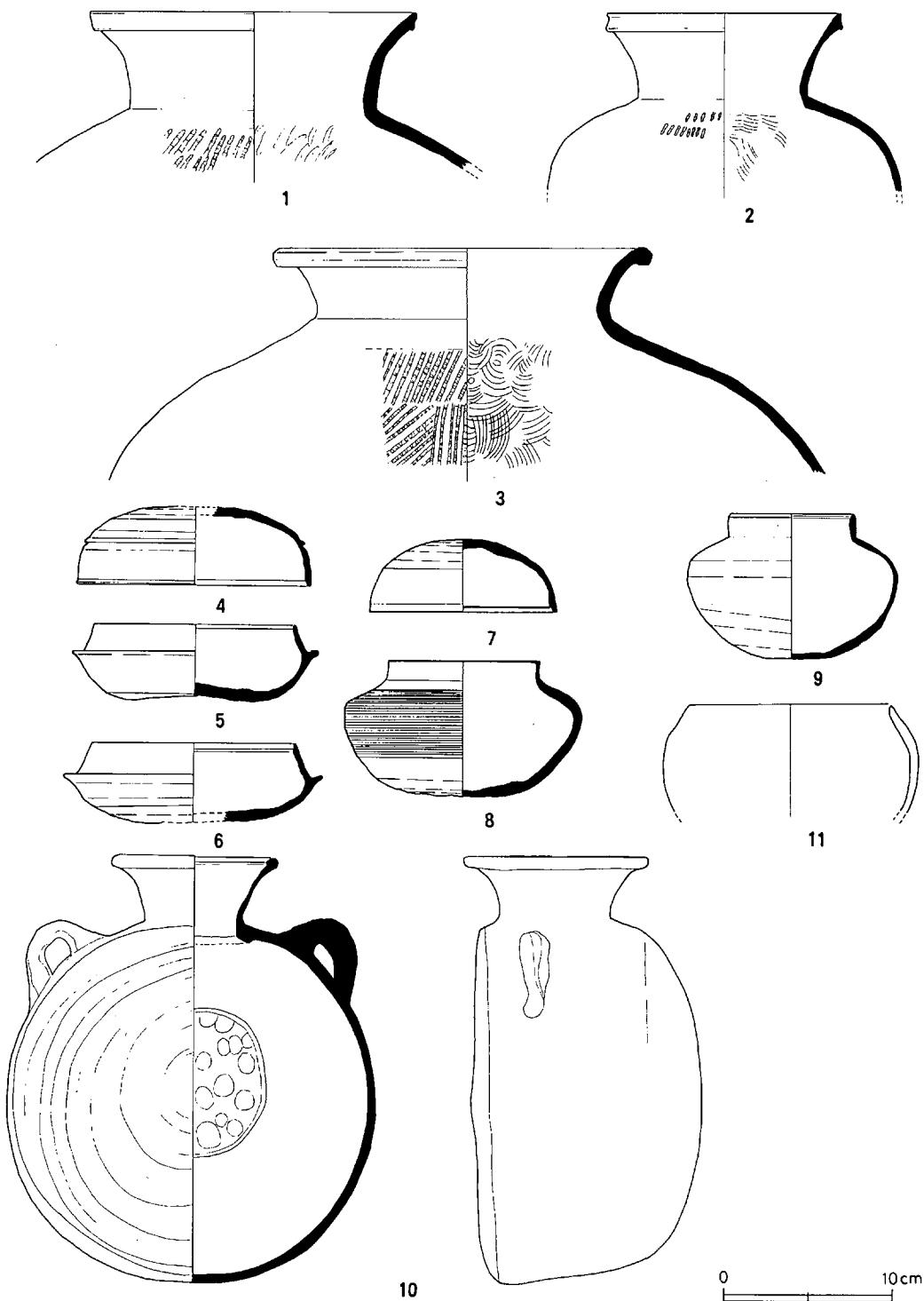
の（10）などを指摘できるにとどまる。馬と人物は、胎土や焼成のちがいから、別個体であろう。馬は、脚（12～15）および尾（11）が認められたにとどまる。脚先の部分に粘土を貼りつけて太くしているのが特徴である。その他のものは、器種および部位が明らかでないが、ひれ状のもの（7）や棒状のもの（4・8・9）など、形態に特徴のあるものが多い。人物にかかわ



第25図 2号墳出土遺物実測図1 (S=1/4)



第26図 2号墳出土遺物実測図2 (S=1/4)



第27図 2号墳出土遺物実測図3 (S=1/4)

(1～3は墳丘、その他は主体部から出土)

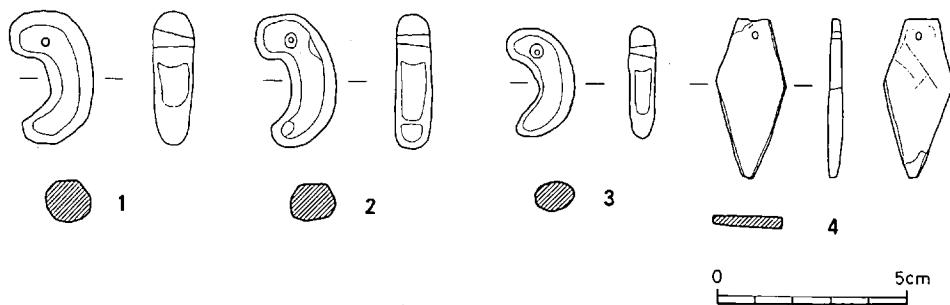
る器物である可能性もある。胎土は、馬形のほうがよりきめ細かく、器面の調整も丁寧である。人物のほうは胎土に砂粒を多く含み、黄褐色を呈する。複数の個体からなる可能性が高い。

円筒埴輪は、いずれも細片で、全形を知りうるものはなく、辛うじて直径の大きさやタガの形態がわかる程度である。胎土や色調によって若干の差を生じているが、外面タテハケ、内面は口縁部付近のみヨコハケ、以下は指頭圧痕及びナデである。タガは断面台形であるが端面は窪ませている。タガは3段と想定できる。タガの間には円孔が穿たれる。技法からみて一型式のものとみるべきであろう。

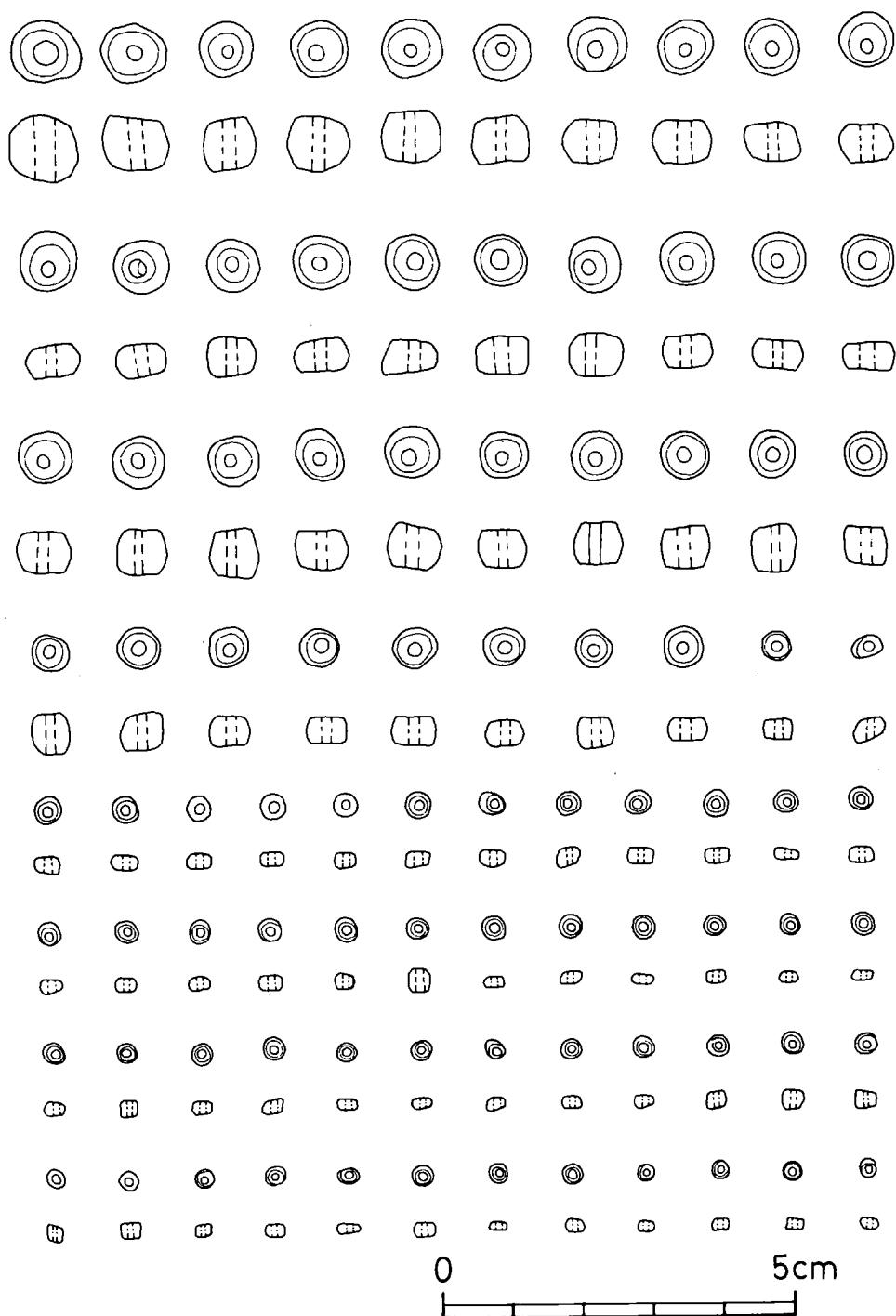
須恵器は、墳丘上では甕の破片が数個体分検出されているが、図示できるのは、3個分だけである（第27図 1～3）。いずれも口縁部から肩にかけてが残存するにすぎない。

鉄滓は、1点のみが墳丘上の流土中からの出土した。重量217g。これは本来この古墳に確實に伴ったものかどうか疑問が残る。

主体部内から出土したのは、須恵器・土師器・鉄器・玉類などである。須恵器は、壺・蓋・短頸壺・提瓶があり、短頸壺は有蓋のものと無蓋のものがある。壺が2点あるほかは、各器種とも1点ずつである。いずれも破片となって出土し、完形で出土したものはない。図示した以外に波状文の施された細片もあることから、すでに持ち去られたものもあったであろう。壺は2点のうち、（5）は成形技法からみて（4）とセット関係にあったと考えられる。（6）は、（5）に比べたちあがりが長く、口縁部内側の抉り込みなど、端部の成形がシャープである。同様の傾向は（7）（8）にも認めることができる。（9）は端部がややまるみをもつことから強いて言えば（5）（6）に近いとみるべきであろうか。（10）は提瓶であるがしっかりした鉤をもち、胴部は平坦な面はへら削り、丸みをおびる面はナデのみで仕上げられている。



第28図 2号墳出土遺物実測図4 (S=1/2)



第29図 2号墳出土遺物実測図5 (S=1/1)

玉類は、勾玉・ガラス製小玉がある。勾玉は、1・2が碧玉製、3が瑪瑙製で穿孔はいずれも片側から行っている。ガラス製小玉は、88個が出土した。いずれもコバルトを基調とするが、淡い色のものとやや緑色を帯びるものなどがある。大きさによって、5mm内外のもの、3mm程度のものの大きく2つに区分しうる。形態としては、側面形は偏平なものが多数で、しかも球状の上下を切り取った樽状を呈するものが圧倒的であるが、小さなほうのグループでは整形を施さないものも散見される。

剣形模造品（4）は1点のみ出土した。滑石製で大きさは、勾玉とほぼ等しい。垂飾のための穿孔がある。表面には研磨痕が残る。

鉄器は、細片となったものが少量出土したにとどまり、器種等については不明である。

すりばち池2号墳は、直径10ないし12mの円墳で、幅2～3mほどの周溝を山側にめぐらしていた。内部主体は竪穴式石室であるが、上部はかなり損なわれていた。主体部は、小口に板石を2枚立てて基底石としている点に特徴がある。墳丘上には、円筒埴輪の他に人物や馬形の形象埴輪もあり、墳丘規模が小さいにもかかわらず、被葬者の地位の高さがうかがわれる。築造の年代としては出土する須恵器の特徴から6世紀前半ぐらいまで下げるべきであろう。

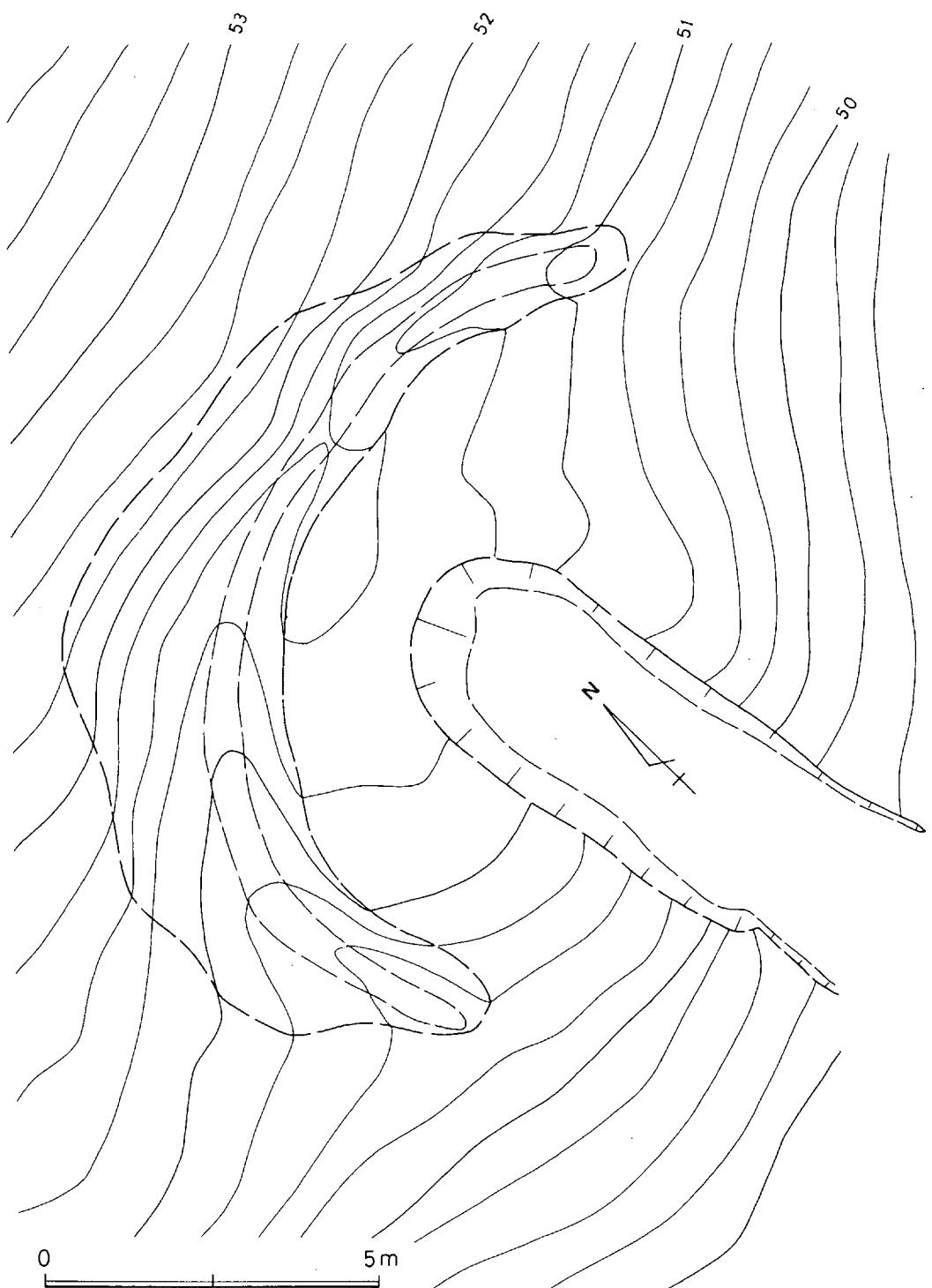
（3）4号墳

4号墳は、調査範囲の南西隅に存在し、ゆるやかに下降する傾斜面の端のあたりに立地しており、墳裾のすぐそばまで住宅がせまっている。横穴式石室の石材が抜き取られたと考えられる中の窪んだ墳丘が認められており、直径およそ10mほどの円墳と想定された。

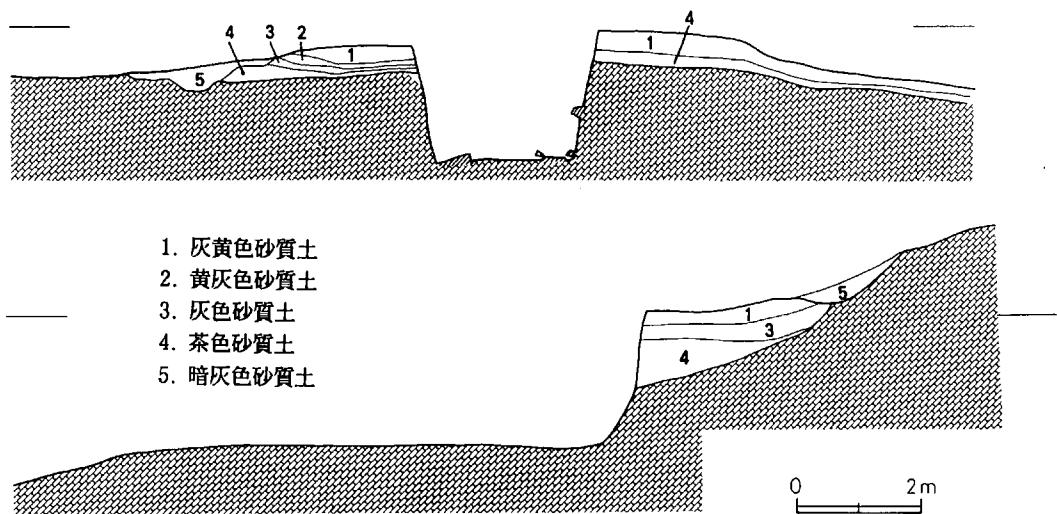
調査の結果、この古墳は、直径11mの円墳で、山側に幅約3mほどの浅い周溝を弧状にめぐらせることが判明した。

墳丘は、石材抜き取りのために損なわれているが、地山面を掘削して横穴式石室を納める墓壙を穿ち、墳丘の盛土を行ったと思われる。墳丘の盛土は2号墳に較べれば大まかに積まれている。石室石材が持ち去られたためもあり、最大でも奥壁の背後で高さ1m足らずが残存したにとどまる。周溝は、墳丘の山側に浅く弧状にめぐらされる。墳丘の流出の影響のためか、1・2号墳に比べると、著しく浅く狭い。

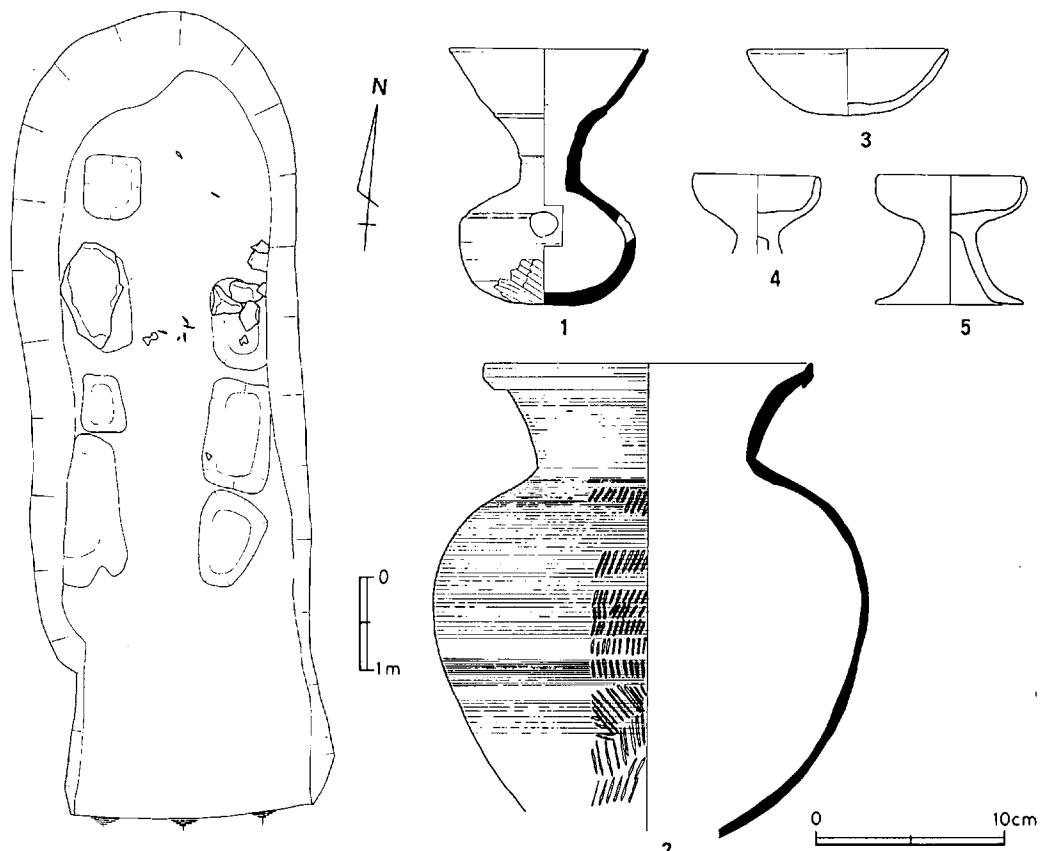
墳丘上には、埴輪や須恵器は認められない。周溝の外側2mほどの位置からは須恵器の甕が1個体分出土しているが、これは4号墳の他の土器より明らかに先行するもので、2号墳の墳丘上で検出されたものに近い時期と考えられる。



第30図 4号填墳丘測量図 ($S=1/100$)

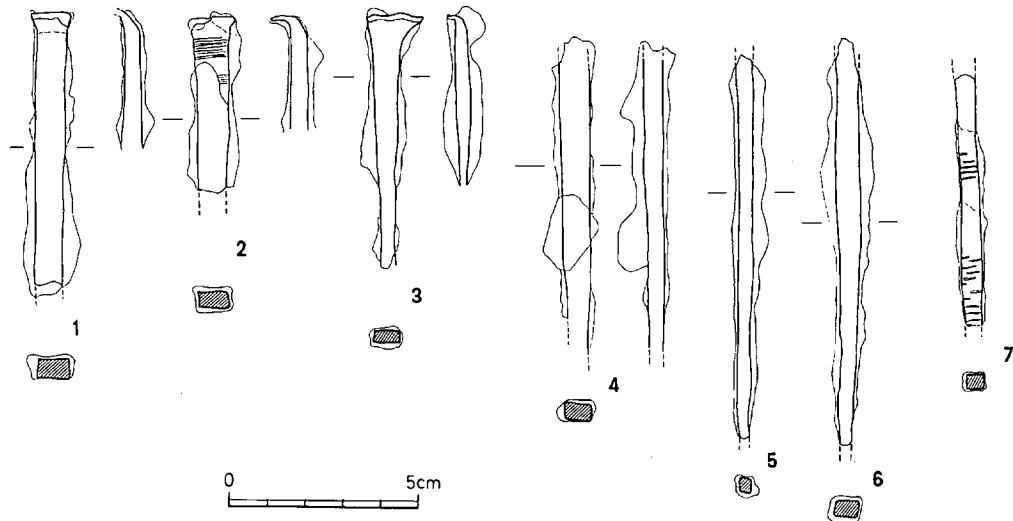


第31図 4号墳墳丘土層断面図 ($S=1/120$)



第32図 4号墳石室床面
遺物出土状況図 ($S=1/80$)

第33図 4号墳出土遺物実測図1 ($S=1/4$)



第34図 4号墳出土遺物実測図2 (S=1/2)

墓壙内には、横穴式石室の石材は基底石を据えるために埋めこまれたと考えられる薄い偏平な石材1点をのぞいて石室を構成する石材は残存していなかった。石の抜き取り穴の検出状況から、もとの横穴式石室の規模は、長さ4.5m以上、幅0.9m程度と推定されるが、袖の有無については不明である。石室の床面は土床であり、先行する2・3号墳が小円礫を用いた礫床であったのと様相を異にしている。

遺物は、奥壁から2mほどの位置にややまとまって出土している。したがっておおむねこの範囲に木棺のあった可能性を考慮しうる。須恵器は、甌（第33図1）のほか、前庭部付近で大甕の破片が若干出土している。また（2）は、前述のとおり墳丘外からの出土である。（1）は、口縁部がやや歪み、胴部の大きさに対して頸部から口縁部が大きい。底部は手持ちのヘラ削りが施される。土師器は高坏（4・5）及び坏（3）が存在する。いずれもやや橙色を帶びた黄褐色を呈する。胎土はきめ細かい。

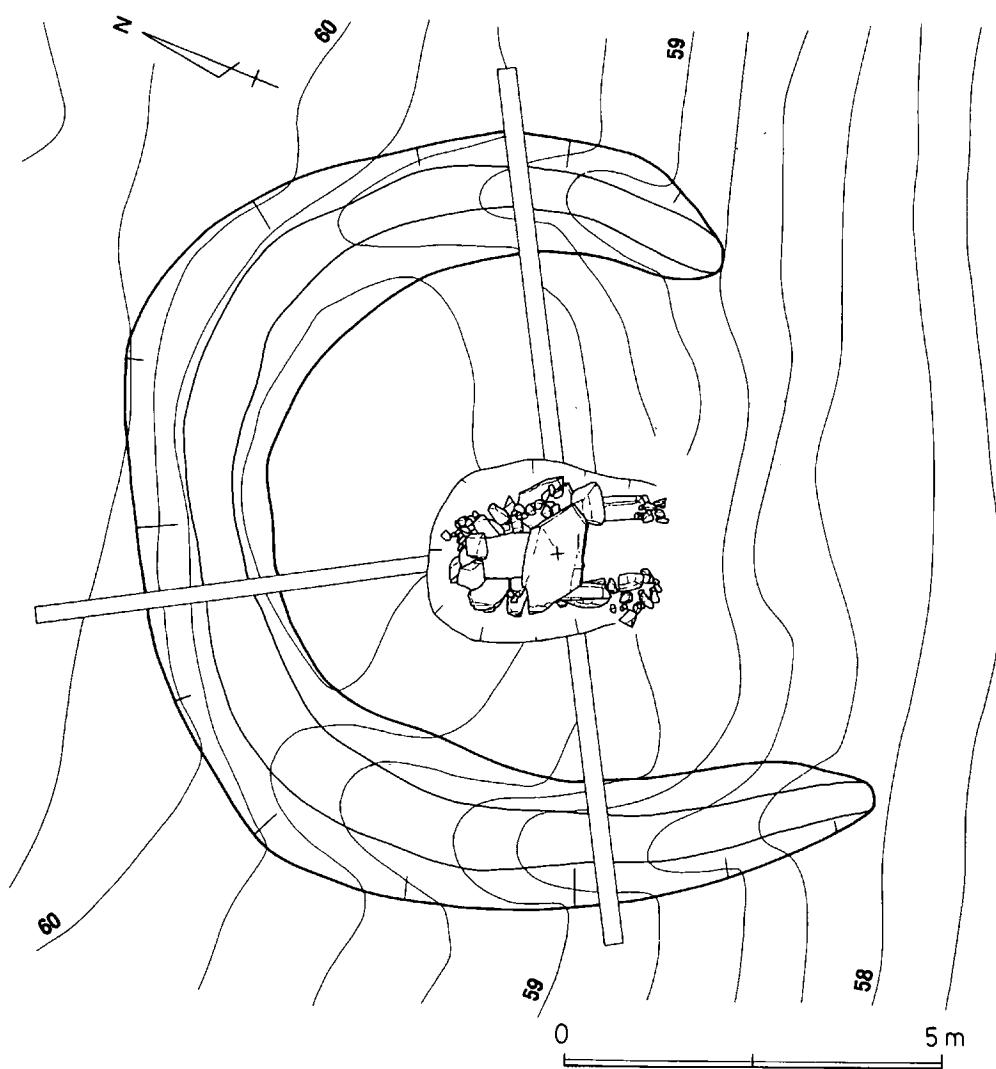
鉄釘は、7点が出土している。太さや断面形は一定しない。完形に近いものは（2）だけである。また、木棺の痕跡が付着するものは（7）の1点のみである。

すりばち池4号墳は、直径11mの円墳で、幅3mほどの弧状の周溝をめぐらせていました。内部主体は横穴式石室であるが、石材はすでに持ち去られており、その際に出土遺物も持ち出された可能性がある。横穴式石室の規模は、長さ4.5m以上、幅0.9m程度と推定されるが、狭長な石室であったと考えられる。築造年代は、出土した須恵器から、6世紀後半であろう。

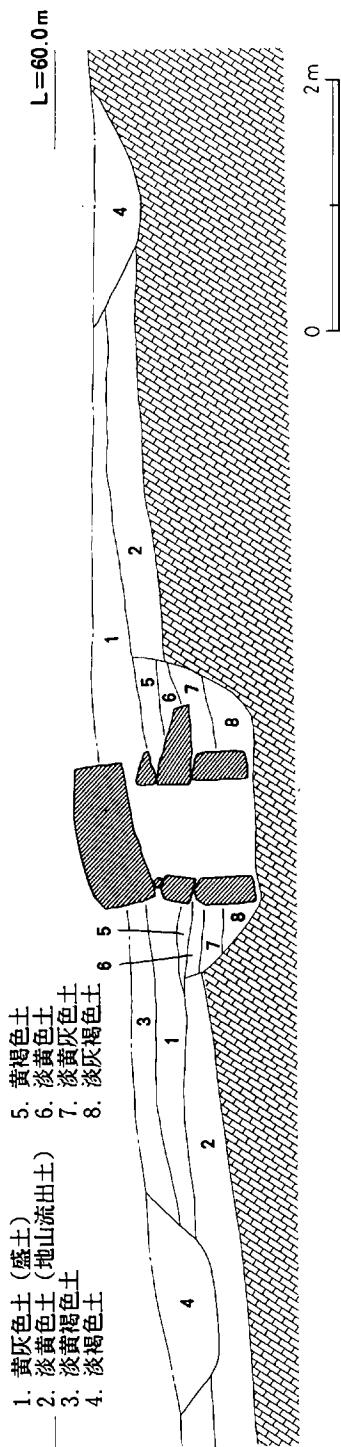
(4) 5号墳

5号墳は、調査区中ほどの標高58m付近の緩斜面に位置する。墳丘の高まりも周溝も表土除去前には確認できなかったが、天井石が露出し、側壁と思われる石材が残存していたことにより、古墳と判明した。

墳丘は、直径8mの円墳であるが、整円ではなくややいびつな平面形である。天井石より上の盛土はすでに流出している。残った盛土もさほど叩き締められたものではないが、石材に接する部分のみは比較的入念に固められている。周溝は、山側に馬蹄形に浅い溝がめぐる。石室



第35図 5号墳墳丘測量図 ($S=1/100$)



第36図 5号墳
土層断面図(S=1/60)

掘り方は、不整な隅丸長方形を呈し、地山土をほぼ垂直に掘りこんでいる。

石室は、南に開口する無袖式の横穴式石室である。天井石は、1枚が残存するのみであるが、最低でもあと3枚の存在が想定できる。石室の幅は、60cmから80cmを測り、残存する石室全長は2.2m、高さは90cmである。

石室基底部と奥壁の石材は、比較的方形のものを用いているが、2段め、3段めの石材は内面に平坦面を向けているものの、不整形なものも多い。裏込め石は、小型の角礫を丁寧に詰めている。開口部付近の小礫は、周辺の露岩と混同して用いられている。

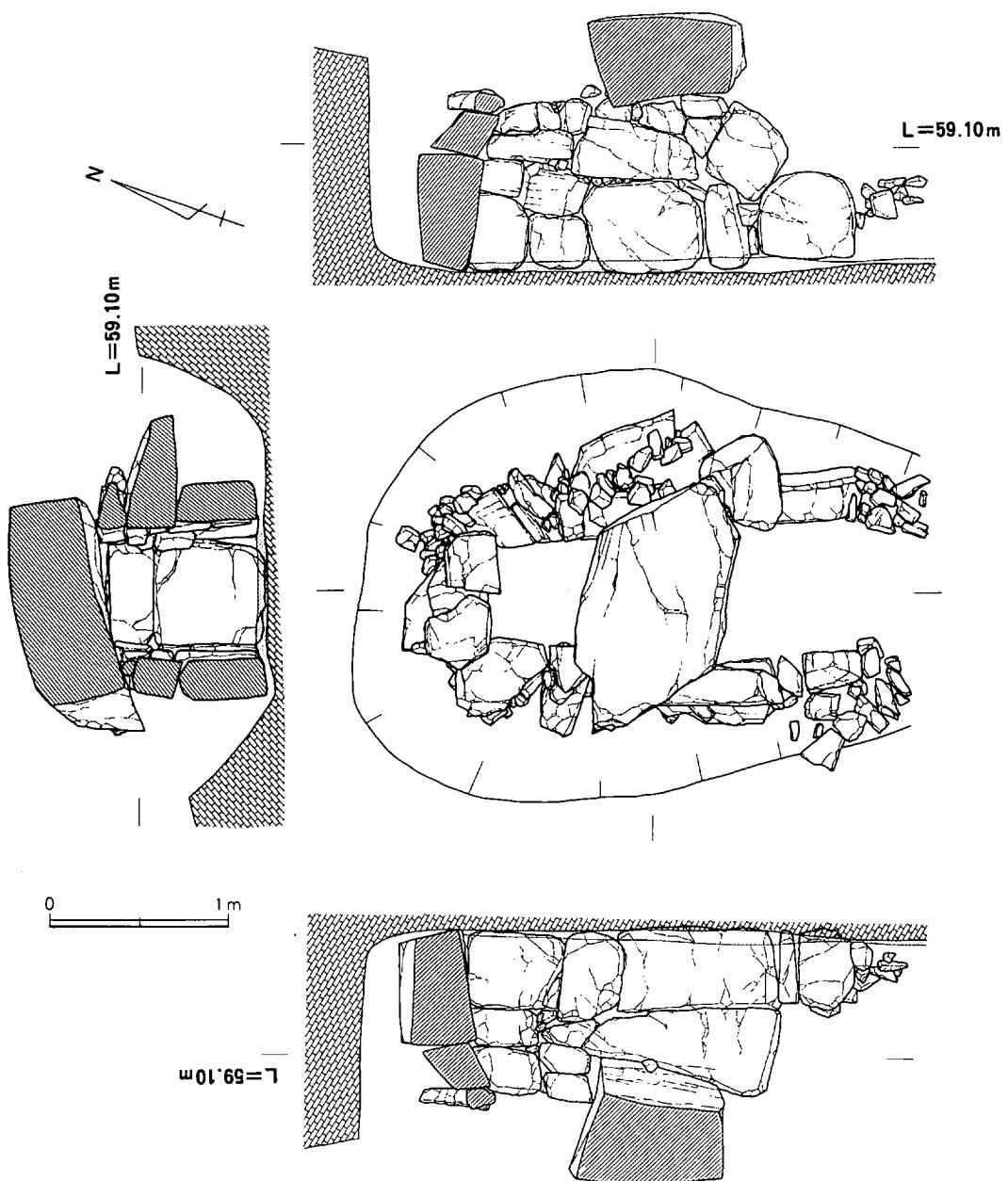
床面には、小角礫が敷かれ、同じ面で4個の棺台と思われる台石が配置されている。開口部付近にかたまって検出された小礫は、閉塞石であった可能性が高い。礫床は、1面のみで、薄く敷かれた真砂土の下は、地山の花崗岩風化土である。

遺物は、奥壁近くで鉄滓が2点、敷石上から鉄釘、東側壁際で須恵器の壊・蓋・長頸壺、土師器の壊が検出された。このうち鉄釘は、棺台の周辺に散乱しているため、木棺に使用されたことは確実である。しかしながら、土器は壊蓋が5個とも重ねられていることや、側壁際にかたまっていることなどから、追葬時の片づけがあったとも考えられる。

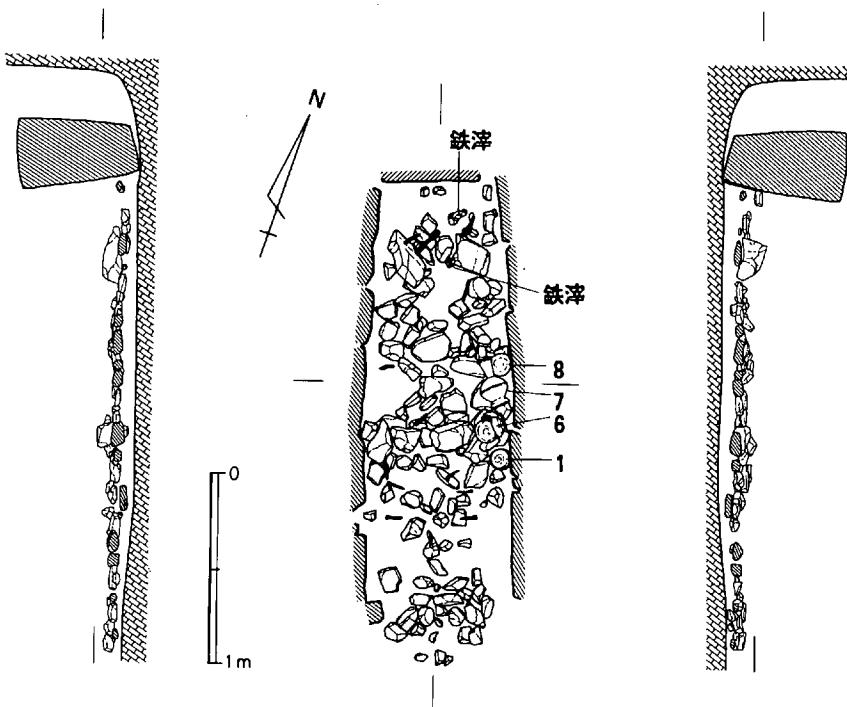
須恵器の壊・蓋は、すべて完形品で口径10.5~11cm、器高3.8~4cmを測る。天井部は、いずれもヘラ切りの後、軽いナデを加え、焼成は軟質なものが多い。壊は、蓋と同様の調整で、焼成は良好である。長頸壺は、肩に刺突文帯がめぐり、高い高台が付く。肩部はあまり張らず、体部下半には回転ヘラ削りが加えられている。焼成は良好であるが、砂粒を多く含む。土師器は、緻密な胎土で押圧とナデで成形されている。

鉄鎌は1点のみで、長頸鎌の一部と考えられる。鉄釘は、長さ9cm前後で、太さと断面の形状にはかなりばらつきがある。

鉄滓は小が30g、大が129gである。

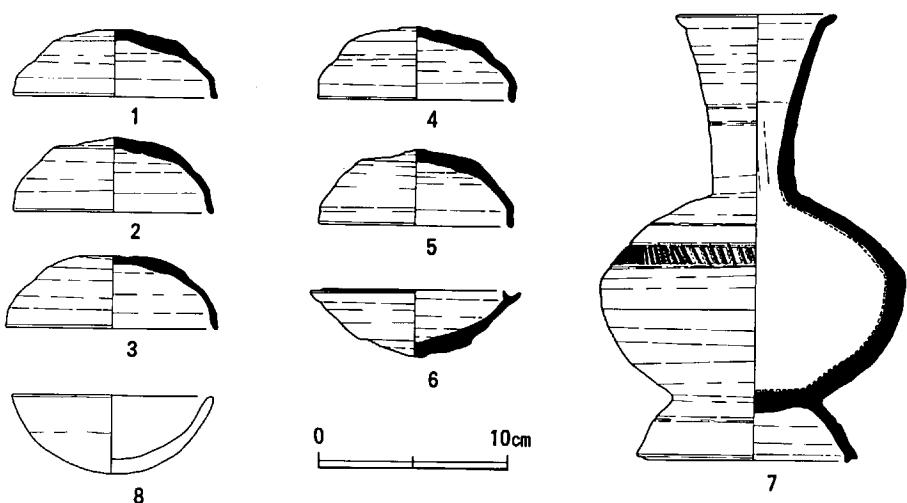


第37図 5号墳石室平・断面図 ($S=1/40$)

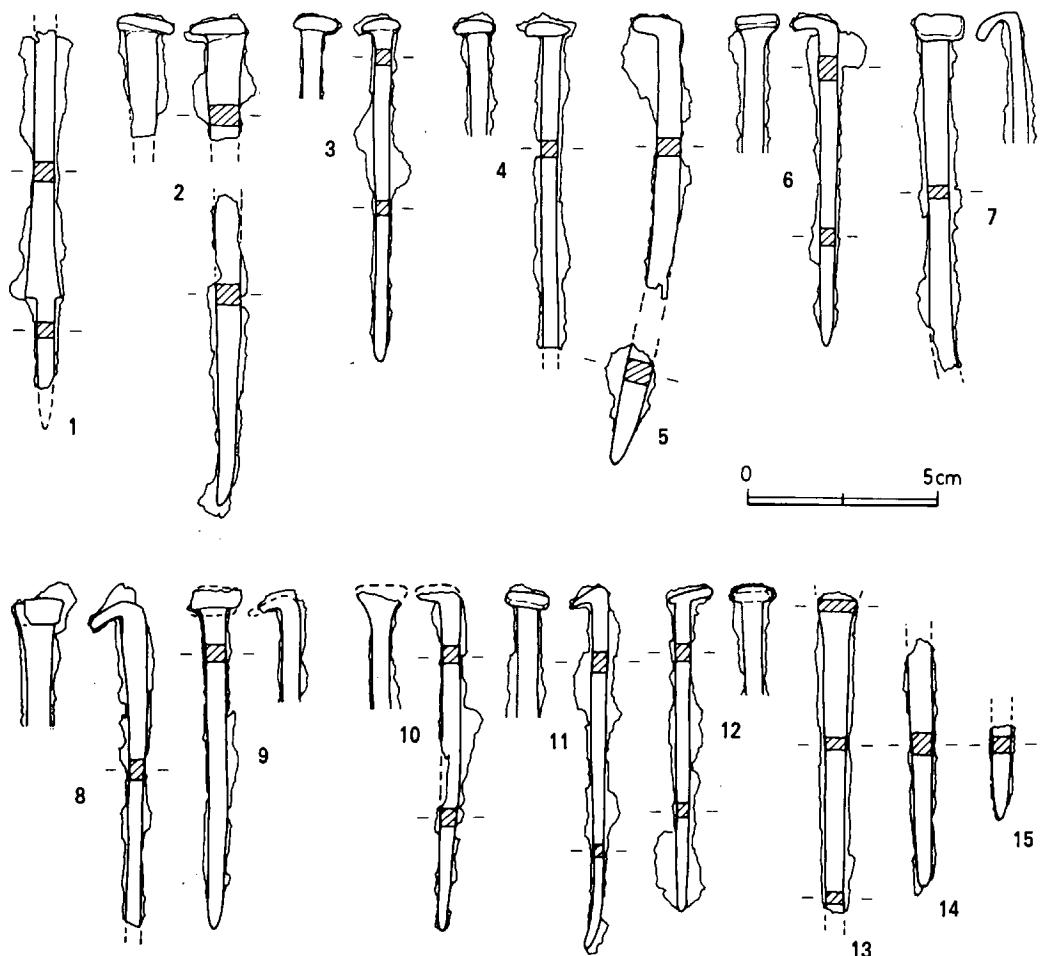


第38図 5号墳石室床面平・断面図 ($S=1/40$)

5号墳の築造時期としては、須恵器を陶邑編年のTK217型式新段階とすると、7世紀の中頃が考えられる。これらの遺物が初葬時のものであるとすると、古墳の築造時期もその時期であり、その後1回の追葬が行われたと言える。しかし、鉄滓がどの時期に帰属するかは不明であり、被葬者の性格についてもあえて断言できるものではない。



第39図 5号墳出土遺物実測図1 ($S=1/4$)



第40図 5号墳出土遺物実測図2 (S=1/2)

(5) 7号墳

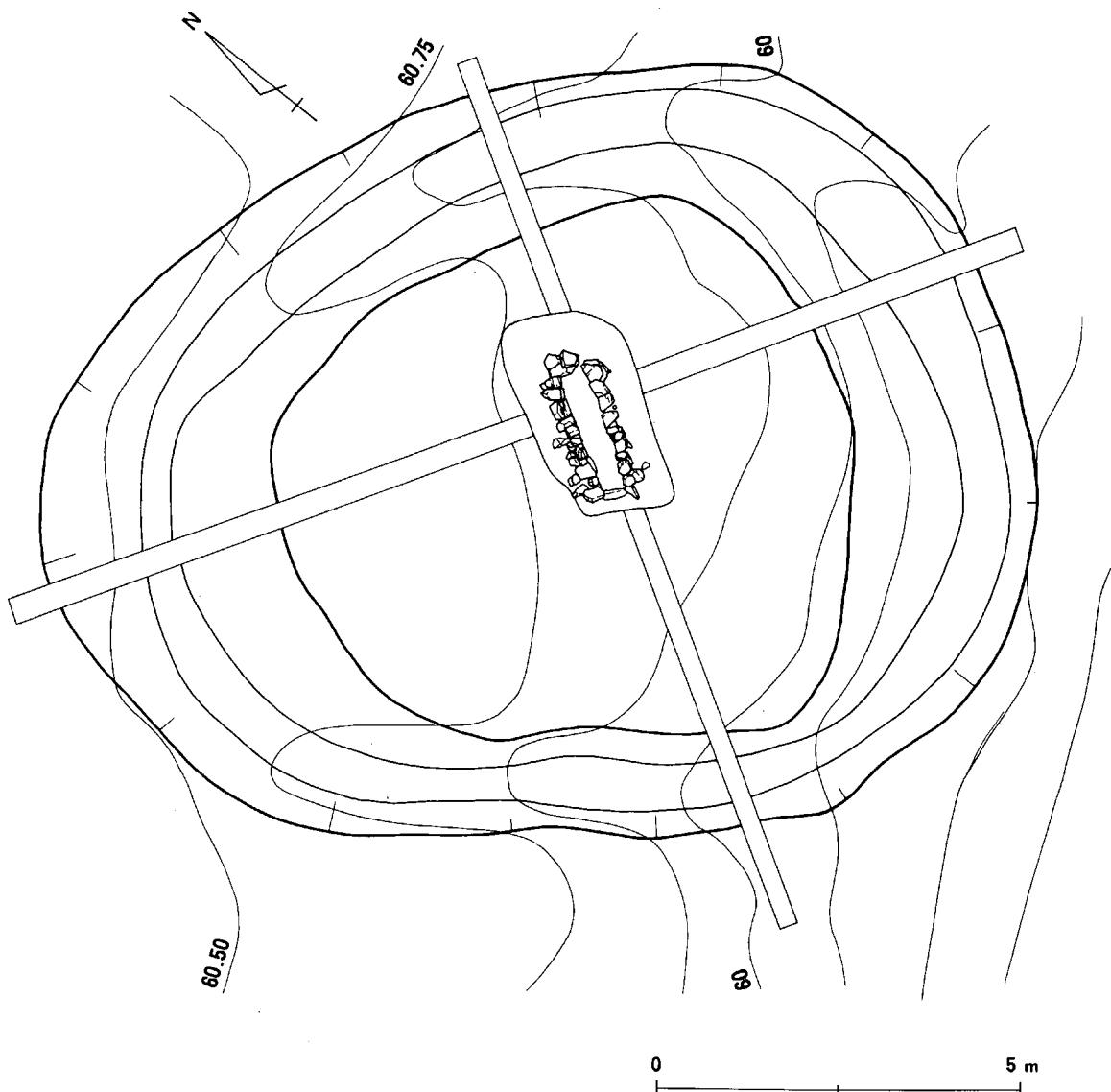
7号墳は、調査範囲の北東隅の丘陵頂部の標高約60mの地点に位置する。この丘陵頂部は狭い平坦面になっており、若干南に向かって緩傾斜を呈する。

古墳は、腐植土を除去した段階で主体部が検出されたため、かろうじて古墳と確認できたが墳丘はすでにほとんどが流出してしまっている。盛土はあまり認められず、墳丘の西半分は、基盤層であるもろい角礫で構成される。周溝は、墳丘をほぼ全周するが、墳丘の流出の影響のためもあり、底の一部分が痕跡として残存したにすぎない。

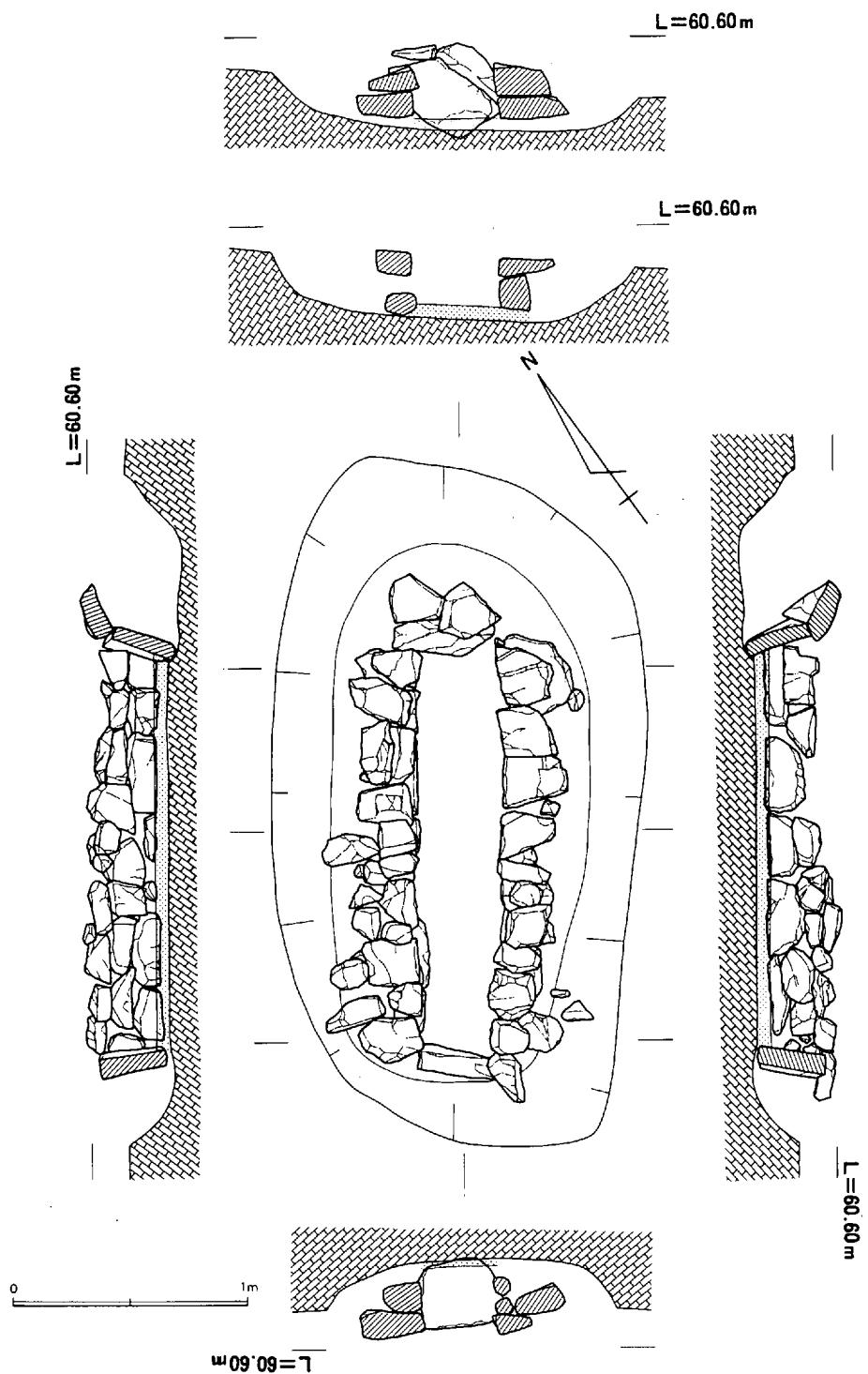
主体部は、竪穴式石室である。この石室は等高線に平行に穿たれた長さ約270cm、最大幅150cm、深さ20cmの不整形の墓壙内に構築される。

石室は、内法で長さ160cm、幅35cmを測る。側石は、偏平な割り石を2ないし3段積み重ねている。小口には、薄い板石を用いており、側石に較べて不安定であるが、墓壇の底面がやや深く掘り窪めてある。

以上のように、本墳は尾根上に築かれた直径約9mの円墳で、小規模な竪穴式石室を主体部とする。築造時期は、遺物がまったく出土していないため年代については不明と言わざるをえないが、2号墳の石室を簡略にした構造と考えると近接した時期が考えられる。



第41図 7号墳墳丘測量図 (S=1/100)



第42図 7号墳石室平・断面図 ($S=1/30$)

第3節 箱式石棺

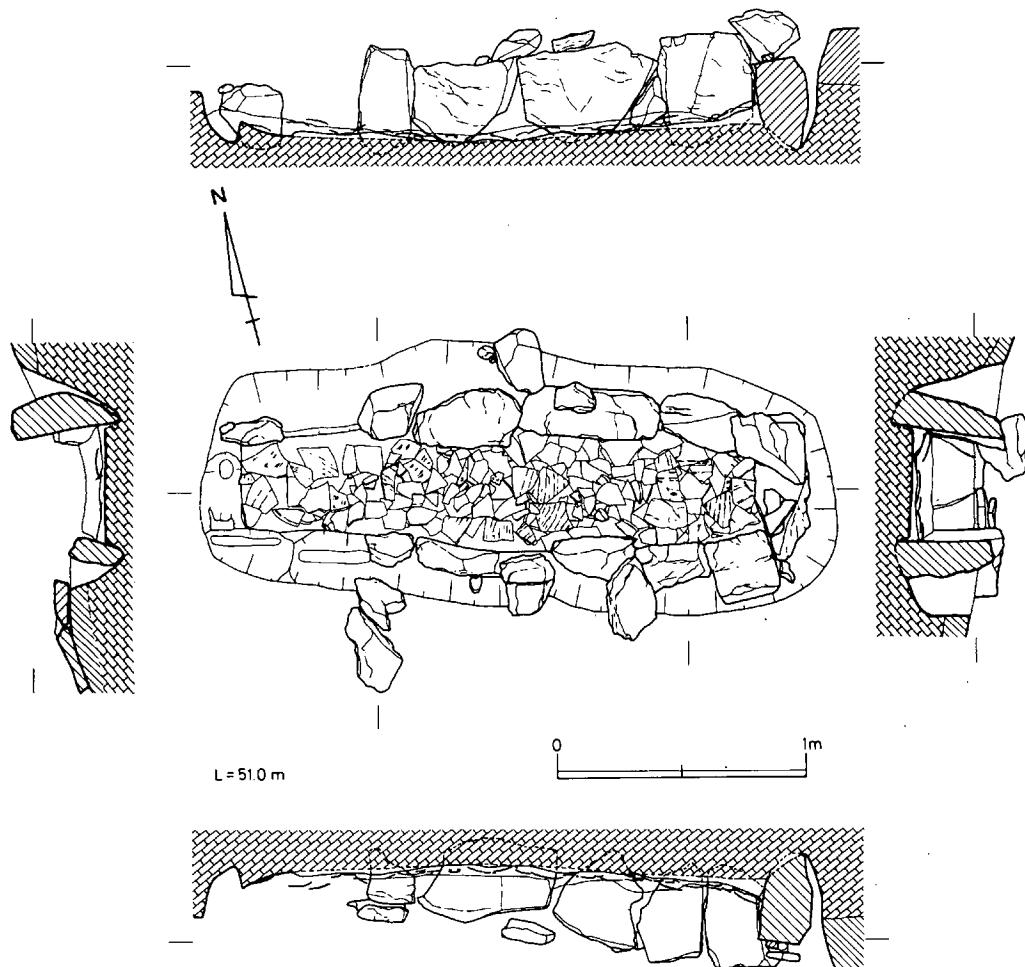
(1) 1号棺

1. 埋葬主体

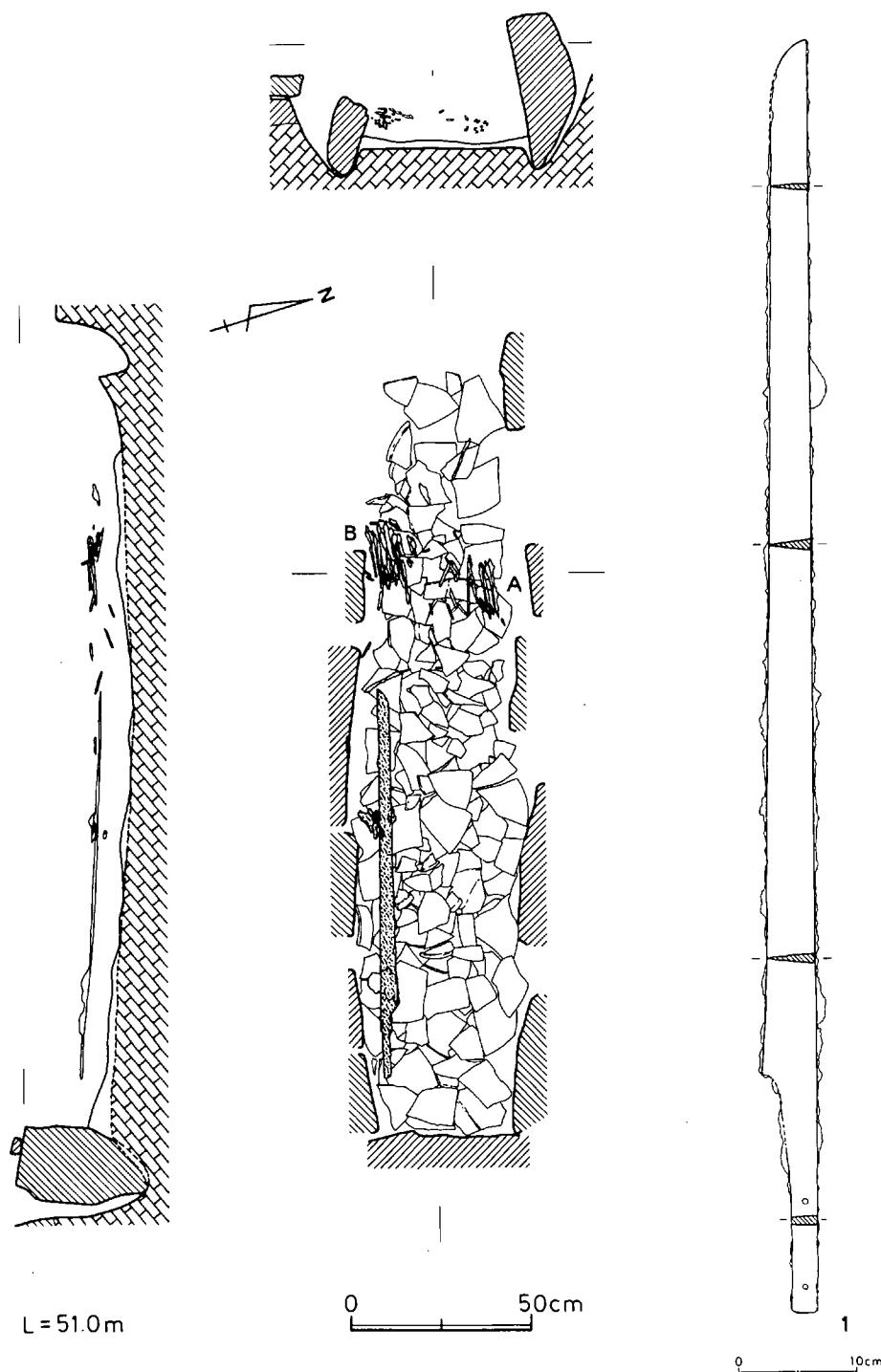
埋葬主体は、箱式石棺である。箱式石棺を主体部とするものでは最も低い位置にある。1号墳の上方にあたる。石棺の方向は、等高線と平行となるように墓壙を穿っている。

蓋石は、すべて失っていた。

側石は、板状の石材を北では5枚、南でも5枚残存し、西端部分の石材が抜かれていた。側

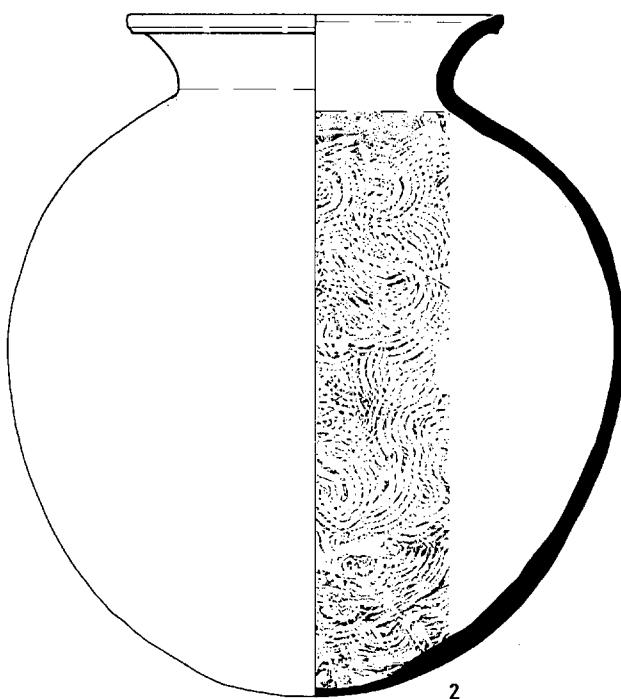
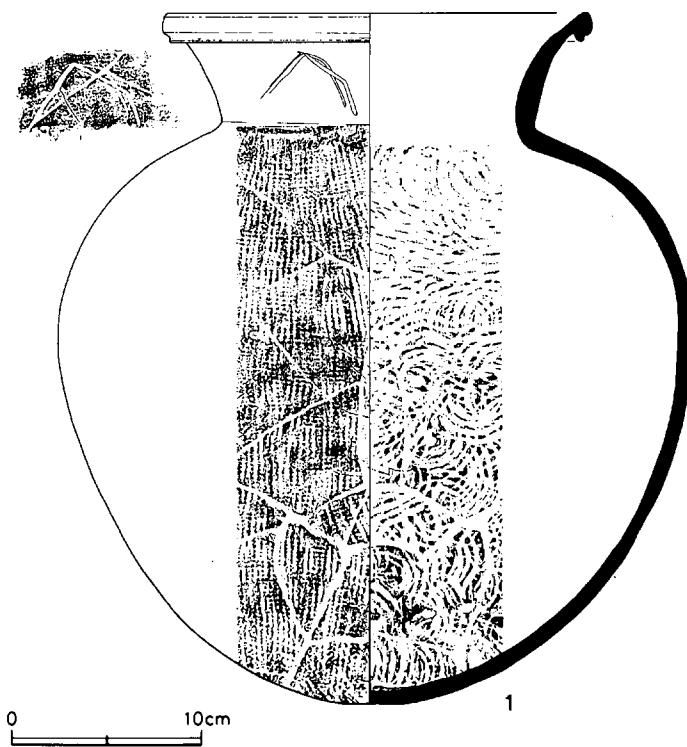


第43図 1号棺平・断面図 ($S=1/30$)



第44図 1号棺床面遺物出土状況図 (S=1/20)

第45図 1号棺出土遺物実測図 1 (S=1/6)



石に規則性は認められない。部分的には2段目の石材が認められる。2段目の石は、1段目より小さく、小口積みに用いていたと思われる。

床面は、須恵器片を敷いていた。

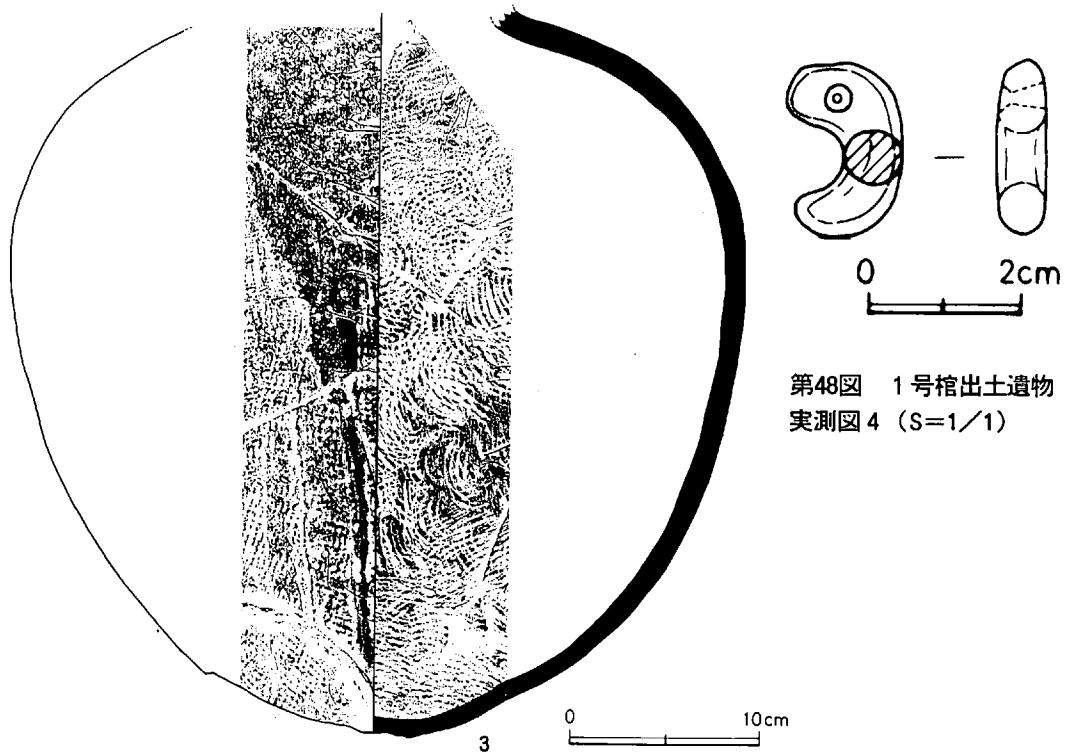
規模は、内法で全長208cm、幅52～37cmを測る。

2. 遺物の出土状況

床面に敷かれていた須恵器は、甕3個体分であり、器表面を上にして敷いていた。この須恵器床上から大刀・刀子・鉄鎌・勾玉が出土した。

大刀は、棺南寄りで刃を内に向け鋒を西に向けてあった。鉄鎌は、おむね2ヶ所に集中していたが、南寄りの束（B群）が最も多く、平根式の鎌は、大刀寄りから出土した。

第46図 1号棺出土遺物実測図2 (S=1/4)



第47図 1号棺出土遺物実測図3(S=1/4)

3. 出土遺物

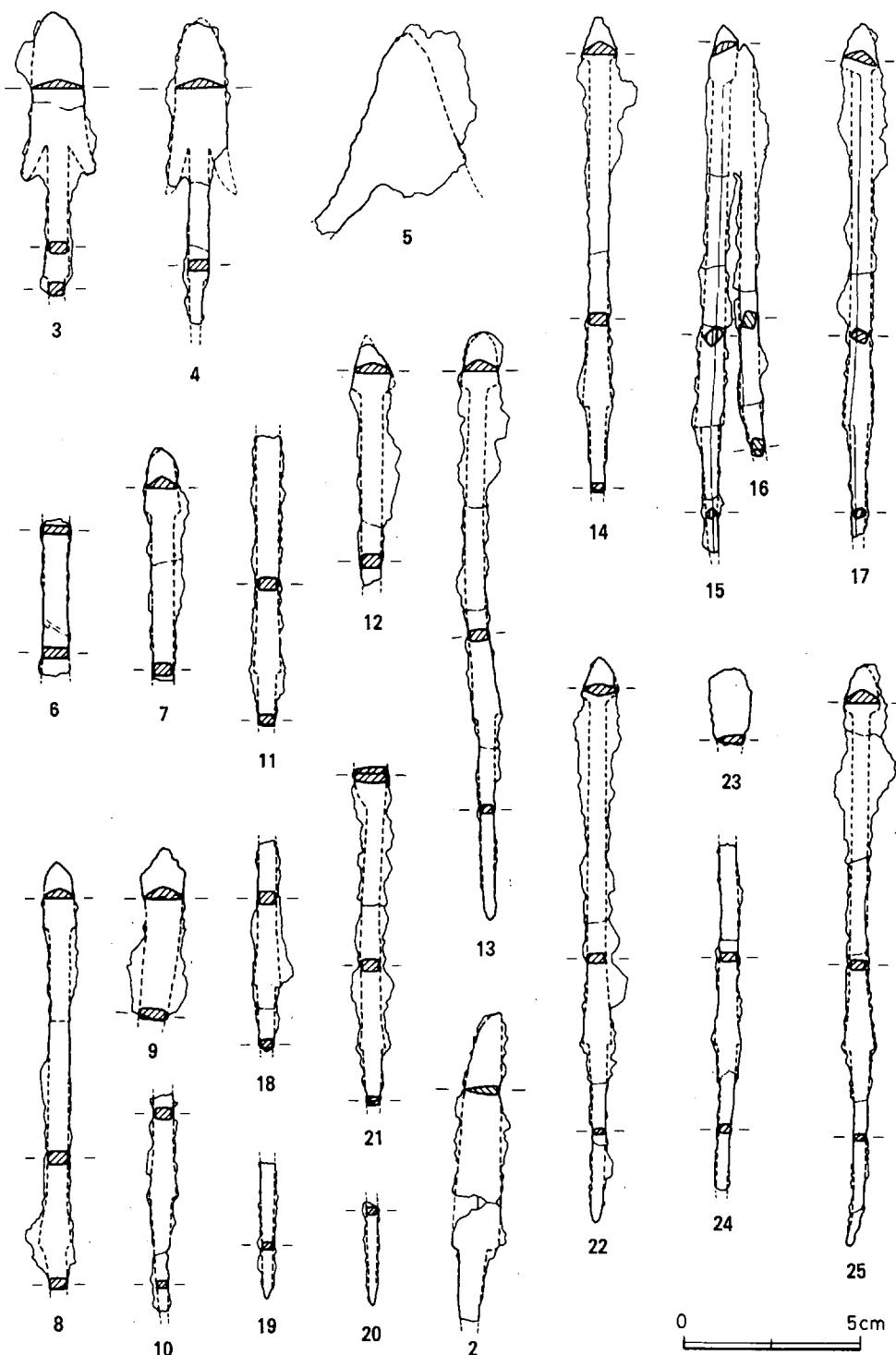
壺(1・2・3) 1は口径22.2cm, 器高36.1cm, 口縁端面に一条の凹線がめぐる。内面は同心円文, 外面は平行タタキである。口頸部にへら記号が刻まれている。2は, 口径19.7cm, 器高36.0cm, 口縁端面に一条の凹線がめぐる。内面は同心円文, 外面は平行タタキである。3は口頸部から上が欠損している。1・2より器壁が厚く, 大型である。外面に自然釉がかかる。

直刀(1) 平造りで, 残存状態は良好である。全長107.5cm, 刃渡86.9cm, 最大刃幅4.15cm, 刃厚0.9cmを測る。関は, 直角片関または無角片関, 茎は, 一文字尻細である。

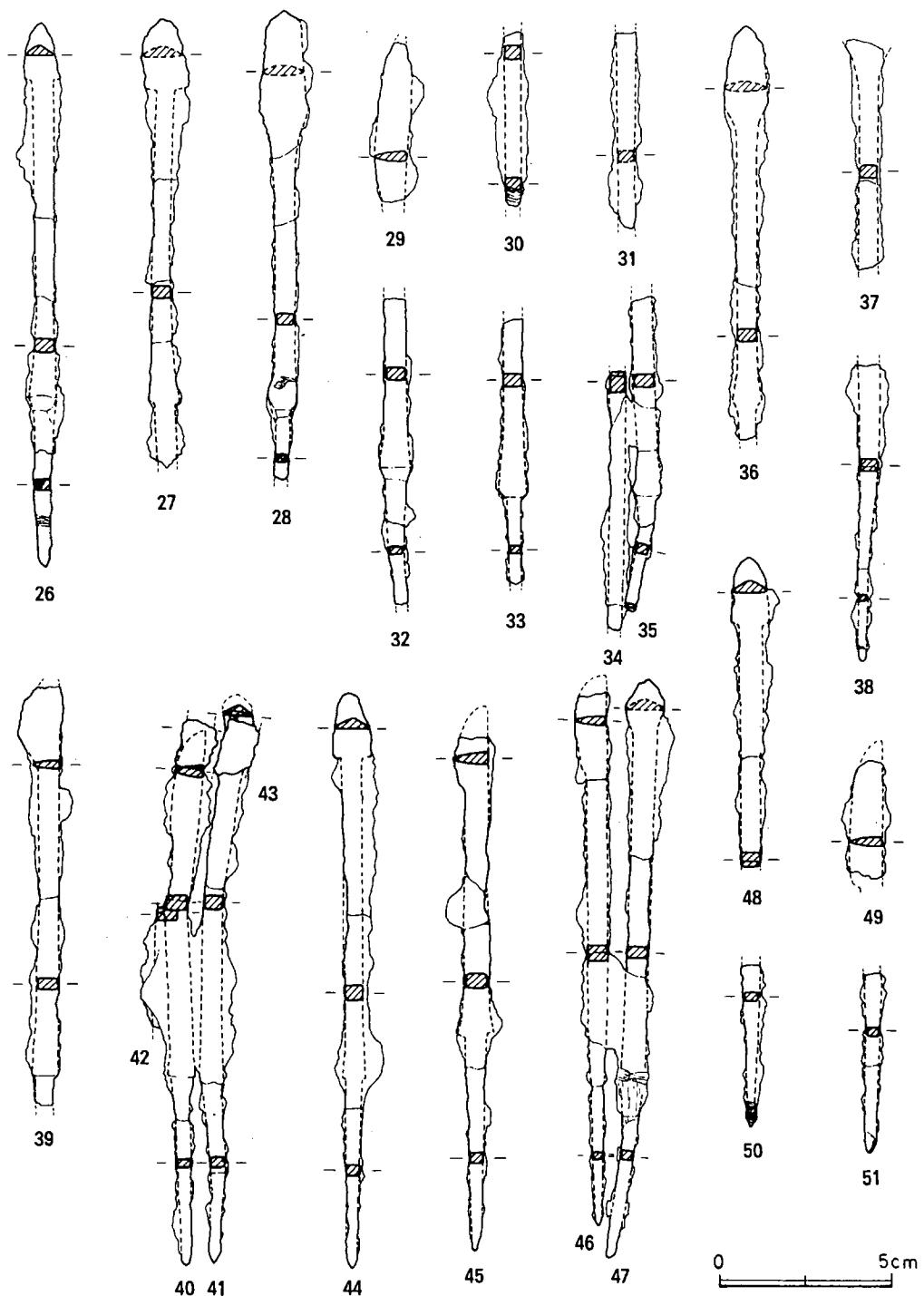
刀子(2) 残存長8.7cm, 刃渡6.6cm, 最大刃幅1.35cm, 刃厚2.5cmである。両関で茎尻は欠損している。

鉄鎌(3~79) 鉄鎌は, すべて有茎鎌であり, 大別すると平根式と尖根式である。計測値は, 別表に示した。

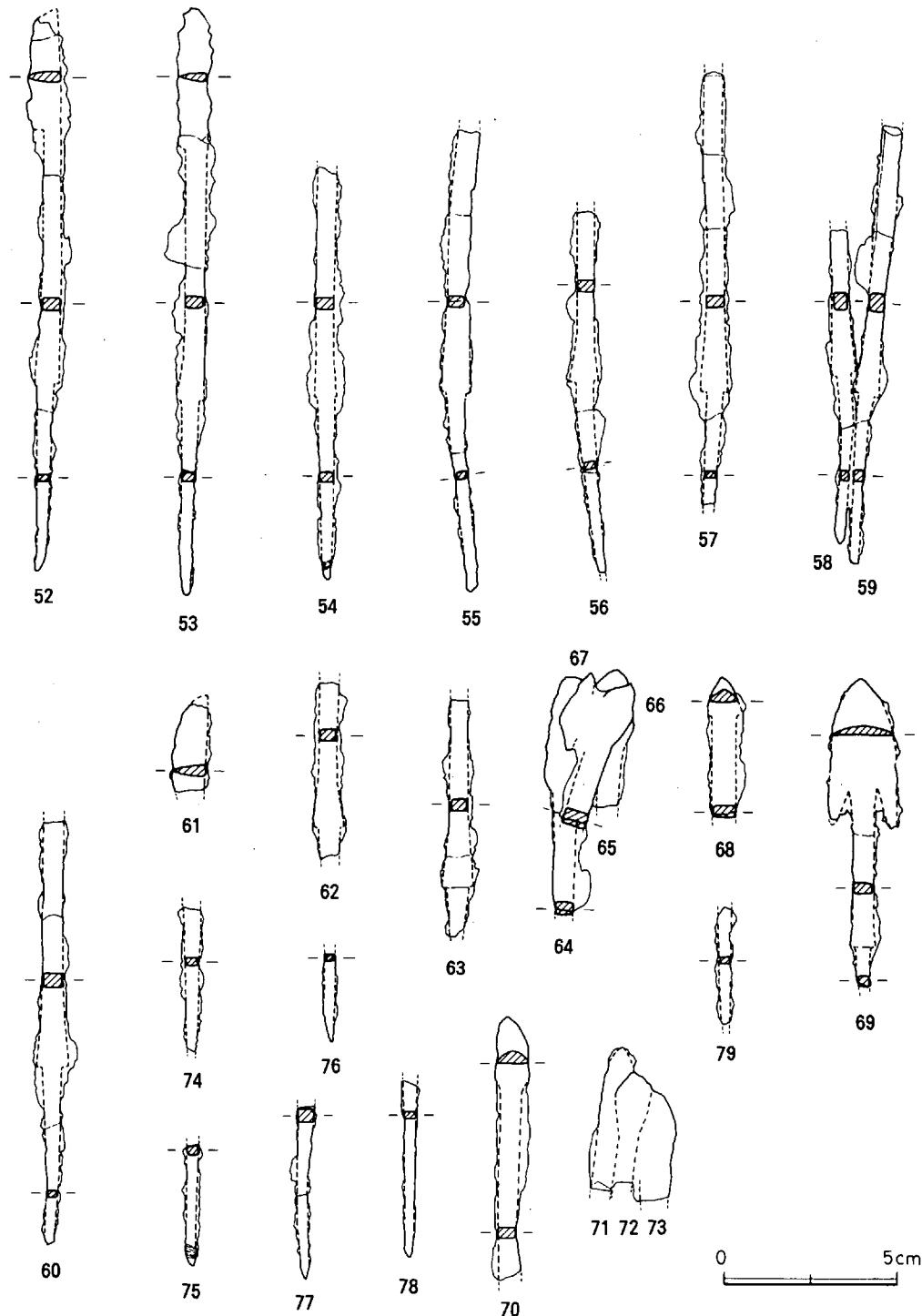
勾玉(80) 淡褐色の瑪瑙製である。器高2.3cm, 頭部0.6cm, 尾部厚み0.6cmである。孔は一方向から穿たれている。



第49図 1号棺出土遺物実測図5 (S=1/2)



第50図 1号棺出土遺物実測図6 (S=1/2)



第51図 1号棺出土遺物実測図7 (S=1/2)

第1表 1号棺出土鉄器計測表

番号	分類	計測値 (cm)					番号	分類	計測値 (cm)				
		全長 (現存)	身部長	最大幅	頭部長	茎部長			全長 (現存)	身部長	最大幅	頭部長	茎部長
1	刀	(107.5)		4.15			41	3(B)	(15.8)	—	0.9	—	—
2	刀子	(8.7)		1.35			42	5(B)	—	—	—	—	—
3	1	(7.9)	4.6	2.1	3.6	(0.4)	43	5(B)	—	—	—	—	—
4	1	(8.4)	(4.4)	(1.7)	3.6	(1.2)	44	3(B)	16.4	1.9	1.2	9.1	5.4
5	1	—	—	—	—	—	45	2(B)	(14.5)	(1.5)	1.0	6.8	6.2
6	5	—	—	—	—	—	46	2(B)	(15.2)	—	0.9	—	—
7	3	(6.4)	1.8	1.0	—	—	47	3(B)	16.4	—	1.1	—	—
8	3	(12.0)	1.8	0.9	9.0	(1.2)	48	3(B)	(8.7)	1.9	1.0	—	—
9	5	(4.8)	—	—	—	—	49	5(B)	(3.3)	—	0.9	—	—
10	5	(6.2)	—	—	(2.9)	(3.2)	50	5(B)	(4.7)	—	—	—	—
11	5(A)	(8.0)	—	—	(6.5)	(1.5)	51	5(B)	(5.2)	—	—	—	—
12	3(A)	(6.7)	(1.4)	(1.1)	(5.2)	—	52	2(B)	(15.4)	(3.0)	1.0	7.1	5.3
13	3(A)	16.3	1.5	1.1	9.1	5.6	53	2(B)	16.5	4.0	0.8	7.0	5.5
14	3(A)	13.1	1.2	1.0	9.5	(2.3)	54	5(B)	(11.5)	—	—	—	5.1
15	3(A)	(14.6)	1.5	0.9	9.5	(3.5)	55	5(B)	(12.9)	—	—	—	5.6
16	3(A)	(11.2)	—	—	—	(1.3)	56	5(B)	(10.1)	—	—	—	5.4
17	3(A)	(14.2)	1.3	1.0	9.8	(3.1)	57	5(B)	(12.1)	—	—	(0.9)	(3.1)
18	5(A)	(5.9)	—	—	—	—	58	5(B)	(8.8)	—	—	(4.0)	4.8
19	5(A)	(3.8)	—	—	—	—	59	5(B)	(12.3)	—	—	(7.5)	4.8
20	5(A)	(2.9)	—	—	—	—	60	5(B)	(11.9)	—	—	(6.9)	5.0
21	2(A)	(9.2)	—	0.9	6.8	(1.5)	61	2(B)	—	—	1.0	—	—
22	4(A)	15.9	1.3	1.0	9.5	5.0	62	5(B)	(4.8)	—	—	(4.0)	(0.8)
23	2(A)	—	—	—	—	—	63	5(B)	(6.6)	—	—	(5.2)	(1.4)
24	5(A)	(9.7)	—	—	(5.6)	(4.1)	64	5	—	—	—	—	—
25	3(A)	16.3	1.3	1.0	9.4	5.5	65	5	—	—	—	—	—
26	3(B)	15.8	1.6	1.0	9.4	4.4	66	5	—	—	—	—	—
27	3(B)	(12.7)	2.0	1.1	8.8	(1.8)	67	5	—	—	—	—	—
28	4(B)	(13.3)	3.7	1.2	7.3	(2.2)	68	3	(3.8)	1.1	0.9	(2.7)	—
29	5(B)	(4.5)	—	—	—	—	69	1	(8.7)	4.2	2.0	4.5	(1.1)
30	5(B)	(4.9)	—	—	—	—	70	3	(7.5)	2.0	0.9	(5.5)	—
31	5(B)	(5.4)	—	—	—	—	71	5	—	—	—	—	—
32	5(B)	(8.7)	—	—	(4.7)	(4.0)	72	5	—	—	—	—	—
33	5(B)	(7.5)	—	—	(5.0)	(2.5)	73	5	—	—	—	—	—
34	5(B)	(7.2)	—	—	—	—	74	5(B)	—	—	—	—	(4.1)
35	5(B)	(8.9)	—	—	(5.6)	(3.3)	75	5(B)	—	—	—	—	(3.4)
36	3(B)	(11.7)	(2.9)	(1.3)	(7.6)	(1.1)	76	5(B)	—	—	—	—	(2.5)
37	5(B)	(6.4)	—	—	—	—	77	5(B)	—	—	—	—	(5.0)
38	5(B)	(8.5)	—	—	—	5.6	78	5	—	—	—	—	(5.0)
39	5(B)	(11.9)	(2.2)	—	8.8	(0.8)	79	5	—	—	—	—	(3.3)
40	2(B)	15.2	3.0	0.8	6.9	5.3							

※分類 有茎鎌……1 平根式 腸抉三角形式
 2 尖根式 片闊の刀子形
 長頸鎌……3 尖根式 両闊形 片丸造り
 4 尖根式 両闊形 両丸造り
 5 その他

(A)(B) は第44図のA・Bに対応する

(2) 2号棺

1. 埋葬主体

2号棺は、調査区のほぼ中央の4号墳と5号墳の中間の位置にあり、主軸方向は、等高線と平行である。

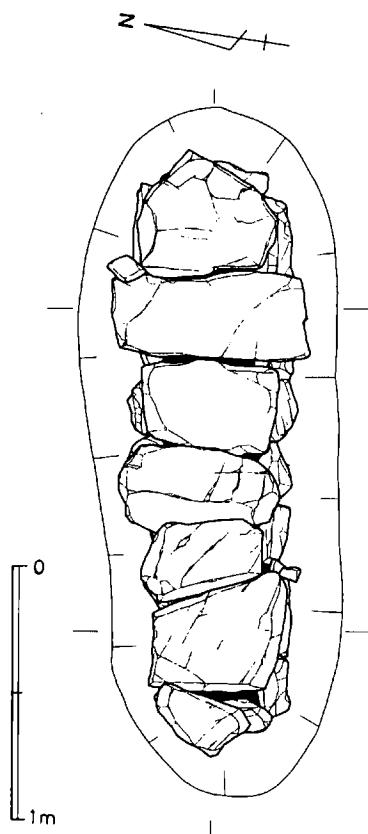
墓壙は、長さ約2.7m、幅約1mの長円形を呈する。蓋石は5枚あり、比較的大きさ及び厚みの整った板石を用いている。蓋石を合わせた長さは約2.4m、幅約0.4mを測る。

箱式石棺の側石は、板状で薄く不安定なものをあまり深く埋め込まずに立て並べている。小口の石材も側石と同様である。

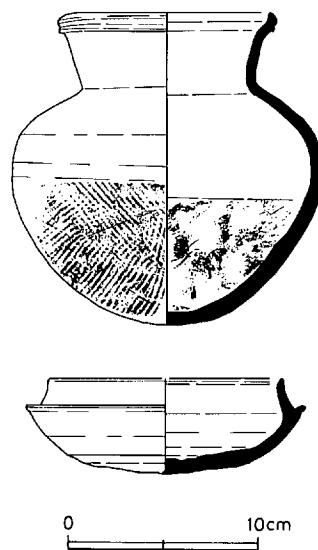
主体部の内法は、長さ190cm、幅30cmを測り、床面には真砂土を敷き、東端には偏平な枕石が据えられていた。

2. 出土遺物

床面上には遺骸の痕跡は認められなかったが、足元と想定される位置に須恵器壺1点が置かれていた。また、棺外の斜面上方の近接した位置からは須恵器壺1点が出土している。



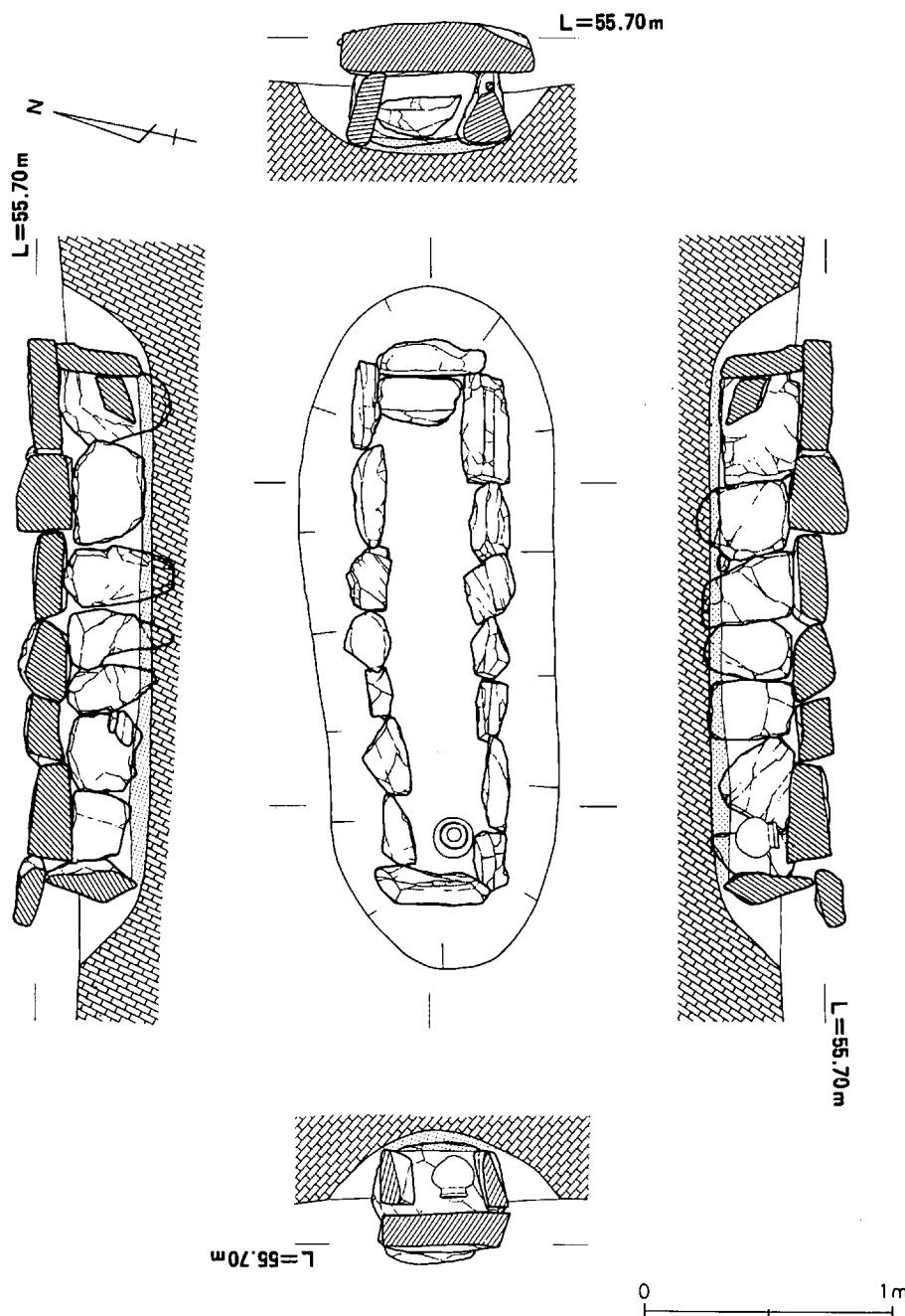
壺は体部下半は外面平行叩き、内面同心円叩きで成形され、上半から口頸部はヨコナデが施される。口縁端部には1条の突帯を貼り付けている。焼成は良好で暗灰色を呈している。



第52図 2号棺蓋石検出状況図 (S=1/30)

第53図 2号棺出土遺物実測図 (S=1/4)

2号棺は、土器から考えて6世紀の中ごろに比定できるが、他の箱式石棺との先後関係は、あまり明確でない。しかし、石材の用い方や、石枕を有することなど他の石棺とはやや異なる様相も認められ、時期差と考える余地があるかもしれない。



第54図 2号棺平・断面図 (S=1/30)

(3) 3号棺

1. 埋葬主体

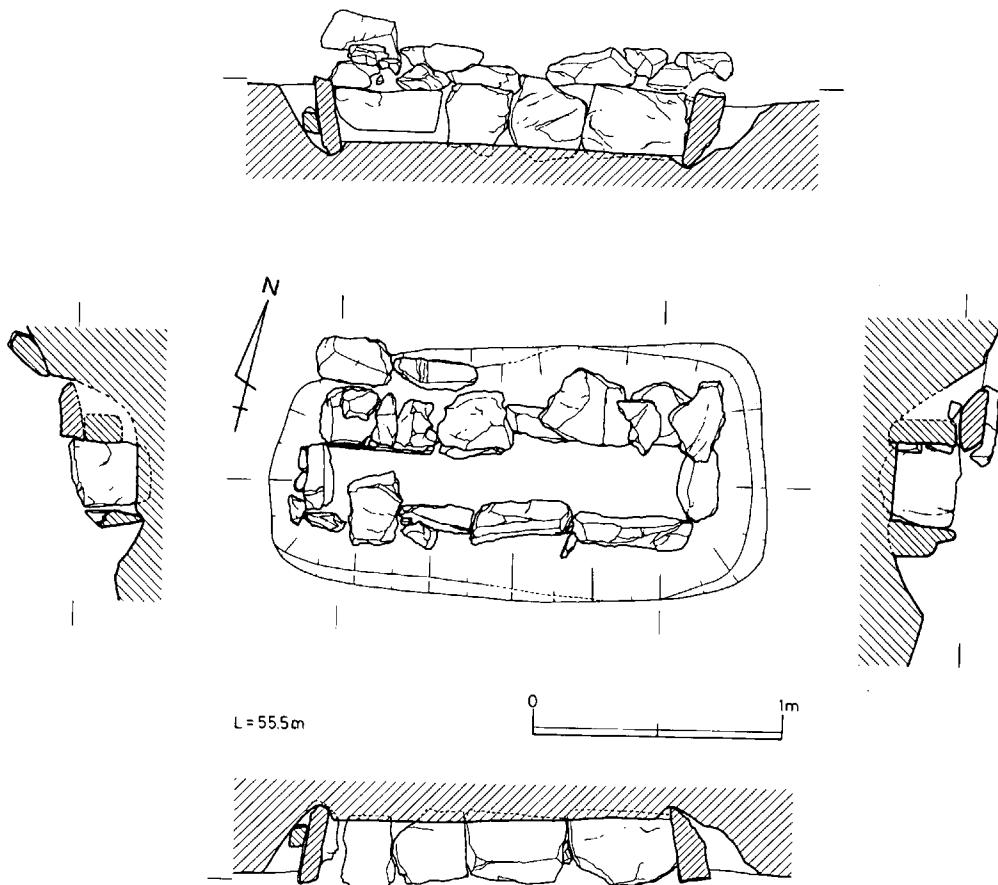
埋葬主体は、箱式石棺である。箱式石棺を主体部とするものでは最も高い位置にある。5号墳の下方にあたる。石棺の方向は、等高線と平行となるように墓壙を穿っている。

蓋石は、全く残存していなかった。

側石は、板状で北では4枚、南では5枚である。北側では、2段残っており、2段目の石は板状の石を横積みにしている。南側は、1段目しか残存していないが、本来は北同様に2段であったと考えられる。

規模は、内法で全長138cm、幅32~27cmを測る。

遺物は、埋土中から須恵器の細片などがごく少量出土したにとどまる。



第55図 3号棺平・断面図 ($S=1/30$)

(4) 4号棺

1. 埋葬主体

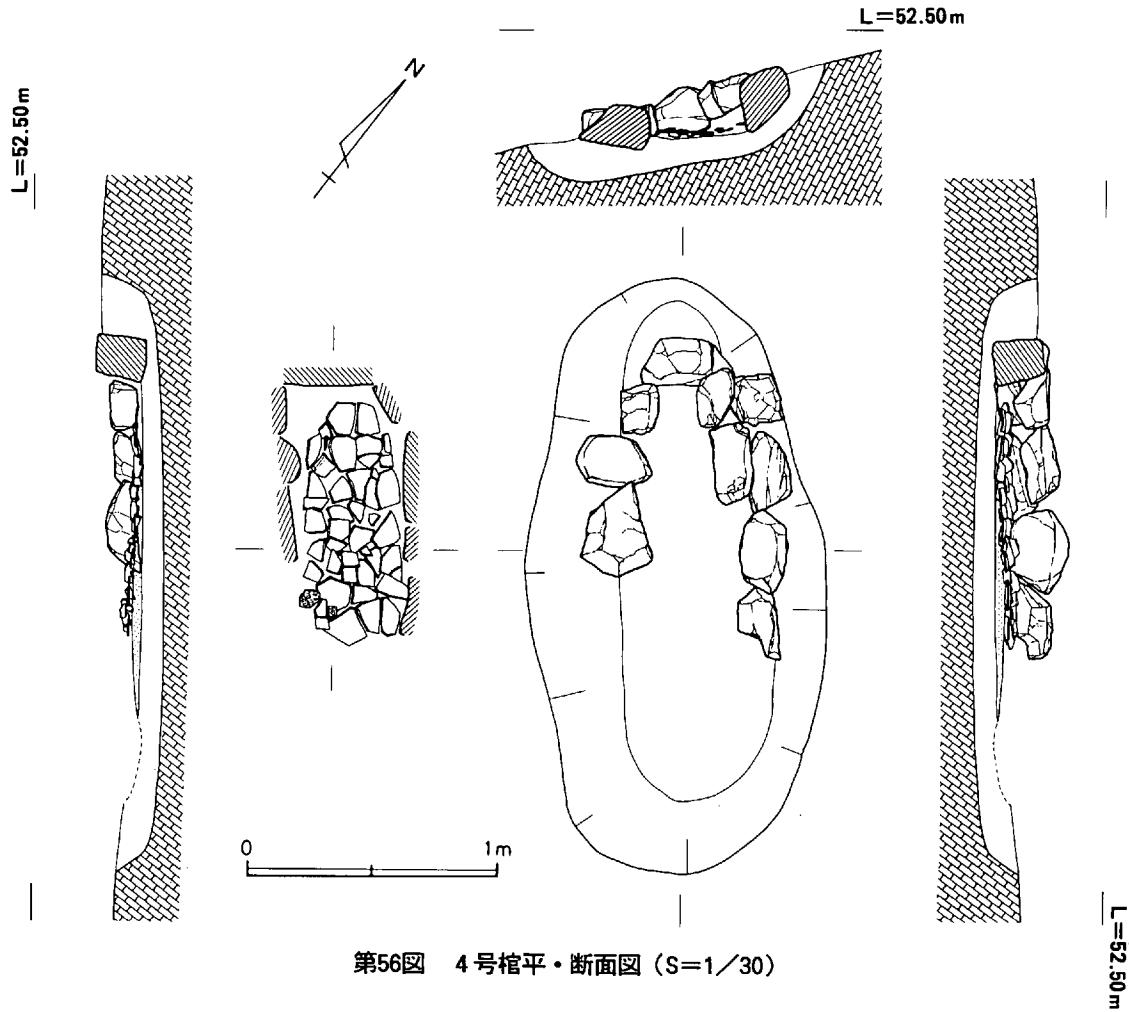
4号棺は、調査区南寄りの5号棺と1号棺の間に位置し、緩斜面の等高線に平行して築かれている。墓壙は、長さ220cm、最大幅120cmの楕円形である。箱式石棺は、その石材のほぼ半分が流出しているが、推定長約160cm、幅約40cmである。

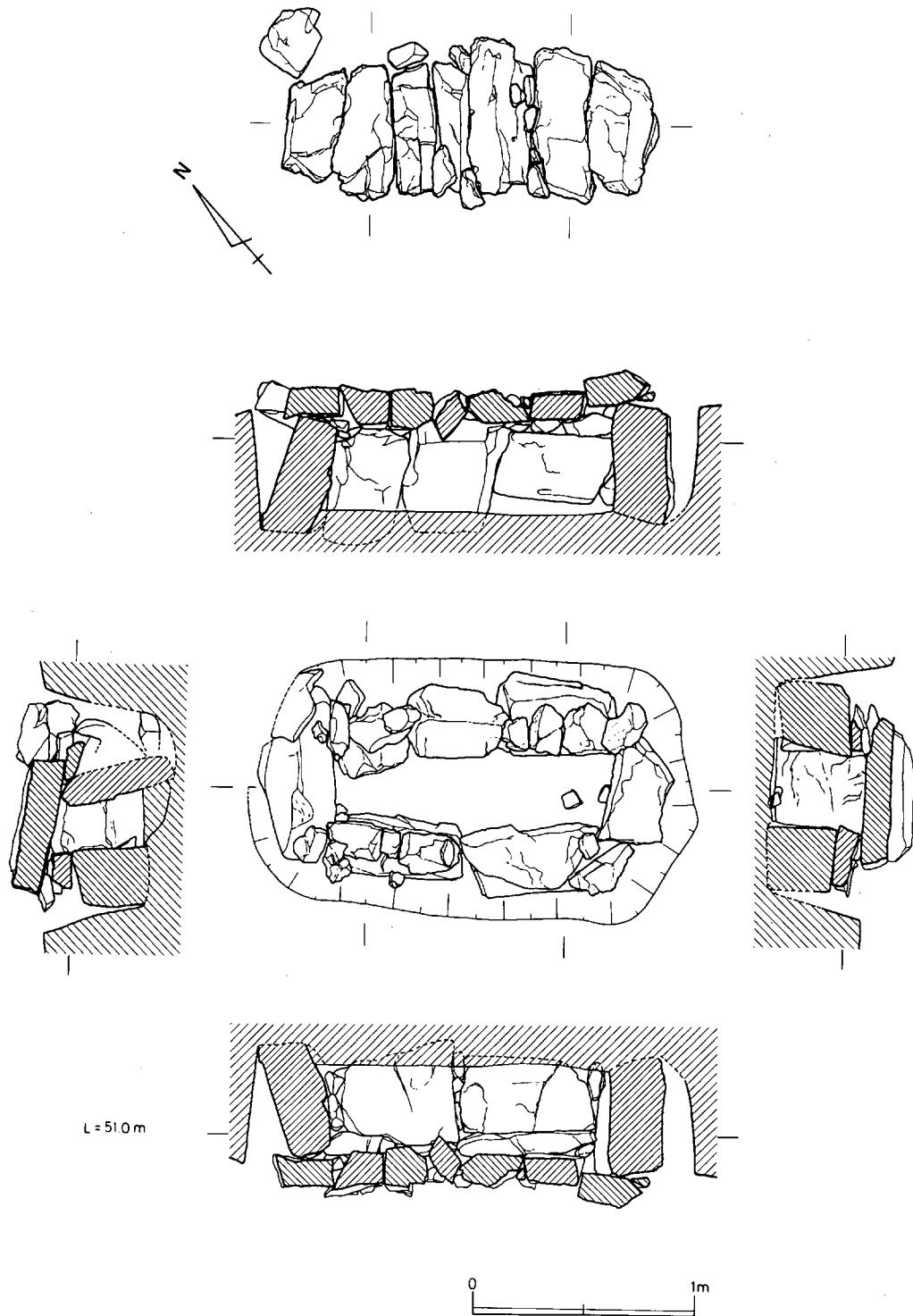
床面には、須恵器の甕の体部を破碎したものが、外面を上に向けて敷かれている。

また、棺内に転落した石材や、残存している石材の高さ、あるいは用い方が側面よりも底面あるいは上面を重視した積み方であり、2段以上の石積みがあったことが予想できる。

2. 出土遺物

床面に敷かれていた甕は、口頸部及び底部を欠いており、図示できなかったが後述の5号棺などとさほど隔たらない6世紀中葉の年代を与えることができよう。





第57図 5号棺平・断面図 (S=1/30)

(5) 5号棺

1. 埋葬主体

埋葬主体は、箱式石棺である。箱式石棺を主体部とするものでは最も西に位置する。2号墳の下方にあたる。石棺の方向は、等高線と平行となるように墓壙を穿っている。

蓋石は、7枚で間隙に小石を充填している箇所が認められた。

側石は、他の石棺とやや異なり、一段目の石に長方形の厚い石を用いている。2段目には、板状の石を横に用いている。

規模は、内法で全長126cm、幅40～25cmを測る。

2. 遺物の出土状況

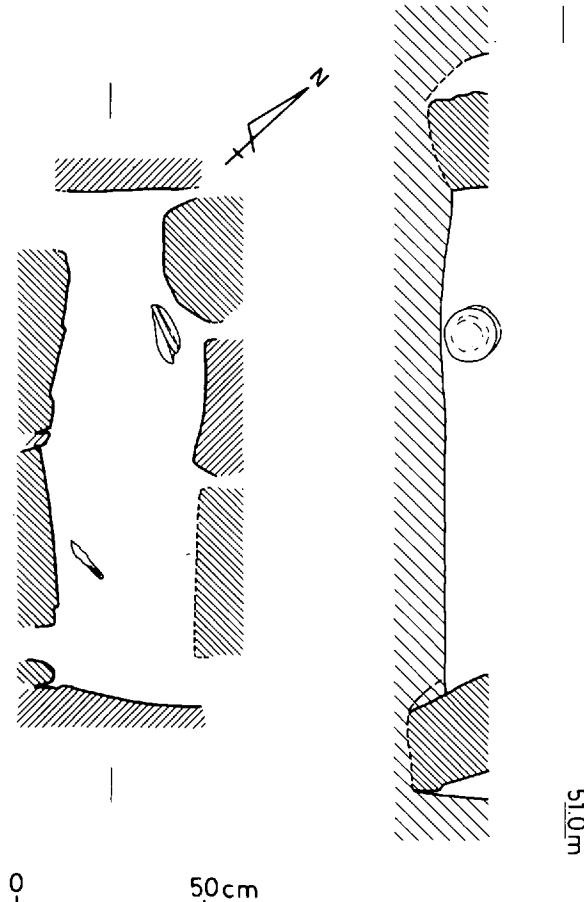
棺内から須恵器と刀子が出土した。須恵器は壊で、蓋と身が北側壁側に立てられていた。刀子は南側壁寄りで出土した。

3. 出土遺物

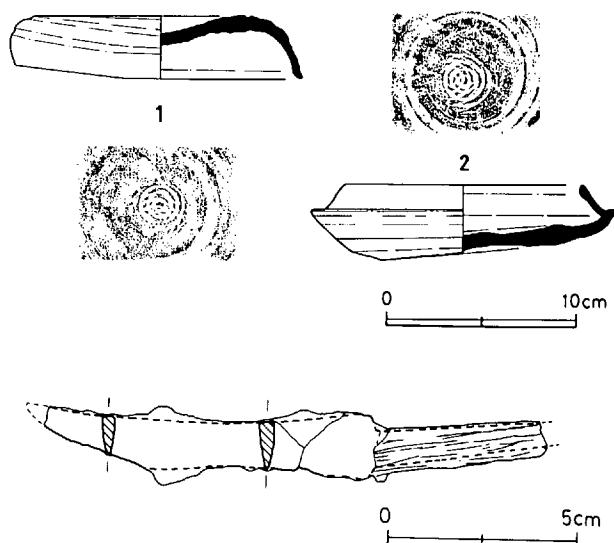
壊蓋・身（1・2） 1は蓋で口径15.1cmあり、天井と体部との境に凹線がめぐる。口縁端部は段を有する。2は身で口径12.5cm、口縁端部は段を有する。

刀子（3） 残存長13.0cm、刃幅1.2cm、刃は鋒に向かって湾曲してせばまっている。

須恵器の特徴からみて6世紀中ごろの時期と考えられる。



第58図 5号棺遺物出土状況図 (S=1/20)



第59図 5号棺出土遺物実測図

(土器=1/4・鉄器 S=1/2)

(6) 6号棺

1. 埋葬主体

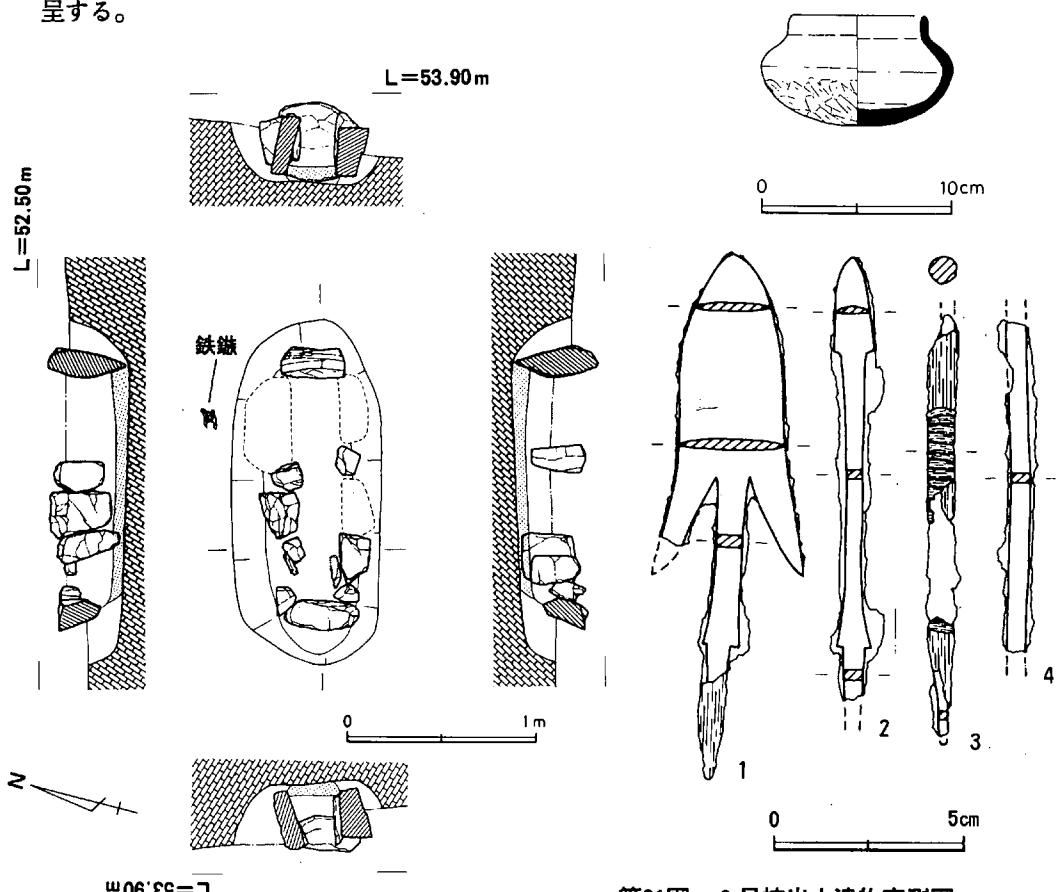
6号棺は、調査区南半の4号墳の上方に位置し、緩斜面の等高線に平行して築造されている。主体部は、小口の石材は残っているが、側面のものはほとんどが流出している。石材は、ほとんどが板石の平坦面を内側に向けて立てられた状態である。

墓壙は、長さ180cm、幅80cmの楕円形で、側石を立てる位置は溝状にやや掘りくぼめている。埋葬主体の内法は、長さ115cm、幅20cm、高さ30cmを測る。

2. 出土遺物

遺物は、棺内には全く認められないが、棺外のやや上方の斜面で須恵器短頸壺1個と鉄鏃4本が出土した。

須恵器 短頸壺は、底部外面に不整方向のヘラ削りが加えられる。焼成は良好で、黒灰色を呈する。



第60図 6号棺平・断面図($S=1/40$)

第61図 6号棺出土遺物実測図

(土器 $S=1/4$ ・ 鉄器 $S=1/2$)

鉄鎌 1は、腸抉柳葉式であり、関部は台形関、茎の一部に若干木質が付着している。2は、長頸鎌であり、鎌身は片丸造りに近く、鎌身関は斜関・頸部の関は台形関と考えられる。3は長頸鎌の茎部と考えられる。木質とその上に巻き付けられた樹皮が比較的よく残存している。4は、長頸鎌の頸部である。

鉄鎌は、少量の副葬であるが、長頸鎌を中心として有茎鎌を少量含む組成と考えられる。

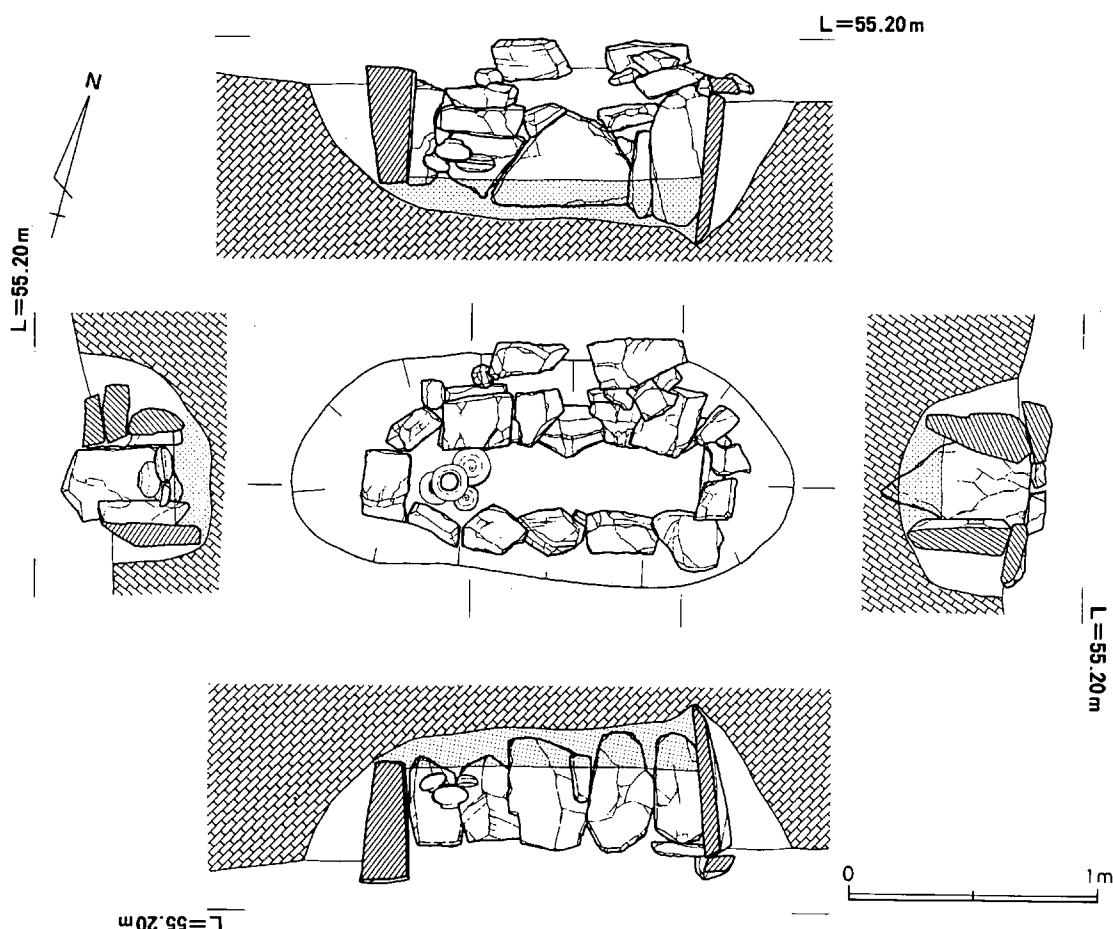
6号棺の時期は6世紀前半と考えられる。

(7) 7号棺

1. 埋葬主体

7号棺は、調査区中央の標高55m付近に位置する箱式石棺である。

墓壙は、長さ約2m、幅90cmの長円形を呈する。石材は、側部の南側は板石を5枚立ててい



第62図 7号棺平・断面図 (S=1/30)

るが、北側は不整形な石を用いて一部を3段に積んでいる。小口は比較的形の整った板石を用いている。また、偏平な小型の板石を立てられた石の上に載せるなど、一見竪穴式石室的な石材の用い方とも考えられる。

主体部の規模は、長さ120cm、幅35cmで、床面には細かい真砂土がよく締められて敷かれていた。

2. 出土遺物

遺物は床面から須恵器壺、蓋、有蓋短頸壺などが出土した。これらは壺と小型の壺の上に大きい壺が載せられた状態で検出された。また、下から出土した短頸壺の1個の中にベンガラが多量に詰められていた。

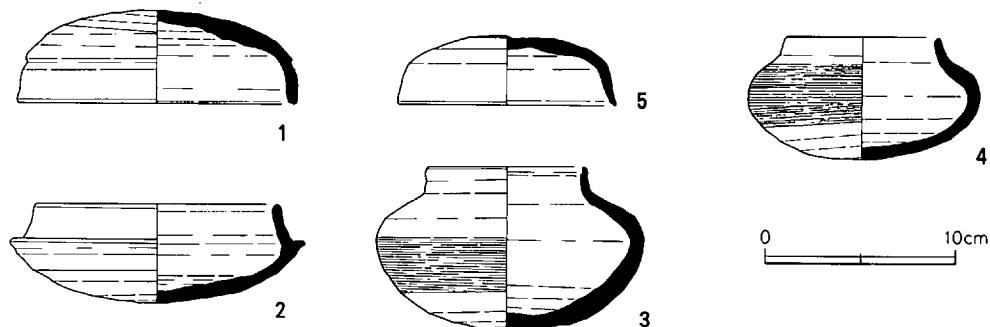
この出土状態から、土器は遺骸の枕とするために置かれたとも考えられる。

1と2は、壺に蓋を被せた状態で出土した。容器の中からは何も検出されなかった。いずれも焼成は良好で青灰色を呈する。3・4の短頸壺は、いずれも体部カキ目調整の後、底部に回転ヘラ削りを加えている。焼成は良好で黒灰色を呈する。5は、短頸壺の蓋で、あおむけに置かれて出土している。3の壺の下なので後に転落したものではなく、当初からの位置と考えられる。

なお、4の短頸壺のベンガラは、3の短頸壺の底部にもかなり付着するなど、容器一杯に詰められていた。

7号棺の被葬者は、埋葬主体の法量から成人とは考えられないが、人骨などはまったく出土していないため不明である。

遺構の時期としては、6世紀の前半と考えられる。



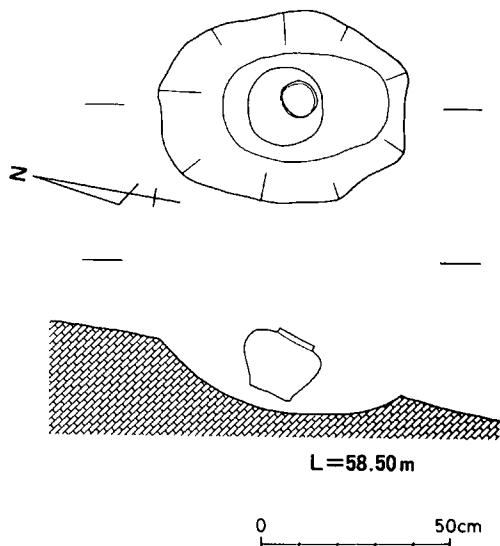
第63図 7号棺出土遺物実測図 (S=1/4)

第4節 火葬墓

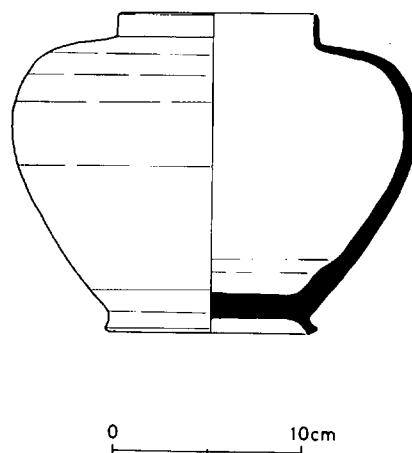
(1) 1号墓

1号墓は、2号墓とともに丘陵の頂部近くに築造された5号墳の前庭部の調査中に検出された。ほぼ円形の掘り方に薬壺形の須恵器を容器として埋納している。蓋は検出されていない。須恵器の中には、細片となつた火葬骨の破片が少量含まれていた。

須恵器は、肩の張った安定したプロポーションをもつ。法量は、口径10.6cm、器高17.2cmをはかる。8世紀中頃の時期と考えられる。



第64図 1号墓検出状況図 (S=1/20)

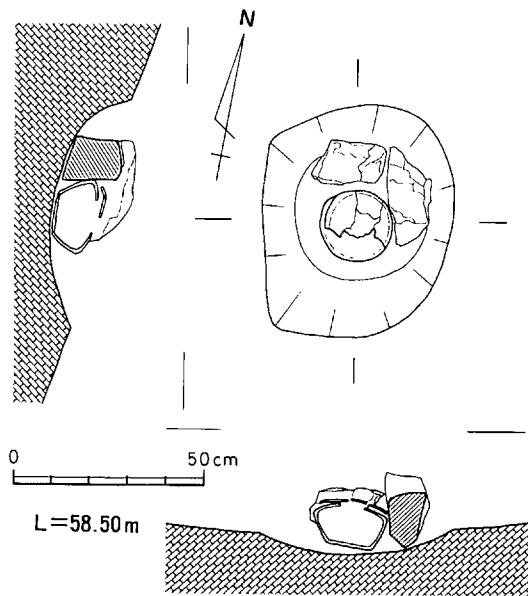


第65図 1号墓出土遺物実測図 (S=1/4)

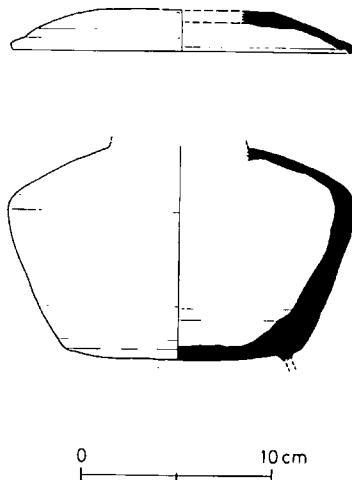
(2) 2号墓

2号墓は、1号墓の東に隣接して検出された。1号墓と異なり、掘り方の二方に偏平な石を立てて石囲いとしている。底面は土床である。容器は、須恵器の高台付きの長頸壺の高台と頸部から上を打ち欠いたものを身とし、偏平なつまみをうち欠いたと考えられる須恵器の蓋で覆う。

須恵器は、蓋が口径17.7cm、器高2.1cmで焼成が十分でないためか淡い黄褐色を呈し、軟質で



第66図 2号墓検出状況図 (S=1/20)



第67図 2号墓出土遺物実測図 (S=1/4)

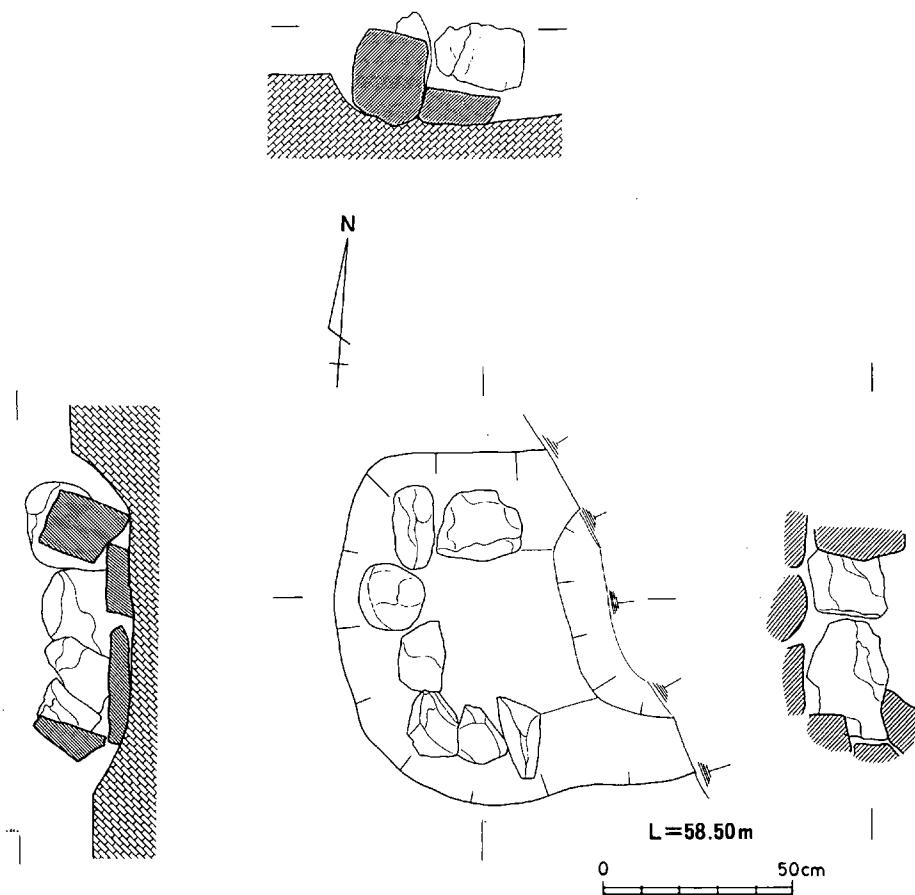
ある。身のほうが最大径19.3cm、器高11.5cmである。灰青色を呈し、焼成は良好。高台の接合部は焼成後に割り取られたものらしく、器壁が抉りとられて薄くなっている部分もある。須恵器の形態の特徴からみて、時期は1号墓と大きく隔たらない8世紀中ごろから後半と考えられよう。

(3) 3号墓

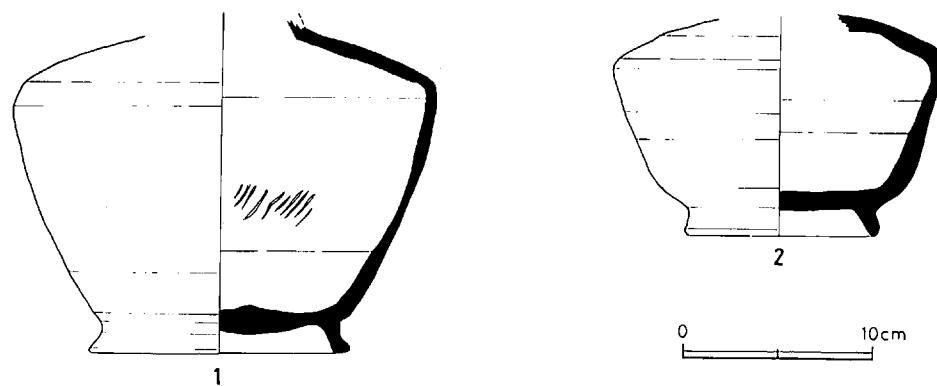
3号墓は、平成2年の確認調査時に検出された。1・2号墓からは尾根づたいに約150m離れた位置である。バックホウで掘削したトレーニチ内に石組が露出していた中に埋納されていたものを工事作業員が誤って掘り出してしまったため、容器が墓壙内にどのような配置で納められていたか不明な点もあるが、容器の大きさからみてほぼ正方形を呈する墓壙内の対角線上に2個の容器が並べて置かれていた蓋然性が高い。容器は、2号墓と同様に須恵器の高台付きの長頸壺の高台部と頸部から上を打ち欠いて身として用いている。蓋は出土していないため本来あったかどうか定かでない。

須恵器は、1が最大径22.8cm、器高18.6cmをはかり、暗灰色を呈し、形態及び色調は2号墓のものに近似する。2は最大径17.5cm、器高11.3cmであるが、灰黄色で、焼成が十分でなく、やや軟質である。

時期は1・2号墓とさほど隔たらない8世紀の後半ごろであろう。



第68図 3号墓検出状況図 ($S=1/20$)



第69図 3号墓出土遺物実測図 ($S=1/4$)

第5節 まとめ

今回の調査においては、これまで述べてきたとおり、弥生時代から古墳時代に及ぶ主に埋葬関係の遺構が数多く検出された。

まず、弥生時代のものでは、壺棺墓、住居址、土器溜りなどが存在した。古墳群の存在する部分は、壺棺墓の存在からみて、弥生時代においては集落の中心部分というよりもむしろ集落の縁辺部であったとみるべきであろう。住居址については、平成2年の確認調査時に1棟が検出されたため、その周囲を精査したが他には認められなかった。ただし、斜面部で現在住宅に接している部分で切土とならない地点では調査を行っていないため、住居址を検出した部分よりさらに下方に遺跡が広がっている可能性もないわけではない。

弥生時代の遺物では、磨製石剣が注目される。岡山県内では類例に乏しく、作東町高本遺跡の住居址から出土した例（註1）が知られる程度である。折損し、しかも折れた茎のつけ根の部分を磨いていることから、これが大切に扱われていたらしいことが推察される。また、土器溜まりの中から出土していることから、あるいは埋納するという意識があったとみることも可能であるかもしれない。この石剣の形態は、鉄剣形（註2）に分類されるものであるが、柄がなく、双孔を穿ち、細い茎を持つという形態の特徴から強いて類例を求めれば、大阪府加美遺跡出土の銅剣（註3）を指摘することができよう。

古墳群は、昭和56年に調査を行った3号墳を加えてあわせて6基の古墳で構成され、さらにそれら以外に明確な墳丘を持たない、箱式石棺7基が検出されている。時期としては、6世紀前半から7世紀中ごろにわたるが、最後の古墳と考えられる5号墳の前庭部に近接して奈良時代中ごろの火葬墓2基が構築されていることは、このごく限られた一角が、特定の有力家族の墓域に供されてきたことを物語っているのかもしれない。

古墳は、出土遺物及び内部主体の変化などを考慮すると、まず6世紀前半ごろに堅穴式石室をもつ2号墳が築かれ、6世紀半ばに横穴式石室の3号墳と堅穴系横口式石室を主体部とする1号墳が相前後して築かれ、さらに6世紀後半の横穴式石室の4号墳、7世紀中頃の横穴式石室の5号墳という順に築造されたものと想定できる。墳丘の規模は、いずれも10m内外で、5号墳がやや小さいのを除けばほぼ一致している。主体部の方向は、1・2・7号墳が等高線の方向あるいは尾根の方向に平行に築かれているのに対して、3・4・5号墳は、尾根に直交あるいは谷に向かった方向に開口するといった違いを見せる。先に記した築造順序と比較すれば1号墳が、特異な堅穴系横口式石室を採用しているため、横穴式石室の一般的な傾向（註4）と差を生じている点が注意される。

7号墳は、小規模な竪穴式石室を主体部とし、等高線に平行な主軸方向をとる。墳丘及び石室の上部がかなり失われているため不明な点が多いが、これを他の5基に先行する形態とみると、横穴式石室の退化した形態で副葬品が徐々に乏しくなる時期（註5）に属するものと見ると、2通りの解釈が想定される余地がある。しかし、尾根の稜線上に立地する点および石室の石材において、特に小口に偏平な割り石を立てて用いる手法を用いている点を考慮に入れれば、前者とするほうが説明をしやすいであろう。特に側壁の石材の用い方は2号墳の退化形態と見られなくもない。

箱式石棺は、7基が検出されている。規模は1号棺のように長さ2mを超え、古墳である7号墳の主体部よりも大きいものから、4号棺や6・7号棺のように、内法の幅0.3m、長さ1mに満たないものまで、著しい格差を生じている。これら石棺の共通点としては、いずれも等高線の方向に平行に主軸方向をとること、側石が1ないし2段であることなどがあげられる。1・4号棺の2基は、床面に須恵器甕を破碎したものを敷きつめている点が特異である。他の5基はいずれも土床である。また、古墳の床面においても、2・3号墳が円礫を用いた礫床、1・4号墳が土床、5号墳が2・3号墳よりも大きな角ばった礫を用いた礫床という差があるが、須恵器を床面に敷く例はない。1号棺は、須恵器の成形技法などから、2号墳に近い時期の築造と考えられる。東側の小口の石材は欠失しているが、全体的にみて塊状の小型の石材を用いている点と特に長さが他と比べて著しく狭長である点が特徴である。

7基の箱式石棺の先後関係については、棺内または棺外から出土した須恵器から1→2→7→6→5という変遷を想定できよう。なお、3号棺は、遺物を伴わないことから、時期については、明確でないが、主体部の長さが次第に減少するという傾向をもつとすれば2号棺よりも新しい時期の可能性がある。4号棺は、床の須恵器甕が口縁部を欠いていることから、細かな時期を示すことは困難だが、強いていえば5号棺に近い6世紀中葉ごろの時期といえなくもない。

これらの明確な墳丘をもたない小石室については、横穴式石室の退化形態とする意見（註6）や、成人を伸展葬するには不可能な規模であることから、被葬者を乳幼児とする考え方や本来横穴式石室に追葬されるはずであった被葬者を葬った改葬墓（註7）とする見解もある。今回の調査例では、この種の石室としては例外的に須恵器を伴うものが多く、最後出と考えられる5号棺でも6世紀中葉ごろであるから、これらを横穴式石室の退化形態とするには、年代の面から不合理がある。被葬者が成人であったか、乳幼児であったかについては、人骨をまったく出土していないために決定は困難であるが、石棺が時期が降るに従って小型化するという傾向を重視するならば、被葬者が成人から乳幼児に転換したとは考えにくいのではないか。

火葬墓は、5号墳の前庭部そばに2基、そして同じ尾根上の東約150mの位置に1基が検出

された。容器及び埋納の方法において、素掘りの土壙に薬壺形の容器を納めた1号墓と、小石室状の石囲いの中に、高台付の瓶の高台と頸部から上を打ち欠いたものを納める2・3号墓に分かれる。また、3号墓は、石囲いの底面に割り石を敷く。これは、出土状態に不明な点もあるが、2個の容器が埋納されていた可能性が高い。年代としては8世紀中ごろから後半と考えられる。

これまでの資料によれば、岡山県内において、総社市付近は、奈良～平安時代の火葬墓の分布の希薄な地域と考えられてきた（註8）。今回検出された3基の例は、古墳の前庭部に近接して2例が検出されている点が注意される。しかし、古墳で最後に築造された5号墳は7世紀中頃であり、追葬の可能性があるとしてもなお火葬墓との間に年代のギャップが大きいことから、両者が例えれば同一の家族であるか否かについては明らかにしないから、ここが長期間にわたって連綿と、墓域として機能していたという点を強調するにとどまる。

この周辺には、尼子山古墳を最大として、数多くの古墳が築造されている。これまでに調査が行われたのは、その中のごく一部にすぎないが、今回調査が行われた範囲は、古墳時代の後半期にいたって、新たに墓域に加えられたと考えられる。それは、総社平野の豊かな生産力に支えられて、古墳の築造がそれまで以上に活発になった、つまり古墳の築造者層が拡大したことばかりではなく、総社平野の中において、この地域の地位を相対的に上昇せしめた何らかの理由によって生じた事態であると考えることができるのではないかと思われる。すりばち池古墳群の所在するこの一帯においては、すでに青谷川2号墳の調査時に木炭窯が検出されているように、このあたりが、おそらくとも7世紀までに製鉄に関わる生産の場として重要な位置を占めていたらしくことは容易に想定できる。今回の調査においても、6世紀前半の2号墳の墳丘上、6世紀後半ごろの1号墳の石室内、7世紀前半の5号墳の石室内でそれぞれ鐵滓、あるいは炉壁の破片が検出されている。このうち2号墳の墳丘上で出土したものは、混入の疑いもあるが、後二者は、石室内に持ちこまれているという点から被葬者と鉄生産との関わりの深さを暗示するかのようである（註9）。さらに7号棺に副葬されていた短頸壺に入っていたベンガラ（註10）も酸化鉄であるから間接的には資源あるいは原料としての鉄の採取に関わっていたものと言えなくはない。

以上述べてきたように、今回調査の行われたすりばち池古墳群は、6世紀代を中心とした埋葬主体の変遷を知るうえで重要な資料である。また、同時に古墳群の形成の途上において被葬者が鉄生産に関わりを持つ可能性がうかがわれることは、地域の開発の実態を考えるうえで貴重な手掛かりを与えたといえよう。

註

- 註1 岡田博「高本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』1975 岡山県教育委員会
- 註2 下條信行「石器」『古代史発掘2』1975 講談社
- 註3 『私たちの考古学 発掘された大阪 財団法人大阪市文化財協会設立5周年記念』 1984
- 註4 総社市久代の板井砂奥古墳群においては、14基の横穴式石室墳のうち、12基までが谷に向けて開口していた。『総社市埋蔵文化財発掘調査報告9』 1991 総社市教育委員会
- 註5 村上幸雄『稼山古墳群II』 1980 久米開発に伴う埋蔵文化財発掘調査委員会
村上幸雄「古墳時代後期」『岡山県の考古学』 1987 吉川弘文館
終末期において、築造される石室が横穴式石室と言いながら小型化した堅穴式石室的なものとなる、としている。
- 註6 前掲註4書
- 註7 河上邦彦「まとめ」『葛城・石光山古墳群』(奈良県史跡名勝天然記念物発掘調査報告第31集) 1976
- 註8 間壁葭子「岡山県下奈良・平安期墳墓に見る二・三の問題」『倉敷考古館研究集報第16号』 1981
倉敷考古館
なお、この文献に掲げられた火葬墓の容器は圧倒的に薺壺形が多く、瓶を使用した例は少ない。
- 註9 総社市奥坂に所在する千引古墳群を中心とする一帯においては、ゴルフ場の開発に伴う発掘調査で12基の古墳と5カ所の製鉄遺跡などが調査された。古墳については、横穴式石室を主体部とし、石室の内外を問わなければすべての古墳から鉄滓が出土している（武田恭彰「鬼ノ城ゴルフ俱楽部建設に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査年報1』1992）。また、総社市久代の板井砂奥古墳群などでは製鉄遺跡が近接した位置にあるにもかかわらず36基の古墳のうち、石室内から鉄滓を出土したのは3例のみで、対照的である（前掲註4書）。
- 註10 古墳に副葬された須恵器にベンガラが付着していた例として、作東町北山3号墳の坏蓋がある。（松本和男・二宮治夫「北山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973 岡山県教育委員）これ以外にも朱が付着していた、あるいは丹がつめられていた例も散見されるので、これらの中にベンガラの例が含まれている可能性も皆無ではなかろう。

第4章 結語 すりばち池1号墳の石室について

今回の調査では、1号墳に竪穴系横口式石室が採用されていることが判明した。これまでにこの種の石室は、岡山県内においては、砂子山4号墳（註1）、三輪山6号墳（註2）、野田畠1号墳（註3）などが知られているにとどまる。また、これらのほかに葛原克人は、竪穴系横口式石室の例として、邑久町金鶏塚古墳（註4）、笠岡市長福寺裏山古墳群のうち西塚（註5）、真備町大ぐろ古墳（註6）などをあげており、いずれも前IV期の築造と考えている（註7）。ここでは、竪穴系横口式石室について、これまでの研究を参考にし若干の検討を加えることにしよう。

（1）竪穴系横口式石室の分類と伝播

小田富士雄は、佐賀県唐津市迫頭古墳群の調査において、竪穴式石室に横口をとりつけたタイプの石室が在来の竪穴式石室の側から横穴式石室の導入に対応しようとするあらわれと考え、「竪穴系横口式石室」というという名称を提唱し（註8），これの初現として、老司古墳3号石室をあげ、丸隈山古墳を一段と発展したものとしている。また、老司古墳1・4号石室を墓道に竪穴式石室の小口壁を同一レベルにすべて開閉する各地例に連続してゆく構造としている（註9）。また、これら大型・小型の石室はともに横穴式石室として完成されてゆくとともに、竪穴系の個性は失われてしまうとし、この系譜をひく石室は、狭義に認定すべきであると述べている（註10）。

柳沢一男は、横穴式石室を平面図形・壁体構築法のタイプから3つに分け、そのうちの竪穴式石室の短辺に横口部を設けた形態のものに「6世紀前半から中葉に出現する定型化した両袖式石室と区分する便法」として「竪穴系横口式石室」の名称を用いた。また、この種石室を5世紀後半から6世紀前半にかけての北部九州地域における横穴式石室の主体をなすタイプで、6世紀前半代を境として、新たな平面図形の構成法と壁体構築法の導入によって造営が終焉することを指摘し、西日本各地における類例・伝播のありかたを示した（註11）。次いで、「竪穴系横口式石室再考」では、老司古墳3号石室と1・2・4号石室の差異を被葬者レヴェルを表現したものとし、竪穴系横口式石室A型・B型とした（註12）。なお老司古墳3号石室を祖形とする老司タイプは竪穴系横口式石室の範疇には含まれず、竪穴系横口式石室は、A型石室の形成に対応し成立したB型石室に限定すべきと述べている点は注目される。

蒲原宏行は、竪穴系横口式石室を単体埋葬を前提とした竪穴系の埋葬施設を基本的に踏襲したものでなければならないとし、二種八型式に分類した。前壁・楣石を備えるものを除外して

いるが、老司古墳3号石室は例外的に含めている。この起源について、追葬意識の高まりという、北部九州での内的発展が外部からの刺激を起爆剤として生み出したのが竪穴系横口式石室であったとし、経塚山古墳、谷口古墳における埋葬時期の調整を指摘している（註13）。

土生田純之は、竪穴系横口式石室を一方の小口側に階段状の施設をもって横口部を形成し、墓道に接続するものとし、一般的な横穴式石室に変化してゆくものと位置づけ、あくまでも横穴式石室の範疇に含むべきものであろう（註14）とした。

森下浩行は、九州型の石室を平天井の北九州型と穹窿状天井の玄室を特徴とする肥後型石室に分け、さらに北九州型石室を老司古墳3号石室を初現とし鋤崎古墳において定型化する北九州型石室A類と老司古墳1・2・4号石室を初現とする北九州型石室B類に細分した。このうち北九州型石室B類を在来の小型竪穴式石室・箱式石棺に横口部を設けた、いわゆる竪穴系横口式石室とする（註15）。次いで「九州型横穴式石室考」では、さきの北九州型石室B類を蒲原の規定した「竪穴系横口式石室」に加えて、この形態的連続として捉えた楣構造をもつ石室を含め、「竪穴系横口式石室」系横穴式石室とよぶべきものを含むと考えている（註16）。また、段構造・框構造・楣構造などのありかたから、楣構造がみられない点、段構造をもつ点を竪穴系横口式石室の二大要素とする。

柳沢一男は、これらの論考の展開をふまえて、さきに竪穴系横口式石室A類・B類としたものをそれぞれ北部九州型石室・竪穴系横口式石室に改めている（註17）。しかし、谷口古墳を老司古墳3号石室に先行するものしながら、竪穴系横口式石室に含めているなど、なお矛盾点を残しているように見受けられる。また、九州の大型横穴式石室を5期に大別し、その中に北部九州型・肥後型・筑肥型を設定している（註18）。

土井基司は、筑前地方の横穴式石室の検討において、初期横穴式石室・両袖型石室に分け、竪穴系横口式石室を前者のうちで羨道がなく、板石を用いた閉塞を行う、幅1.2m以下、玄室比1.7以上、前壁のない石室、段を有し、墓道は斜めにはいるようになっているのが一般的で、塊石（板石）積み、あるいは板石を立てて内側に突出させて袖部を形作るものが多い（註19）とした。

土生田純之は、初期横穴式石室を築造数が少數で、未だ横穴式石室の構築が定着したとはいがたい段階に本来横穴式石室という墓制と密接に関係する墓制が定着するまでの段階に築造されたもので5世紀代に築造されたものとし、北部九州型石室と中九州・肥後型石室を設定した。前者については、本州・四国のこの種石室は、ほとんどが中北部九州の石室の系譜上にあるか、それと密接な関係を有し、大半は、竪穴系横口式石室や横田下古墳及びその流れをくむ「只」字形石室に属する（註20）とした。

以上概略を述べてきたが、竪穴系横口式石室という用語の定義づけにおいて、大筋では時期

及び形態についてより限定的に用いようとする意見が有力ではあるが、一部には横口を持つ石室のすべてを包括して竪穴系横口式石室とする意見がなお払拭されていないのが実情ではないかと思われる。また、段構造や楣石などの特徴をもつ石室が竪穴系横口式石室の影響を受けた石室、あるいは九州系の石室などと表現される場合があり、それが竪穴系横口式石室という用語の使用において混乱を生じている原因となっているのではないかと思われる。

(2) 竪穴系横口式石室の伝播

竪穴系横口式石室は、北部九州を中心に展開した。この伝播について、最初に詳しく論じたのは柳沢一男で、「竪穴系横口式石室再考」においては、これが瀬戸内海沿岸地域・山陰・近畿から東海にいたる地域に点在し、各地域における横穴式石室造営の隆盛に先行して採用されているとする。そして、形態と構造から、a 九州の竪穴系横口式石室と直接的な系譜関係を辿りうる石室、b 九州の竪穴系横口式石室を祖形としつつも、横口部を設けるというアイディアのみを採用し在地形の石室に取り入れたもの、c 6世紀中葉以降の築造になる地方型というべき石室構成で、九州でこの種の石室の造営がすでに終止した段階のもの、に分類している。a タイプで九州のA型石室に対応するものとして、ムネサカ4号墳、おじょか古墳をあげ、またB型石室に相当するものとしては、朝田1区2号墳、三輪山6号墳、東宮山古墳をあげている。b タイプの例は、空長1・4号墳、経ヶ峰1号墳がある。c タイプは、石光山13・22号墳などをあげている。そして特にムネサカ4号墳・おじょか古墳については、造営集団の派遣を想定している。

小田富士雄は、初期横穴式石室の東伝した例として、山口県馬塚古墳・三輪山6号墳・中宮1号墳・東宮山古墳などをあげ、三輪山6号墳を竪穴系横口式石室とするが、中宮1号墳を横穴式石室で九州の横田下タイプの発展系列に属するとする（註21）。

森下浩行は、九州型横穴式石室の伝播した例として空長1・4号墳・千足古墳・金崎古墳・吉定1号墳（細見神社古墳）・塔塚古墳・藤の森古墳・大通寺3号墳・古佐田陵山古墳・おじょか古墳をあげ、袖の有無により、両袖式・片袖式・無袖式に分け、両袖式を肥後・肥後と肥前南部とを合わせた有明海沿岸部から九州以東へのひとつの流れ、片袖式は、基本的には北九州型A類の影響を受けたもので一部にB類の影響がみられるとする。また、無袖式は主に北九州型B類の影響と考えている。伝播された石室を見ると、九州のすべてのタイプの影響がみられるが、混同が見られたり、追葬がみられなかったり、受容する側に横穴式石室としての意味が理解されていない側面のあることを指摘し、横穴式石室の採用者に中小豪族層を想定している（註22）。

柳沢は、「九州系横穴式石室は飛び石的に西日本各地の古墳に採用された」とし、竪穴系横

口式石室では空長1・4号墳・砂子山4号墳・金崎古墳・八幡山4号墳・経ヶ峰1号墳。寺口忍海古墳群の一部などが5世紀に遡る例で、小型の前方後円墳もあるが概して小円墳のばあいが多く、九州における横穴式石室と竪穴系横口式石室の階層性がそのまま反映している（註23）とみる。

すりばち池1号墳については、年代がほぼ6世紀後半と考えられるので、前述の分類に従えば、柳沢のCタイプに含まれると考えられる。また、竪穴系横口式石室を畿内型石室の採用以前の5世紀代を中心に、おもに北部九州で発展した石室と解するならば、すりばち池1号墳の石室は「竪穴系横口式石室に類似した形態をもつ石室」とすべきであろう。

（3）周辺地域の動向

吉備をとりまく周辺地域では、横穴式石室の導入に際してどのような対応をしているのだろうか。横穴式石室の成立と伝播に関しては、その淵源を朝鮮半島などに求め、出現の時期については北部九州が先行するとみるか、畿内とほぼ同時などの意見が示されている。また、石室の分類においては、九州型と畿内型が設定され、相互の関係について、山崎信二らによって詳細に分析がなされている。

吉備に隣接し、畿内の縁辺部というべき西播地方においては、丁古墳群第3次2号墳が九州型B類竪穴系横口式石室（註24）との共通性が注意され（註25）、また柳沢一男は丁1・2・3号墳を九州Ⅲ期末葉の北部九州型に等しい（註26）とする。これは6世紀末葉であるが6世紀中葉から後半にかけては、玄室平面が方形で、穹窿状天井をもつ西宮古墳・小丸山古墳・丁山頂1号墳・馬立姥塚古墳等が出現する。さらに7世紀代には、複室構造をもつ石室として塚山第1群集墳6号墳・野田2号墳をあげることができ（註27）、吉備地方と著しい差を生じている。また、但馬では、八幡山古墳群・観音塚古墳・大師山古墳群などで6世紀前半ごろまでに竪穴系横口式石室が構築されたことが知られている。

四国では、東宮山古墳・三島神社古墳に畿内型石室の系譜を認めることができる。前者にあっては「伊予的に改変された」あるいは「地方化」と解されているが（註28）、後者については市尾墓山古墳との類似が注意されている（註29）。また、四国最大規模の横穴式石室である王墓山古墳・椀貸塚では、石屋形や複室構造など、北部九州との関係が依然として払拭されない。複室構造がまったく知られない吉備とは大きく異なった様相である。

中国地方では、広島県東部の備後の地域で犬塚1号墳など畿内型がいちはやく採用され、ある程度吉備と一体的な推移を示す。長門・周防は、中四国地方のなかでは複室構造が最も集中する地域であるが、7世紀にはいるとようやく九州の影響を脱し、防府市大日古墳は、7世紀中葉の築造であるが、岩屋山亞式とされる（註30）。

山陰では、細見神社古墳（吉定1号墳）が5世紀代の可能性を考えられている（註31）ほか、金崎1号墳（註32）が竪穴系横口式石室の代表的な例である。出雲市大念寺古墳など畿内型と考えられるものも存在するが、おもに石室形態について北部九州との関わりの深さを示す資料が顕著である。

これらの古墳は、いずれも（畿内型）横穴式石室の本格的な採用と相前後する時期のもので、古墳の埋葬主体が（畿内型）横穴式石室へ収斂してゆくプロセスが地域によって一様ではなかったことを示しているといえよう。

（4）吉備における横穴式石室の採用

吉備における横穴式石室の採用の例としては、砂子山4号墳が前述のように谷口古墳や老司古墳と横口部の構造が類似しているとする意見があるほかに、初期横穴式石室の例としては千足古墳をあげなければならない。横穴式石室の形態が筑肥型（註33）とされることなどからみて、九州から直接もたらされた可能性がきわめて高く、造墓集団の派遣も考えられている。なお、築造年代は墳丘上の埴輪から5世紀第1四半世紀（註34）と考えられている。

総社市三輪山6号墳は、直径約15mの円墳で、玄室長さ2.47m、奥壁幅1.00m、高さ1.39mで、封鎖（玄門）部幅0.9m、天井石は4枚であった。須恵器からみると6世紀初頭の築造であろう。原報告において西川宏は、石室の形態と構造とが竪穴式石室の系統をひく、吉備地方に横穴式石室が普及しはじめる時期のごく初期の古墳（註35）と指摘した。これを最初に竪穴系横口式石室と評価したのは柳沢一男（註36）であったが、現在ではこれを竪穴系横口式石室と考える点では、ほぼ一致をみるにいたっている（註37）。

これらの例は北部九州の石室がそのまま移入されたものと理解されているが、前述の砂子山4号墳も含めてこの種の石室の初現的形態でない点、また直接後続する石室が認められない点に注意が必要である。

三輪山6号墳に類似する構造の石室は、高梁川を隔てて西に約10kmほどの位置にある植木林の塚古墳（註38）に見ることができる。出土遺物は知られておらず年代は不明であるが、これは石室がかなり損なわれているものの、明らかに腰石の手法を用いている点、持ち送りがかなり急であることなどが特徴である。年代の特定は困難であるが、砂子山4号墳からさほど離れていない位置に築造されている点は、示唆的である。

村上幸雄は、導入期の横穴式石室の例として、前述の千足古墳・三輪山6号墳のほかに岡山市宮ノ山古墳などをあげている（註39）。しかしながらこれらは未調査で、石室の構築状況や、出土遺物が不明であることなどにより、まだ疑問点が多く残っているのが実情である。

山崎信二是、吉備地方における畿内型横穴式石室として、金浜古墳（註40）、緑山6号墳（41）、

中宮1号墳（註42）、四つ塚1号墳（註43）などをあげている。以後の吉備における本格的な横穴式石室の導入については、山崎が指摘した4基を軸にした検討が行われているという点において、重要な業績である。

総社市緑山6号墳は、直径15.6mの円墳で、横穴式石室は、全長6.2m、玄室長3.7m、玄室幅2.5mを測り、両袖式である。西川宏は、かつてこれを5世紀末ないし6世紀初頭とした（註44）が、新納泉は、須恵器の型式からTK10併行期とし、緑山8号墳、こうもり塚古墳、箭田大塚古墳に先行すると考えている（註45）。

倉敷市金浜古墳は、直径10m弱の変形した円墳で、左片袖式の石室に短い羨道をもつ横穴式石室を内部主体とする。玄室と羨道の境に平石を埋め込んで障石のように横長にして立てられ、2度以上の埋葬を想定されている。ほぼ6世紀中葉である。山崎信二は、横口部に段をもつ石組を有する点で大和タキハラ5号墳に類似するとみる（註46）。新納泉は、羨道部に竪穴系横口式石室の特徴である段をとどめているようであるが、玄室の平面形は一般的な横穴式石室と共通であるとし、吉備地方の横穴式石室導入期において、山崎が指摘したように三輪山6号墳と金浜古墳との間に劇的な変化はなく、羨道（横口部）と玄室の境界に石をおいて段をつくる手法や石室の石の積み方にも大きな断絶があるとは考えにくいとし、造墓主体の性格が一変したり、造墓工人がいかわったと考えるよりも、袖をもつ新たな石室の形態が導入されたための変化とみるほうがよいのではないかと評価し、畿内の定型的な横穴式石室の出現はMT15（6世紀初頭頃）としている（註47）。しかし、今回調査を実施したすりばち池2号墳と特に側壁の構築方法において共通する面もあり、あるいはこれ在地的手法と見るべきかもしれない。

中宮1号墳・四つ塚1号墳について、白石太一郎は畿内からの影響によって成立したとしている（註48）が細部においては出雲をはじめとする山陰との関連も注意され（註49）、また山崎はすでに在地的改変があったとしている（註50）。なお、中宮1号墳については九州との関連を指摘する意見があることはさきに述べたとおりである。

金浜古墳・緑山6号墳と中宮1号墳・四つ塚1号墳は、須恵器の型式からいずれもほぼ陶邑TK10型式の時期と考えられるが、羨道部の段構造の有無において相違を生じている。段構造については、九州の竪穴系横口式石室の影響に由来すると考える説や、横穴式石室の前方後円墳における墓道の問題とする見解（註51）などがある。そして金浜古墳・緑山6号墳の2基以外にその特徴は継承されていない点に注意が必要である。

ところで、この4基は、最大の緑山6号墳でも墳丘が20m程度と、中小規模を大きく出ないものであるので、このような傾向が、こうもり塚古墳など首長墓系列とどのような関係にあるかなどの問題を残している。吉備の横穴式石室の導入に関しては、まず中小古墳に採用され、首長墓系列が続いたとみるべきか、葛原が指摘したように前IV期の古墳に竪穴系横口式石室が

採用されているか否かなど、今後の資料の増加に待たざるを得ない面も多いのが実情といえ、それはまた畿内型石室の成立そのものにかかる問題（註52）である。畿内型石室の名称を用いる場合、厳密には、畿内型石室と畿内系石室（註53）などの使い分けが必要であろう。また、畿内型そのものの成立の過程について、なお見解の一致をみない現状では、用語の使い方に留意しないと一元的波及と誤って理解されがちであるのは言うまでもない。

現状では、吉備における畿内型石室の受容時にはすでに在地的な改変のあったらしいことを認めざるを得ないようであり、石室の畿内化は、その実態において、畿内において完成されたスタイルとしての畿内型横穴式の移入ではなく、同じ形態の横穴式石室への指向という姿を見せていている。

結論としては、吉備地方における横穴式石室の導入は、前述の九州の影響を強く受けた砂子山4号墳・千足古墳などを別にすれば、畿内型石室が本格的に築造されはじめる前述の4基以降の時期と考えられる。そしてその後は、群集墳にいたるまで横穴式石室がほとんど例外なく採用され、畿内と軌を一にした展開をした。同様な状況は、吉備以外では若狭にみることができ（註54）とされる。また、そのような状況のなかでも家形石棺における浪形石の使用や、美作地方を中心とした陶棺の使用などの相違点も存在しているのは、すでに指摘されているところである。

（5）すりばち池1号墳の位置づけ

すりばち池1号墳の年代は前述のようにほぼ6世紀後半と考えられ、これは九州すでに築造が終わりつつある段階に築造された竪穴系横口式石室とみることができよう。

また、竪穴系横口式石室を畿内型石室の採用以前の5世紀代を中心に、おもに北部九州で発展した石室と解するならば、すりばち池1号墳の石室は「竪穴系横口式石室に類似した形態をもつ石室」とすべきであろう。

これに近い例として、奈良県石光山22号墳（註55）、あるいは奈良県寺口忍海古墳群（註56）などをあげることができる。後者にあっては、古墳の副葬品において鉄器が卓越することなどにより、製鉄あるいは鉄器生産に関与した被葬者集団を想定されている。

すりばち池1号墳の石室の形態は、横穴式石室である緑山6号墳の玄室部と共通する面がある。玄室比は近く、相似形というべきである。石室の構築は、袖部を形成するか否かという点に関してのみ差を生じたと見られなくもない。すりばち池1号墳の場合は、最初から無袖の形を意識して計画されたか、あるいは石室幅が限られているために袖が作られなかったかは、決定しがたい。閉塞部の基底部の石材は、側壁の間に並べられている。石材の用い方は、とくに隅の部分の処理において竪穴式石室である2号墳とは明らかに異なり、側壁を積み上げ、天井

石を架構したのち、閉塞石を斜めに立てかけ、側壁との空隙に小さな割り石を充填し墓道を埋め戻すという構築方法が考えられる。構造からみて、追葬がしやすい形である。しかし、遺物の出土状況からは、追葬の有無は判断できず、また土層の観察を行った限りでは追葬の可能性は低いと言わざるをえないだろう。

以上のことから判断すれば、この石室は、実は既存の横穴式石室の構築方法にのっとって、閉塞部分についてのみ形態的に竪穴系横口式石室の一種である板石閉塞を組み合わせた結果の所産と評価できる。ただ、竪穴系横口式石室の展開においては、板石閉塞は、鋤崎古墳など初期横穴式石室に使われる手法で、時期がくだるにしたがって塊石による閉塞や両袖の横穴式石室へと変化してゆくと考えられるから、年代の隔たりが大きく、初期横穴式石室とは異なった出自あるいは系譜を想定しなければならないだろう。

また、すりばち池1号墳が、通常の横穴式石室墳を主体とする群中に1基のみ存在しており、同形態の石室が後続しないこと、また横穴式石室が本格的に普及する段階に築造されたものであることをどのように評価すべきであろうか。日本における横穴式石室の成立に百済の古墳の影響が認められる（註57）ことはよく知られているところであるが、朝鮮半島の石室がいわば波状の影響を与えてきた（註58）とすれば、その影響の一端が本例に及んでいる可能性も全くないわけではないが、現時点ではそのことを石室の形態・形状以外で証明するてだてではなく、今後関連する資料の蓄積をまって改めて検討を行う機会を得たいと思う。

註

- 註1 間壁忠彦「総社市砂子山古墳群」『倉敷考古館研究集報第19号』 1986 倉敷考古館
鎌木義昌・近藤義郎「砂子山古墳群」『岡山県史 考古資料』 1986 岡山県
鎌木義昌・近藤義郎「砂子山古墳群」『総社市史 考古資料編』 1987 総社市
- 註2 西川宏「備中三輪山6号墳」『古代吉備 第5集』1963 古代吉備研究会
- 註3 高畠知功・福田正継「野田畠古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告21』1977 岡山県教育委員会
- 註4 平井 勝・宇垣匡雅「岡山県長船町亀ヶ原所在の前方後円墳—亀ヶ原大塚古墳と金鶏塚古墳—」
『古代吉備 第12集』1990 古代吉備研究会
- 註5 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁蔵子「長福寺裏山古墳群」 1965 長福寺裏山古墳群・関戸廃寺調査推進委員会
- 註6 永山卯三郎「吉備郡史 卷上」 1939
- 註7 葛原克人「巨墳の造営」『岡山県史 原始古代I』 1991 岡山県
- 註8 小田富士雄「古墳文化の地域的特色 九州」『日本の考古学IV』 1966 河出書房新社
- 註9 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」『東アジア世界における日本古代史講座第4巻』 1980 学生社
- 註10 小田富士雄「古墳時代」『図説発掘が語る日本史6』 1986 新人物往来社
- 註11 柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開 平面图形と尺度について」『九州考古学の諸問題』1975 東出版寧楽社

- 註12 柳沢一男「豎穴系横口式石室再考 初期横穴式石室の系譜」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集 下巻』1982 同論文集刊行会
- 註13 蒲原正行「豎穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』1983 雄山閣
- 註14 土生田純之「九州の横穴式石室」『古文化談叢 第12集』1983 九州古文化研究会
- 註15 森下浩行「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究 第 111号』1986 古代学研究会
- 註16 森下浩行「九州型石室考」『古代学研究 第 115号』1987 古代学研究会
- 註17 柳沢一男「古墳の変質」『古代を考える 古墳』1989 吉川弘文館
- 註18 柳沢一男「地域の古墳 九州と畿内」『横穴式石室を考える』1991 帝塚山考古学研究所
- 註19 土井基司「豎穴系横口式石室小考」『岡山大学構内遺跡研究年報 6 1988年度』岡山大学埋蔵文化財調査センター
- 註20 土生田純之『日本横穴式石室の系譜』1991 学生社
- 註21 前掲註10書
- 註22 前掲註15・16書
- 註23 前掲註17書
- 註24 前掲註16書
- 註25 上田哲也「播磨地方における横穴式石室の採用と展開」『末永先生米壽記念獻呈論文集乾』1985
- 註26 前掲註18書
- 註27 岡野慶雄「地域の古墳 九州と畿内」『横穴式石室を考える』1991 帝塚山考古学研究所
- 註28 山崎信二「横穴式石室の地域的研究 中四国編」1986
- 註29 宮原晋一「市尾墓山古墳の再検討」『権原考古学研究所論集第九』1988 吉川弘文館
- 註30 前掲註28書
- 註31 前掲註16書ほか
- 註32 柳沢一男と土生田純之は、石室の開口方向について異なった見解を示している。註12・20書参照
- 註33 前掲註18書
- 註34 島崎 東「備中国千足古墳採集の埴輪について」『古代吉備 第 9集』1987 古代吉備研究会
- 註35 前掲註 2 書
- 註36 前掲註11書
- 註37 西川 宏「小型古墳と横穴式石室の普及」『岡山県史 原始古代 I』1991 岡山県 など
- 註38 村上幸雄「楨木林の塚」『総社市史 考古資料編』1987 総社市
- 註39 村上幸雄「古墳時代後期」『岡山県の考古学』1987 吉川弘文館
- 註40 間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報第14号』1980 倉敷考古館
- 註41 近藤義郎・北條芳隆編『緑山古墳群』1987 総社市文化振興財団
- 註42 近藤義郎『佐良山古墳群の研究 第 1 冊』1952 津山市
- 註43 近藤義郎『蒜山原 その考古学的調査』1954 岡山県
- 註44 近藤義郎『四つ塚古墳群（改訂版）』1992 八束村
- 註45 西川 宏「吉備の国」1975 学生社
- 註46 新納 泉「緑山古墳群の形成過程」『緑山古墳群』1987 総社市文化振興財団
- 註47 新納 泉「吉備地域への横穴式石室導入の背景」『古代吉備第10集』1988 古代吉備研究会
- 註48 白石太一郎「日本における横穴式石室の系譜 横穴式石室の受容に関する一考察」『先史学研究 5』1965

- 註49 前掲註37書
- 註50 前掲註28書
- 註51 前掲註29書
- 註52 周知のとおり、畿内における古式の横穴式石室については、いわゆる大王墓の実態が不明であることが研究の支障となっている
- 註53 前掲註20書
　　畿内型石室で在地的要素のあるもの畿内系石室として区分すべきとしている
- 註54 前掲註20書
- 註55 白石太一郎ほか「葛城・石光山古墳群」『奈良県史跡名勝天然記念物発掘調査報告 第31集』1976 奈良県
- 註56 千賀 久「寺口忍海古墳群」『新庄町文化財発掘調査報告第1集』1989 新庄町教育委員会
- 註 前掲註47書
- 註57 永島暉臣慎「横穴式石室の源流を探る」『共同研究日本と朝鮮の古代史』1979 三省堂ほか
- 註58 前掲註17書
　　また、堅穴系横口式石室の無袖の例について、伽耶地域との関連を指摘する意見もある
　　亀田修一「百濟地域の初期横穴式石室」『季刊考古学 第33号』1990 雄山閣

なお、古瀬清秀、亀田修一、伊藤実の各氏には、文献の御教示を賜った。文末ながら記して謝意を表するものである。



1. すりばち池古墳群近景（調査前・南から）

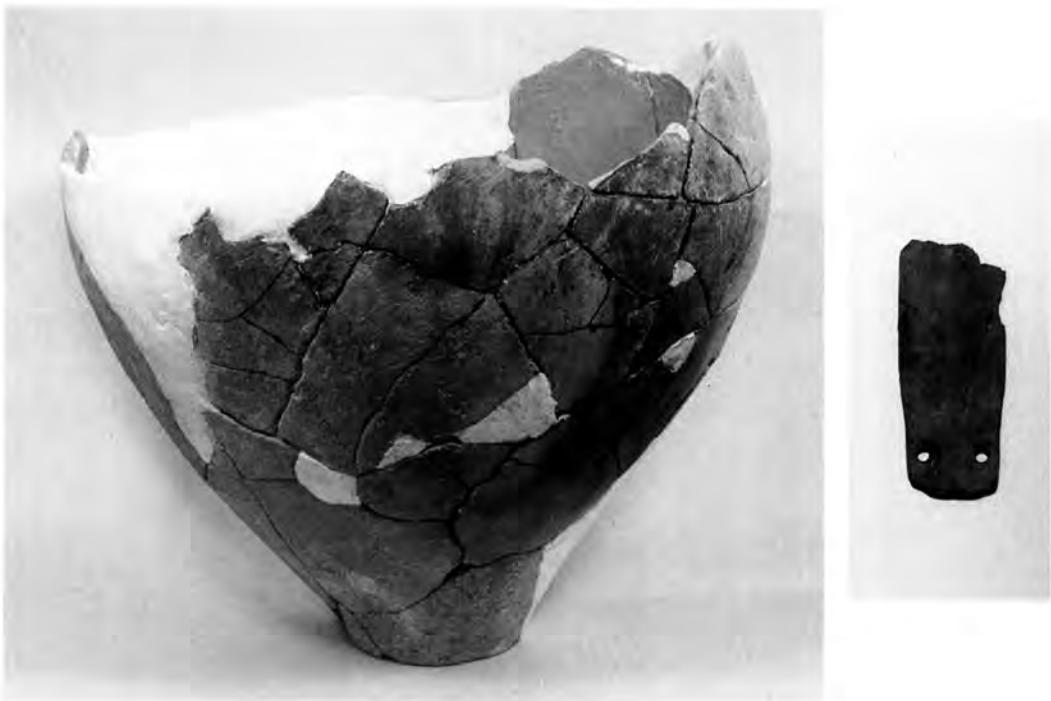


2. すりばち池古墳群近景（調査後・南から）

図版 2



1. 壺棺墓検出状況



2. 弥生時代出土遺物

図版 3



1. 1号墳近景（調査前・北から）



2. 1号墳全景（調査後・北から）

図版4



1. 1号墳石室奥壁



2. 1号墳石室閉塞部



1. 1号墳石室閉塞部



2. 1号墳閉塞部馬具出土状況

図版 6



1. 1号墳墳丘土層断面



2. 1号墳周溝遺物出土状況

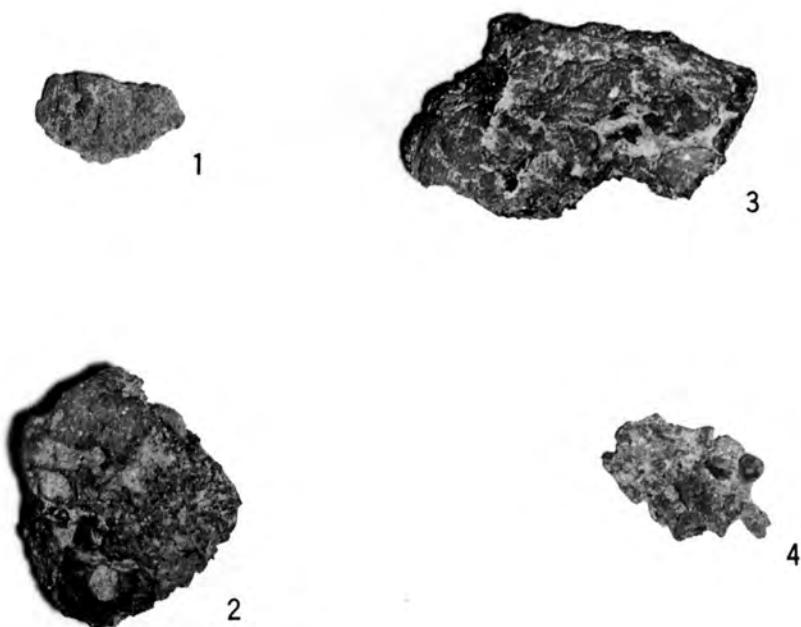


1号墳出土遺物 1

図版 8



1. 1号墳出土遺物 2



2. 古墳群出土鉄滓 (1:1号墳, 2:2号墳, 3・4:5号墳)



1. 2号墳全景（調査後・北から）



2. 2号墳石室（北から）

図版10



1. 2号墳墳丘遺物出土状況



2. 2号墳石室遺物出土状況

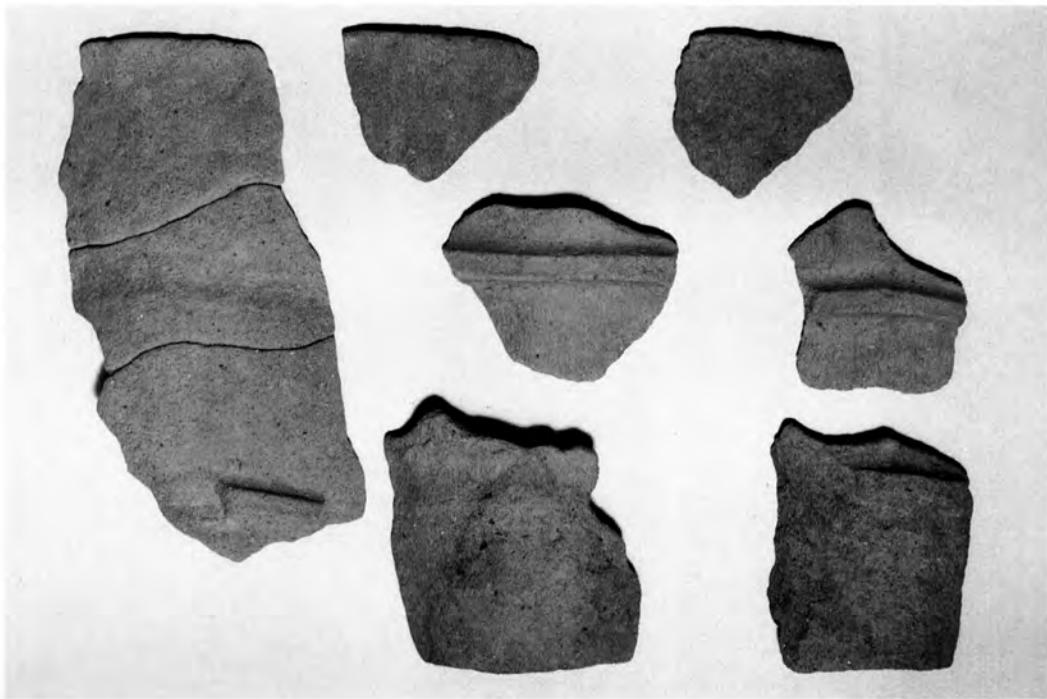


2号墳出土遺物 1

図版12



1. 2号墳出土遺物 2



2. 2号墳出土遺物 3



1. 4号墳近景（調査前・南から）



2. 4号墳全景（調査後・東から）

图版14



1. 4号墳遺物出土状況



2. 4号墳出土遺物



1. 5号墳全景（調査後・南から）



2. 5号墳石室検出状況

図版16



1. 5号墳石室内遺物出土状況 1



2. 5号墳石室内遺物出土状況 2

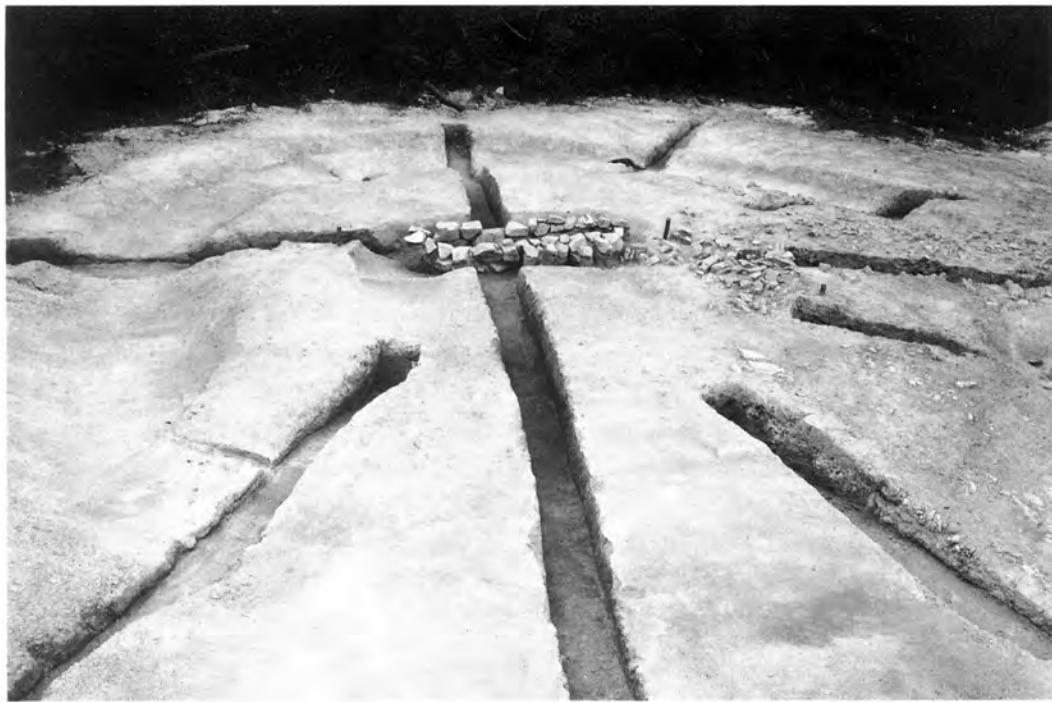


5号墳出土遺物

図版18



1. 7号墳全景（東から）



2. 7号墳全景（南から）



1. 1号棺土器床検出状況（北から）



2. 1号棺検出状況（南から）

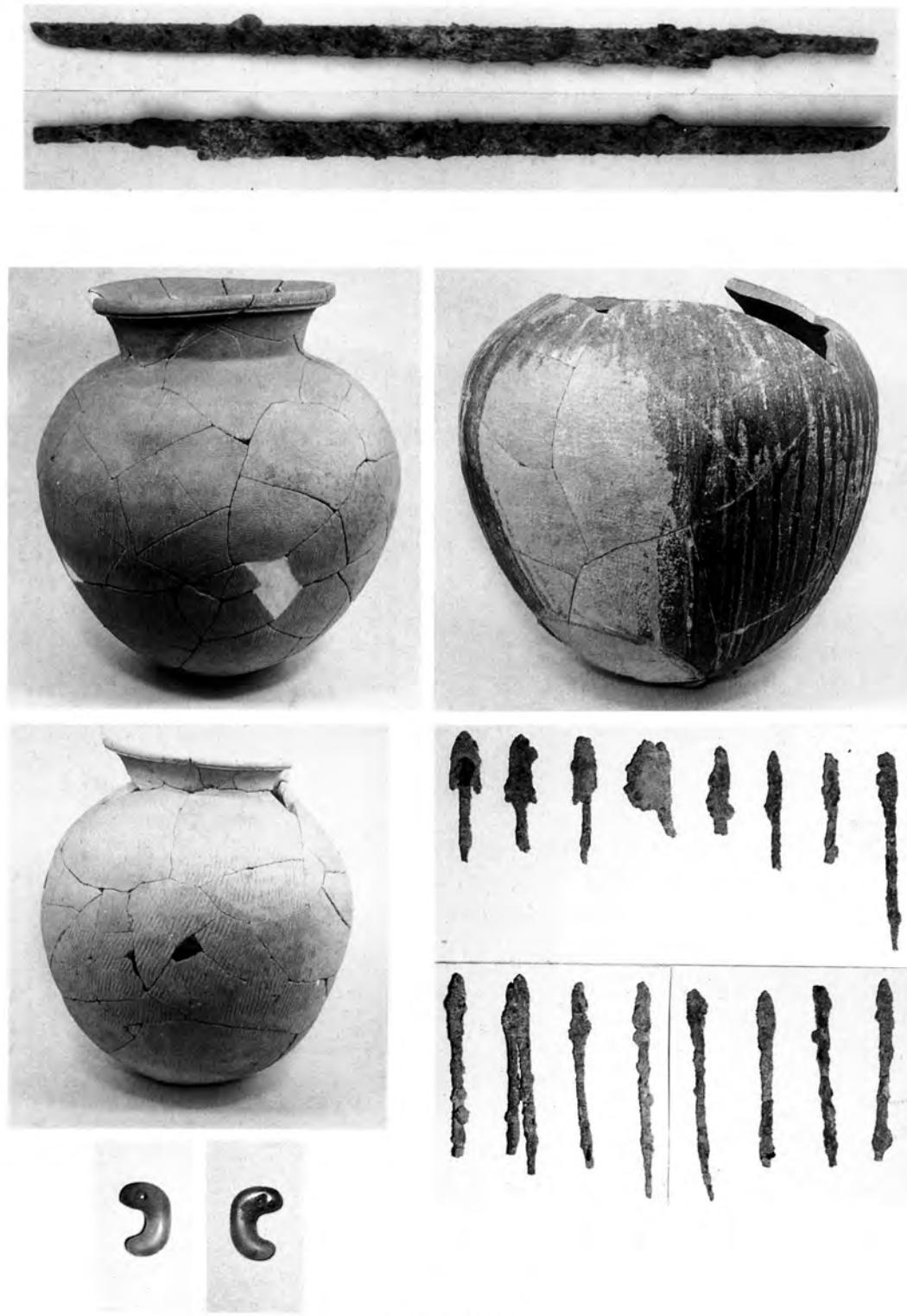


3. 1号棺勾玉出土状況



4. 1号棺鉄器出土状況

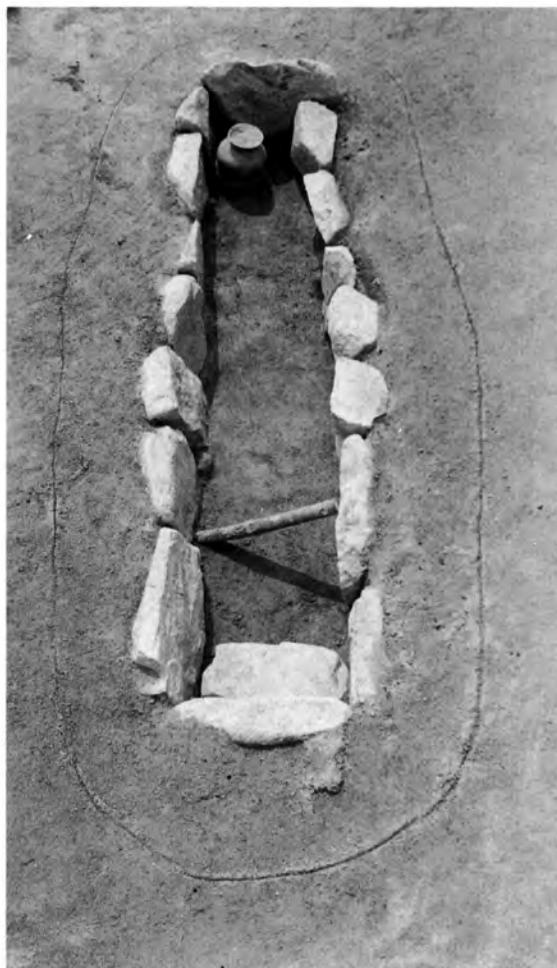
図版20



1号棺出土遺物



1. 2号棺蓋石検出状況



2. 2号棺遺物検出状況



3. 2号棺検出状況

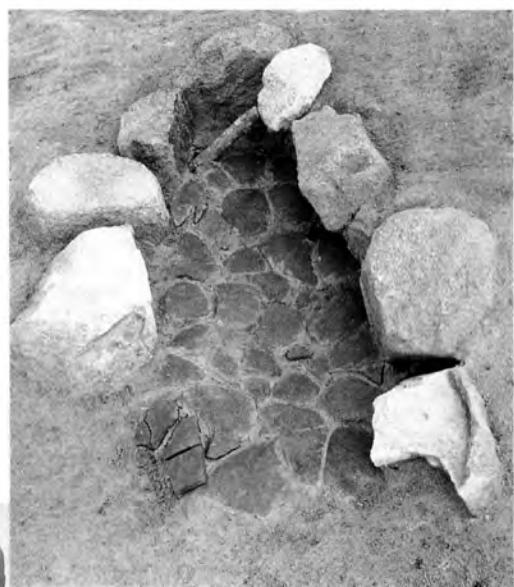


4. 2号棺出土遺物

図版22



1. 3号棺検出状況



2. 4号棺検出状況



3. 4号棺出土遺物



1. 5号棺蓋石検出状況



2. 5号棺検出状況

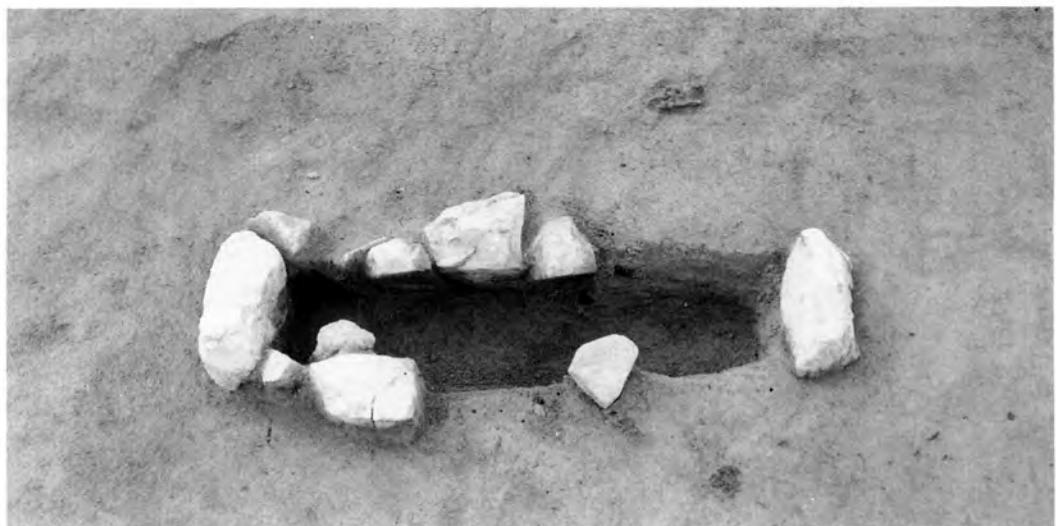


3. 5号棺遺物出土状況

図版24



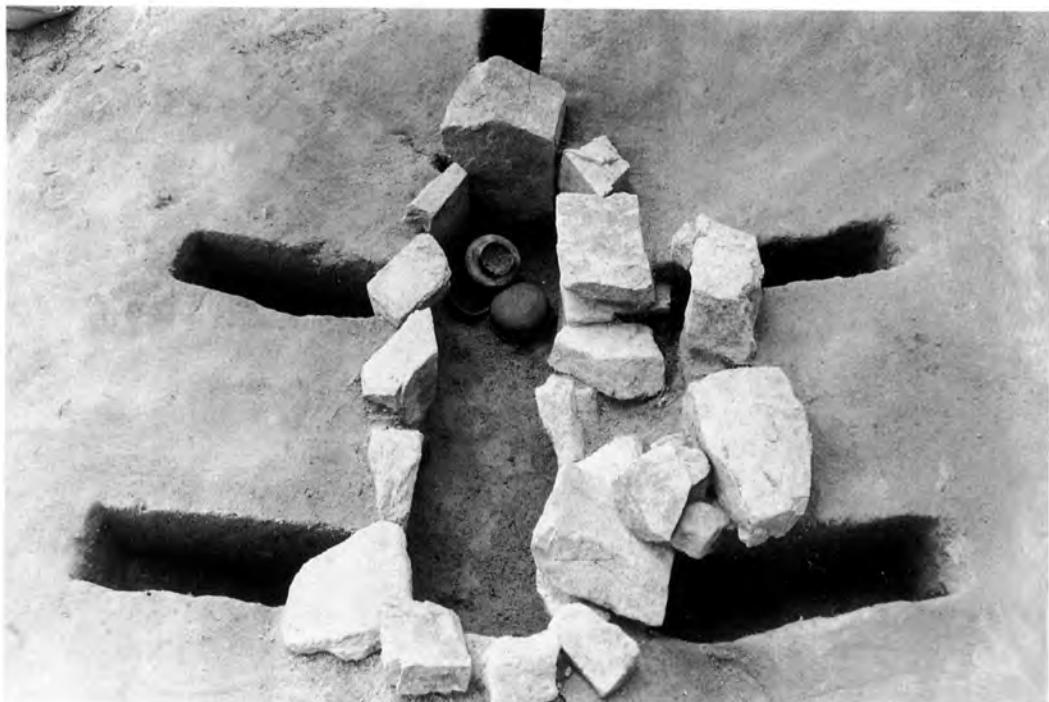
1. 5号棺出土遺物



2. 6号棺検出状況



3. 6号棺出土遺物



1. 7号棺検出状況



2. 7号棺遺物出土状況 1

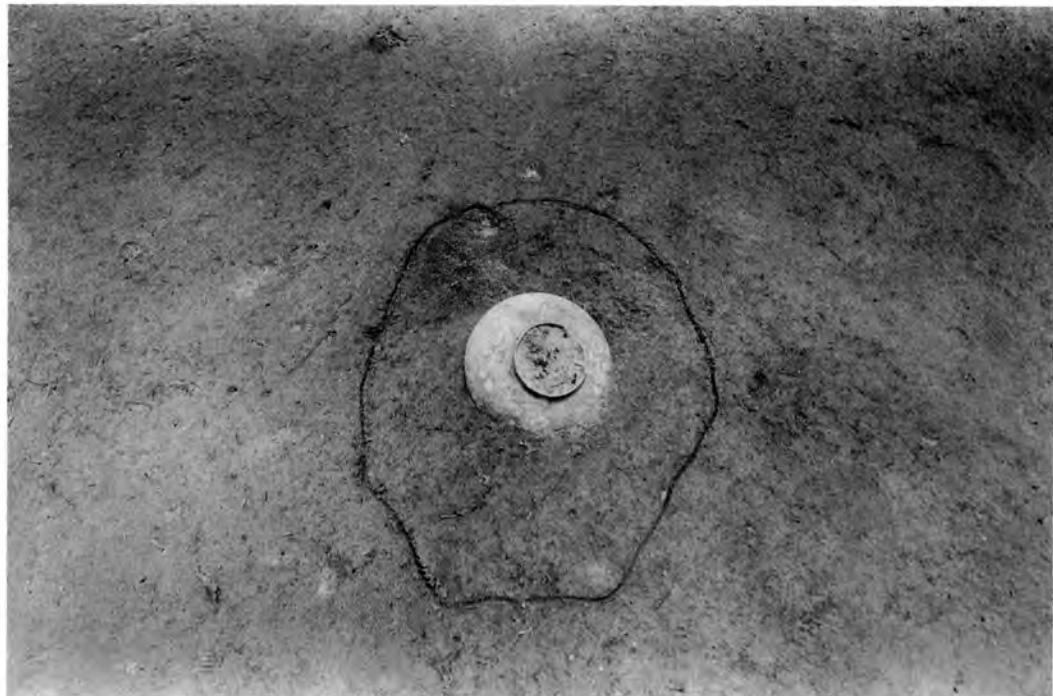
図版26



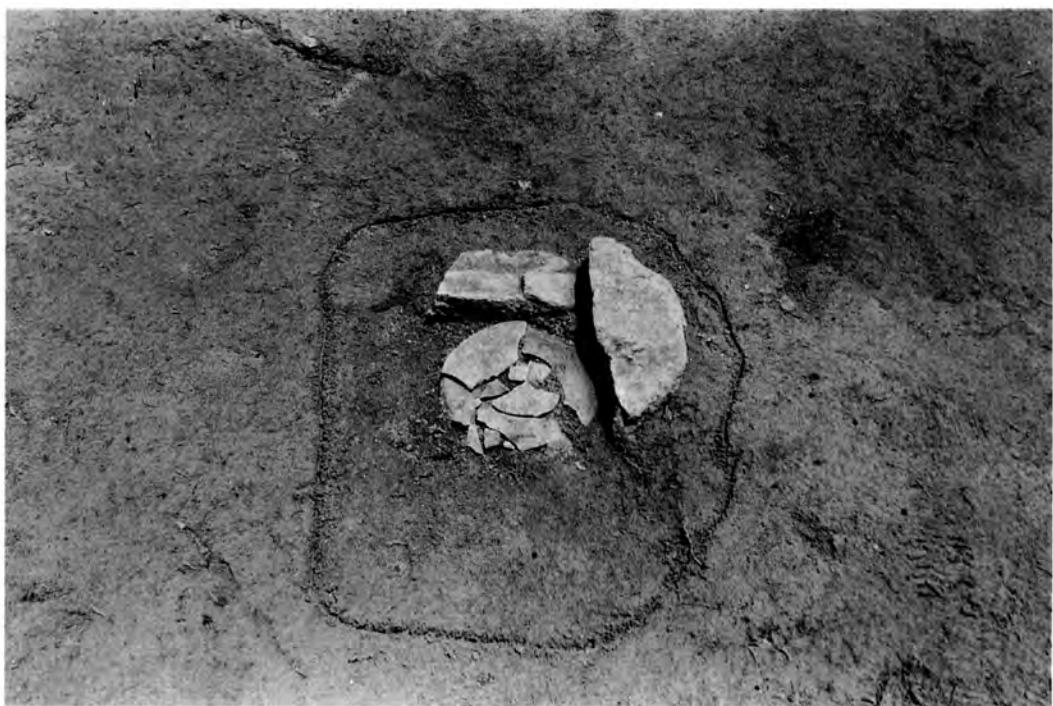
1. 7号棺遺物出土状況2



2. 7号棺出土遺物



1. 1号墓検出状況



2. 2号墓検出状況

図版28



1. 1号墓出土遺物



2. 2号墓出土遺物



3. 3号墓出土遺物

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 13

すりばち池古墳群

1993年3月 印刷

1993年3月 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

